

* 0033526000 *

0033526-000

361-Ka91-2ウ

社会学序論

川辺喜三郎・著

敬文堂書店

昭和16

AGA

913
69

24. 11. 24

361

KA91
2

社 會 學 序 論



早稻田大學教授

川邊喜三郎著

東京・牛込



序 文

本書は初めて社會學に志す人々の爲に、社會學一般に関する概念を與へることを主眼とする。第一章は社會科學と社會學との意味を闡明し、第二章は過去に於て社會學の建設發達に貢獻した學界の權威者達を、主なる學派に亘つて代表的に選擇して其の學說の要點を紹介する。第三章には社會其のものに関する理論法則を述べ、第四章に於には社會生活の統制機能に関する理論を取扱ひ、第五章では、等しく社會統制機關ではあるが、最近世界的非常事局下に於て躍進的に其の機能を擴大し、驚異的威力を發揮しつつある「宣傳」なるものを、新しき試みとして特に一章を設けて、これに社會學的解釋を與へた。

従つて本書を読むには、以上の順序に章を追うて進んで差支ない筈ではあるが、併し愈々印刷校了後考へて見ると、第二章の社會理論紹介は初學者に對しては其のまゝ直ちに取りかゝつたのでは、多少難解であるかとも思はれる。尤も出来るだけ平易簡明に説明したつもりではあるが、苟くも學界の功勞者である世界の權威者達の心血を灌いだ業績を、餘りに單純に通俗化して紹介することは、少くとも研究的書物の關する限りに於ては、彼等に對する學徒としての禮を失するきらひがあることを懼れ、一方簡明を期すると同時に、他方出來

得るだけ忠實に其の眞價を傳へたいと心掛けたのであつた。其の結果として、出来上つたものを後から眺めて見れば、全くの初學者に對しては、そこに幾分の無理があつたかとも考へられる。そこで本書に依て初めて社會學を學ぼうとする人達は、先づ第一章、第三章、第四章、第五章の順に讀んで大體の社會學的基礎知識を得られ、然る後に第二章を讀むのが得策ではないかと考へる。敢て蛇足を加へて、讀者の御參考に供する次第である。

本書は元來社會學の初等的研究書として書いたものである。一般的通俗書としては、著者は別に「社會學概説」があり、更に深く理論社會學を研究する人達の爲には、「社會學原論」及び「社會學綱要」がある。又社會思想研究に對しては「社會主義新批判」及び「社會思想批判」があり、社會問題及び應用社會學の研究に關しては「病める社會」がある。又新聞と輿論と政治との聯關作用の研究に、米國シカゴ大學出版部發行の、英文“The Press and Politics in Japan”がある。これらの著書は、本書と共に皆著者の社會學體系の一環を成すものである。

昭和十六年春

新緑もゆる多摩河畔の茅屋にて

川邊喜三郎 するす

社會學序論

目 次

第一章 社會科學と社會學	1
第一節 科 學	1
(一) 點系化された知識	2
(二) 因果律的知識	3
(三) 概化又は一般化された知識	3
(四) 經驗的知識	4
第二節 自然科學、文化科學、社會科學	5
第三節 社會科學としての社會學	12
第四節 社會學の目的	15
第五節 社會學の領域	17
第一款 理論社會學	17
第二款 社會心理學	19
第三款 社會學史	20
第四款 應用社會學	21
第五款 社會學の定義	26
第二章 社會學の發達	33

第一節 序 説.....	33
第二節 オギュスト・コント.....	35
第一款 コントの略傳.....	35
第二款 實 證 哲 學.....	36
第三款 社 會 靜 學.....	39
第四款 社 會 動 學.....	40
第五款 人道教又は人類教.....	43
第三節 ハーバート・スペンサー.....	44
第一款 スペンサーの略傳.....	45
第二款 社 會 靜 學.....	47
第三款 第 一 原 理.....	50
第一項 可知不可知.....	50
(一) 不可知者.....	51
(二) 可 知 者.....	52
第二項 進化の法則.....	54
第四款 社 會 學 原 理.....	60
第一項 社會學的與件.....	60
第二項 社會學の歸納.....	61
第五款 要 畧.....	64
第四節 レスター・ワード.....	66
第一款 ウォードの略傳.....	66
第二款 ウォードの社會學の重要點.....	68
第三款 一元的宇宙觀.....	69

第四款 集合の法則.....	71
第一項 第一次的集合、即ち宇宙進化(Cosmogony) — 物質の生成.....	71
第二項 第二次的集合、即ち生物發生學(Biogeny)、 精神發生學(Psychogeny) 及び人類發生學 (Anthropogeny).....	73
第三項 第三次的集合、即ち社會發生論(Sociogeny).....	76
第五款 社會力—感情又は欲望—動的作用.....	77
第六款 叡智の指導力.....	80
第七款 人爲的目的と進歩の自然的進歩に對する優越.....	83
第八款 動 能.....	85
第九款 人間動能の目的.....	85
第十款 純粹社會學と應用社會學.....	90
第一項 純粹社會學.....	91
第二項 應用社會學.....	92
第五節 ガブリエル・タルド.....	96
第一款 タルドの略傳.....	96
第二款 根本社會法則.....	97
第三款 現象の反復—模倣.....	98
第四款 論理的模倣の法則と論理外模倣の法則.....	100
第一項 論理的模倣の法則.....	100
第二項 論理外模倣の法則.....	102
第五款 現象の對立.....	105

第一項 衝突的對立	106
第二項 旋律的對立	107
第六款 現象の適應	108
第七款 結 論	111
第六節 ルードヴィッヒ・グンプロヴィッチ	112
第一款 グンプロヴィッチの略傳	113
第二款 集團優位主義	114
第三款 社會過程論	115
第四款 進歩に對する悲觀說	117
第五款 結 論	119
第七節 グスターフ・ラッツェンホーファー	121
第一款 ラッツェンホーファーの略傳	121
第二款 社會過程	123
第三款 關心社會力	129
第四款 結 論	132
第八節 マルクス社會學	134
第一款 マルクスの略傳	134
第二款 マルクス社會學	140
第三款 史的唯物論	142
第四款 史的唯物論の科學物認識	145
第五款 階級闘争說	149
第六款 結 論	153
第九節 ジンメル及び其の他の形式社會學	154

第一款 ゲオルヒ・ジンメル	154
第二款 綜合社會學の批判	155
第三款 形式社會學の主張	157
第四款 ジンメル以外の形式社會學	159
第一項 ファーディナンド・テンニース	159
第二項 アルフレッド・フィーアカント	162
第三項 レオポルド・フォン・ヴィーゼ	165
第五款 結 論	167
第十節 エミール・デュルケームと集合表象學派	173
第一款 デュルケーム	173
第二款 デュルケーム學派の特徴	175
第三款 デュルケームの社會分業論	176
第四款 自殺論	180
第五款 宗教論	183
第六款 時間・空間・其の他の觀念	186
第七款 結 論	187
第三章 社 會	195
第一節 社會の成立	195
第一款 複數人の結合	195
第二款 心的相互作用	195
第三款 心的交通	197
第四款 社會の定義	198

第二節 社會心意	199
第一款 社會心意の意義	199
第二款 社會心意の内容	200
第三款 社會心意の現實性	200
第三節 社會意志と社會個性	201
第一款 社會意志	201
第二款 社會個性	202
第四節 社會の類型	203
第一款 發生社會又は生成社會及び構成社會又は組成社會	203
第二款 共同社會と利益社會、第一次的集團と第二次的集團	206
第三款 大社會と部分社會	206
第五節 社會の統一	207
第一款 社會統一の必要	207
第二款 社會調整	207
第三款 社會調整と社會協働	208
第四款 社會調整と社會組織	209
第五款 社會調整と社會秩序	210
第六節 社會統一の動因	211
第一款 自然環境	211
第二款 生物學的状態	211
第三款 本能的傾向	212
第四款 習 慣	213
第五款 感 情	213

第六款 觀念と評價	214
第七款 意識的社會統制	214
第七節 社會の存續	215
第一款 社會存續	215
第二款 社會存續の物的基礎	216
第三款 慣 習	218
第四款 傳 統	218
第五款 傳統主義	219
第八節 社會の變動	220
第一款 無意識的社會變動	220
第二款 意識的社會變動	222
第三款 批判期と建設期の循環性	223
第四款 過渡期と混亂	224
第五款 保守主義と急進主義	225
第九節 異常社會變動	226
第一款 社會的不動と革命	226
第二款 社會革命の動因	229
第三款 漫性的社會革命	231
第四款 革命の獨裁者	232
第五款 革命の防止	234
第四章 社會統制	236
第一節 統一と秩序	236

第二節 秩序と統制	236
第三節 自然の秩序	237
第四節 宗教	240
第五節 傳統慣習	241
第六節 道德教育	241
第七節 理想	242
第八節 儀禮	243
第九節 藝術	244
第十節 偉人	247
第十一節 知識教育	248
第十二節 幻想	249
第十三節 法律	249
第十四節 輿論	251
第五章 宣傳と社會統制	56
第一節 宣傳の社會統制作用	256
第一款 宣傳の意義	256
第二款 交通の發達と宣傳	258
第二節 宣傳の政治經濟的統制力	259
第一款 國民的意欲願望と國家統治	256
第二款 政治は宣傳	261
第三節 宣傳の種類	262

第一款 直接宣傳	262
第二款 間接宣傳	264
第四節 宣傳の基礎的社會心理作用	265
第一款 既存の集團意欲と宣傳	265
第二款 不合理模倣と宣傳	267
第五節 戦争と宣傳	269
第一款 武力戦・經濟戦・宣傳戦	269
第二款 宣傳の統一	269
第三款 戦争責任の敵國への轉嫁——聖戰主義	270
第四款 自國文化の宣揚	270
第五款 信仰形態の利用	271
第六款 敵の鬼畜性の宣傳	272
第七款 戦勝信念の支配	272
第八款 同盟國間の協力強化	273
第九款 中立諸國の同情援助獲得	274
第十款 敵の士氣攪亂	275

社會學序論

川邊喜三郎

第一章 社會科學と社會學

第一節 科 學

現今社會學と稱するものの中には、まだ思辨哲學的色彩の濃厚なものと、又反對に極端に自然科學的經驗科學にならうとするものと、更にこれら兩者の中間帶を歩むものが共々含まれてゐる。そして、これらが互に自己の立場を主張して相争つてゐるのであるから、其の錯綜した關係は頗る紛らわしいのである。が併し、これらの諸學派や諸學說中で、どれが本當の社會學であつて、他は皆間違ひであると云つた風に、簡單明瞭に片づけてしまふ譯には行かない。それらの中の大部分は、皆それぞれの目的に應じて、或は一種の社會學として、又は少くとも社會學的研究として、何等かの存在の意義をもつものだからである。

が併し、今や大多數の人達に依つて一般に社會學として了解されるものは、其の研究態度に於て、益々經驗科學的、又

少くとも實證哲學的にならうとする傾向を著しく現はして居り、そして其の研究が經驗科學としての立場から成功し得た程度に正比例して、學としての發達過程を示してゐることは明かである。そこで、社會學そのものゝ研究に入る前に、一種の豫備知識として、先づ科學とは何んであるかの意味を明かにし、次いで科學と社會科學及び社會學との關係を見、更に進んで社會學の目的や領域に就て考へて見たい。

科學の特質は次の如くである。

(一)體系化された知識

第一、科學とは體系化された知識と云ふことである。ラテン語の Scientia から出た英佛の Science 又は獨逸の Wissenschaft と云ふ語から採つた言葉であつて、元來皆知識と云ふ意味である。併し同じ知識でも、非系統的、斷片的なものは常識と呼び、組織的に統一されたものだけを學又は科學と呼ぶのである。

古くは單に學と云ふ事と、科學と云ふ事とを、漠然と混淆して用ひたが、近世に至つて、等しく學に屬するものも、これを哲學と科學と二つに大別するやうになつた。そして、科學は吾人の經驗する現象、及びそれ等の現象間に見出される因果關係に對する、系統的知識を得る方法であり、哲學は現象の基礎たる本質及び現象を認識する方法の研究を爲すと同時に、又科學全體に亘つてこれを総合的に考察批判する方



法である。哲學はギリシヤ語の philosophia (philo 愛 + sophia 智) 即ち愛智と云ふ語から出たものであり、古くは學と云へば皆哲學の下に屬したものであつた。

(二)因果律的知識

單に體系づけられただけでは、學にはなり得てもまだ科學とは云ひ得ない。例へば歴史學が、事實の知識を單に時間的に整序したり、地理學が空間的に配列し組織立てても、それだけではまだ科學と呼ぶ事は出来ない。これ等の學問が、研究對象たる事實間の因果關係を確立することに依つて、知識を組織的に統一する時始めて科學となるのである。

因果の觀念それ自體は、元來先驗的原理であり、そして、嚴密な意味に於ては、時間的な必然的繼起を意味するのである。併し今日の人智の限度に於ては、自然科學の範圍に於てさへ、嚴密な必然繼起は極めて僅少であつて、今尙偶然的發生又は同時的發生現象が多い。従つて一方必然的因果律が存在すると同時に、他方多分の蓋然律、傾向律等も因果の關係中に含ませて考へるのである。尤も吾人の知識が増加するに連れて、蓋然的なものも漸次必然的なものに歸屬すべき可能性はある。そして科學の希望と努力は、茲に存在するのである。

(三)概化又は一般化された知識

因果の關係の研究は、同時に又一般法則の研究である。そ

これは種々の現象が、一般的に前後的又は同時に相關連して發生し存在することを示さんが爲に、事實を整序する。中には類型的整序を主眼とし、因果關係の考慮は第二次的にする所の分類科學と稱するものもある。例へば植物學や動物學の一部の研究の如きものである。併しこれ等も、其の因果律的部分の増大に正比例して科學性が高まつてくるのである。

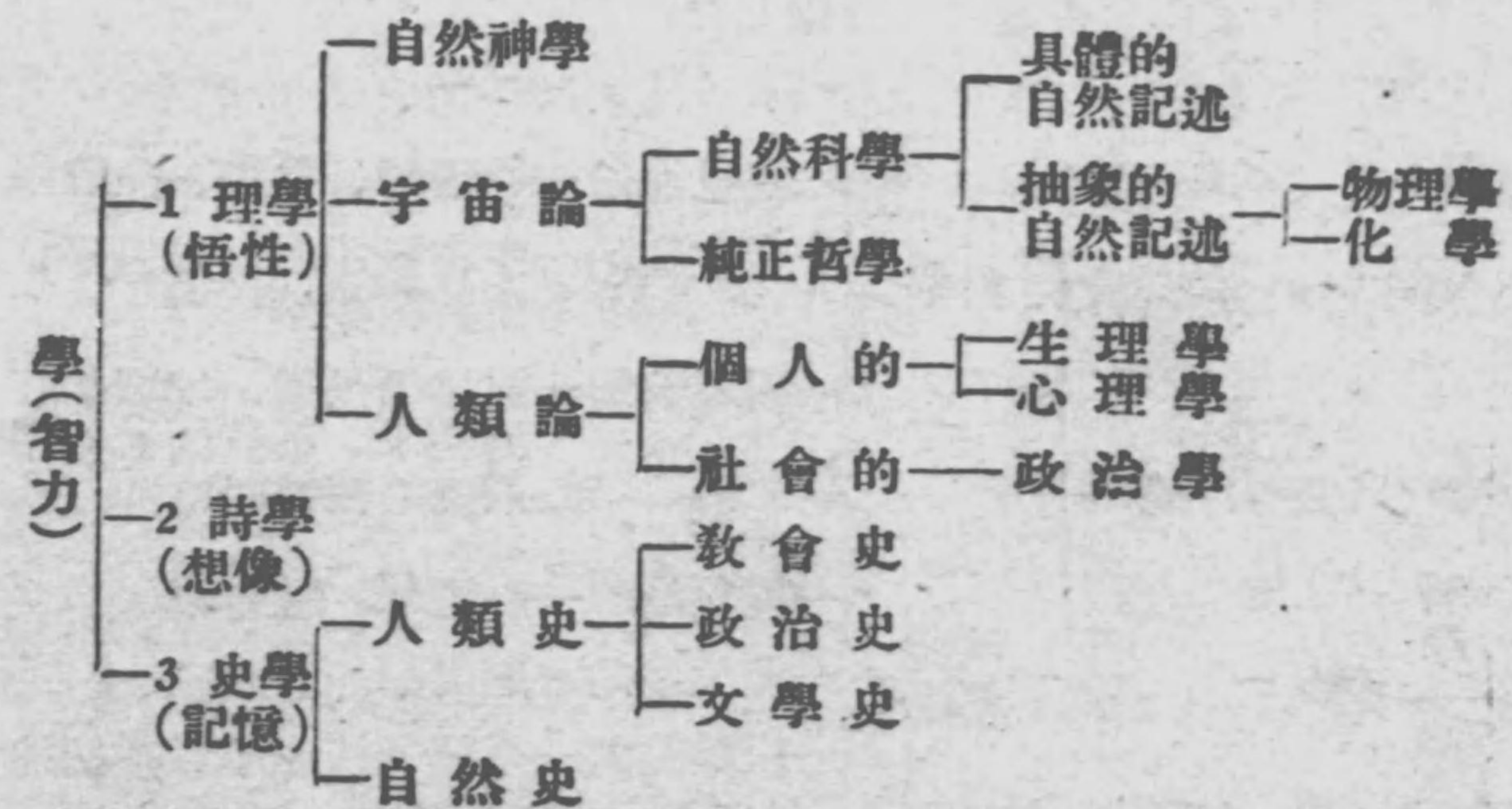
(四)經驗的知識

體系づけられた、因果律的、一般的知識の中には、超經驗的對象を取扱ふ思辨的形而上學や、形式科學と呼ばれる形式論理學と純粹數學なども含まれ、哲學上はこれ等の學をも廣く科學と名付けて居る。併し今日普通の用法に於ては、科學と云ふ言葉の中には、斯様なものは含まないで、單に經驗的對象又は現象を取扱ふ科學だけを意味する。勿論所謂超經驗科學でも、發生學的に見れば、必ず皆經驗を基礎として始めて成り立つものであるが、併し既に出來上つた形式それ自體內に於ては、直接經驗に立入らずに、單に形式だけを論ずることが出来るから、これを超驗科學と呼ぶのである。

即ち今日の一般用法に於ては、科學と云ふ語は、經驗科學 epmerical science, 實驗科學 experimental science, 歸納科學 inductive science, 實證科學 positive science 等と同じ意味で了解される。だから、大體に於て、科學とは因果律的に整序された實證的知識の體系であると云ひ得る。

第二節 自然科學、文化科學、社會科學

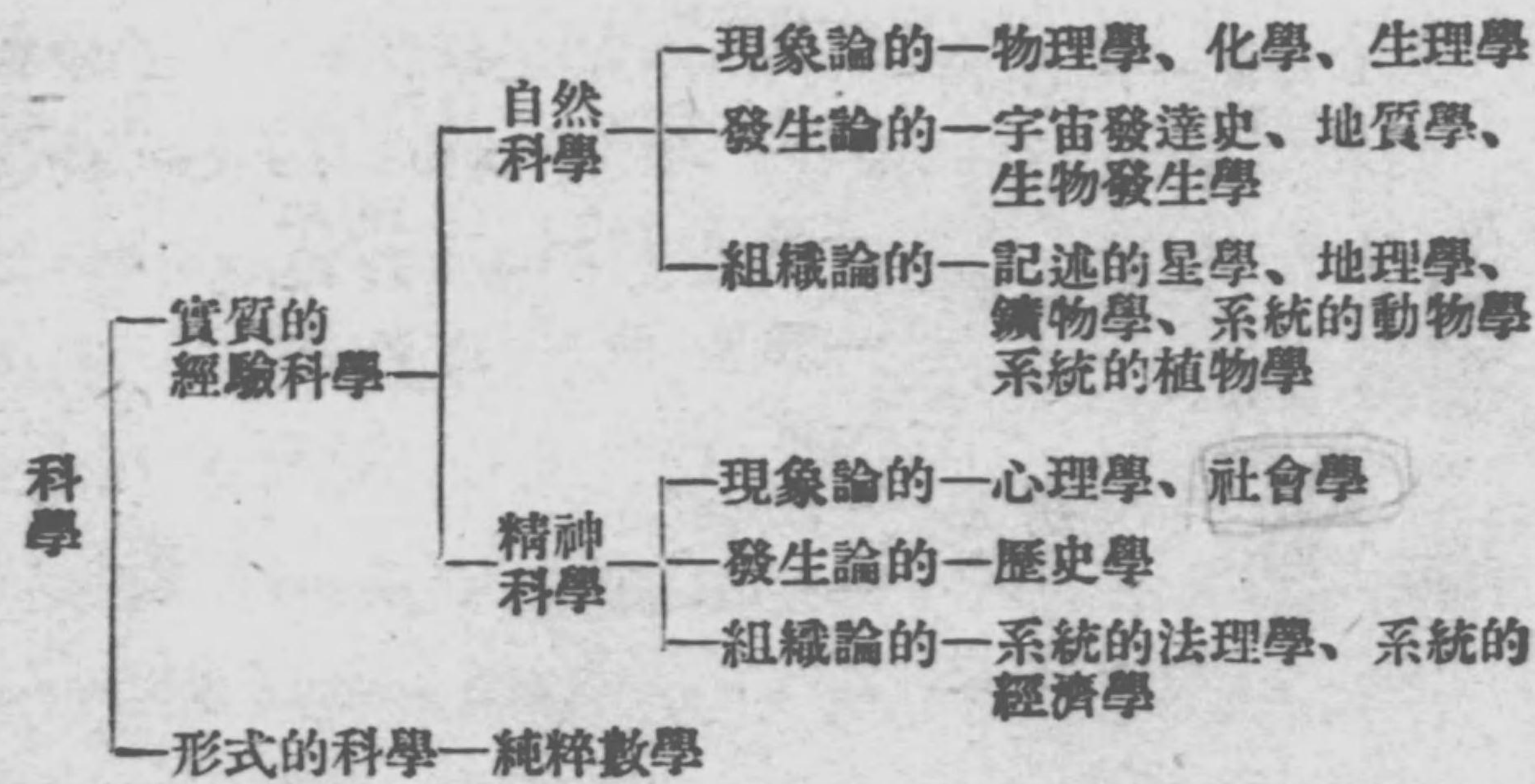
學の近代的分類は、第十七世紀の初に、英國の哲學者フランシス・ベーコン Francis Bacon(1561—1626)の作つたものが、先づ現代科學の初めの明哲な分類である。彼れは當時の心理學が人間の精神能力を悟性、想像、記憶の三種に大別した分類法を基礎として、悟性に依るものを理學、想像に依るものを詩學、記憶に依るものを史學とし、更にこれ等を次の表の如くに細別した。



次いで、十九世紀の初め英國の道德學者ベンサム Jeremy Bentham (1748—1832) は、科學の研究對象の區別によつて、

肉體學 Somatology 及び精神學 Pneumatology と云ふ二分法を考案し、又佛國の物理學者アンペール Ampère(1775—1836)も、宇宙學 Cosmologie 及び精神學 Noologie の二大別を設けて、共に自然科學及び精神科學の二分法の基礎を確立した。

併しこの研究對象の區別に依る分類を完成したものは、獨逸の心理學者ヴント Wilhelm Max Wundt(1832—1920)である。彼れは従來自然科學に組み入れられてゐた純粹數學を形式科學として經驗科學と分離し、經驗科學を自然科學 Naturwissenschaft 及び精神科學 Geisteswissenschaft に二大別し、それ等を更に次の如くに分類した。



彼の研究對象の區別と云ふのは、經驗の對象がたゞ單に常識的に自然界と精神界と云ふ二大別に對立すると云ふ意味で

はなく、自然科學は主觀に對する關係を離れて、間接的抽象的經驗内容を客觀として研究し、精神科學は直接に經驗する所をそのまま具體的主觀的に取扱ふと云ふのである。即ち同一經驗でも、見方の相違に依つて別れるのである。

さてその後科學の分類は、研究方法に依つてするのが最も合理的であると云ふ考へが發達した。假令同一對象でも、基礎的方法が異れば性質の異なるものとなり、別種の對象でも、同一方法に依れば同類の科學となり得る。ヴントの分類も其の基礎となつた自然及び精神と云ふ對象の相違は、同一經驗の觀方の相違に基づくものであると云つて居るから、これはやはり研究の方法の相違に依ると云ふことも出来る。併し方法を以て分類の基礎とするには、以上のヴントの分類法にはなほ幾多の缺點がある。此の缺點を矯正しやうよして新たな分類法を案出したものは、バーデン學派又は獨逸西南學派と呼ばれる新カント派の哲學者ウィンデルバンド及びリッカートである。

ウィンデルバンド Wilhelm Windelband (1848—1915) は、其の著「歴史と自然科學」Geschichte und Naturwissenschaft, 1894 に於て、研究方法に基づく新分類法を主張した。其の要旨は、自然科學は普遍法則を求める科學であつて、其の取扱ふ個々の事實はそれ自體に何等重要な意味はなく、それ等

の中から一般共通の點を發見し抽象して、一定の法則を設定する爲めの材料に過ぎない。故にそれ等の現象は繰り返して發生するものである。然るにヴントが精神科學の名稱の下に配列した學問は、一定の出來事を唯一度限り發生して繰り返さないものであり、それ等現象の個別的な特性を完全に記述し説明することを目的とする。これは則ち歴史學の特徴であるから、精神科學と云ふよりは寧ろ歴史科學 *Geschichtswissenschaft* と呼ぶ方がよい。歴史科學は、其の研究材料の個性に特別の興味をもち、それに重要な意義を結びつけて研究する個性記述的科學であり、自然科學は、その材料に共通の法則を發見することを目的とする法則定立科學であると云ふのである。

此の説に對し、リッカート *Heinrich Rickert* (1863—) は、更に合理的批判を加へてそれを敷衍した。先づ科學の研究は吾人の精神能力の有限な爲めに、無限の經驗世界の事象を悉く取扱ふことは出來ぬ。第一に選擇をする必要がある。此の選擇を爲すには大體二つの方法がある。一は多數の對象に共通な一般的事象を選び、他は個々の對象の特殊的個性を示すべき事實を選ぶのである。前者は自然科學の方法であり、後者はヴィンデルバンドの云ふ歴史科學の方法である。次に、對象の特性を示すべき事實を選ぶと云ふことは、其の特別對

象の理解に價值あるものを選ぶ意味である。自然科學に於ては、取扱ふ個々の事實に價值はなく、たゞ普遍法則確立の一材料としてこれを見るのであるが、歴史的認識に於ては、特定の目的に價值あるものとして選擇するのである。併し歴史が價值を前提とするのは、各研究者個人個人の勝手な主觀的興味に基づく意味ではなく、其の對象の個性認識上、人間が人間として有する一般性に立脚した客觀的認識でなければならぬ。従つて自然科學と等しく、やはり或る程度の普遍性を有するものである。斯様な價值は則ち文化價值である。此の價值を認めることの必要は、單に所謂歴史的事實だけでなく、廣く文化なるものを研究する種々の學問に共通のものである。従つて斯様な研究方法に依る科學は歴史科學 *Geschichtswissenschaft* と云ふよりは、廣くこれを文化科學 *Kulturwissenschaft* と呼ぶべきであり、それが自然科學と對立するものであると説いた。

以上述べた自然科學と精神科學、自然科學と歴史科學、又は自然科學と文化科學と云ふ三種の分類法が、現在に於ては最も一般的に認められ、殊に哲學關係の學に於ては、これ等三者中のどれかが採用されるのが常である。併し近頃更に一つの新しい分類法が追々廣く認められるやうになつて來た。即ち自然科學と社會科學と云ふ分類法である。社會科學と云

ふ言葉は、元來英米に於て Social science として、及び佛蘭西に於て Science Sociale と云ふ名の下に、主として社會學者達に依つて用ひられ始めたものであり、獨逸の精神科學、歷史科學、文化科學などと大體に於て一致する意味をもつてゐる。英米佛では、單に所謂文化現象だけでなく、廣く社會現象と呼ばれるものを研究する、又は自然現象の一部でも特にそれを社會的意味に於て研究する諸科學を、悉く含める爲めに、最も適切な用語として社會科學と呼ぶのである。併し其の研究態度は、獨逸の文化科學よりも一層自然科學に近く、研究對象の大部分が社會現象である以上、或る程度の特殊的個性記述は止むを得ず、否寧ろ必要でもあるが、出来るだけ自然科學的通則發見の學としての客觀的見地を採らうとするのである。殊に社會科學中でも、心理學と社會學とが最も強く自然科學的色彩を現はしてゐる。だから社會科學は、文化科學と自然科學の中間的のものだと云ふことが出来るだらう。英、佛、米の學者達は、社會學以外に、歷史學、政治學、經濟學、人類學、心理學、法律學、民俗學、實踐倫理學、比較言語學、比較宗教學などをも、社會科學中に含めて取扱ふのである。近頃獨逸でもやはり社會科學 Sozialwissenschaft と云ふ言葉は出來たが、彼の國ではこれを用ふる者は稀である。又これを用ひても、英・佛・米の用法とは違つて、經驗科學以外のものまで含ませる者もある。例へばマックス・ウ

ェーバー (Max Weber, 1854—1920) の如きは、獨逸西南學派の科學分類と、英・佛・米系の社會科學概念と、舊型哲學的科學觀念との混合體を案出し、社會科學を経験的社會科學と規範的社會科學とに二分し、前者に社會學と其の他一般の所謂歷史科學又は文化科學の類を入れ、後者には法律學・倫理學・美學・論理學などを取り入れてゐる。これは一種の過渡的分類法である。

最後に社會科學と云ふ語につき、吾が國の用法に關しては一言注意する必要がある。吾が國でも、專問の社會學者や、所謂社會科學者間に於ては、英米佛と同様嚴重な學術的意味に使用されてゐるが、通俗的には一種獨特の用法が發達し、従つて一般概念の上に非常な混亂を來して居る。それはマルキシズム流行の影響である。マルキシズムの研究は、吾が國に於ては諸外國よりも數十年後れ、漸く世界大戰終了後に至つて急に盛んになり始めた。従つて其の始めに於ては、深重な學的研究よりは、一種の流行的・無批判的・模倣的傾向が可なり強く現はれたので、從來さへも極度に取締りが嚴重であつた當局の猛烈な斷壓がこれに向つて加へられた。然るにこの監視の眼を暗ます爲めのカムフラージュとして、「社會科學研究」と云ふ名稱の下に、多數の青年學徒が學校の内外に於てマルキシズムの研究を續行した。そして大正十三年の十月には、全國四十有餘の學生の研究團體を統一する

「日本學生社會科學聯合會」、一名「學聯」(S.F.S.S)なるものが組織され、これを中心として益々實際運動に向つて突進し、其の結果昭和三年三月十五日の所謂三・一五事件なるものとなり、約千名の共産黨員が檢舉されて、内六百名は起訴收監された。更に翌昭和四年四月十六日には、四・一六事件として知られる、第二次檢舉となり、再び數百名が收監され、これ以來「社會科學」と云ふ言葉は強く一般世人の注意をひき、全くマルキシズム又は類似の社會主義の別名の如くに考へられるに至つた。これはたゞ、一般世俗的にだけでなく、相當の學者や有識者の間に於てさへ、往々斯様に解してゐる人達がある。併し社會科學を斯様な意味に使用するのは吾が國だけであつて、諸外國に於ては、稀に一部の社會主義者間に行はれるのを見るけれども、學者間は勿論、一般的にも學術的意味に用ひられて居る。

第三節 社會科學としての社會學

前節に述べた通り、社會科學は概して文化科學と呼ばれる場合よりも、一層自然科學に近い態度を採る特徴をもつのである。それは所謂文化科學は、其の解釋がまだ舊型哲學的科學により多く接近してゐるけれども、社會科學は出来るだけ客觀的實證科學として、通則發見の普遍科學にならうと努力するからである。そして結局從來の文化科學的方法と自然科

學的方法との或る程度の並用をも認めるのである。これに對して潔癖的體系學者達は、それは認識の混亂であり、方法の混同であると非難すゝ、併し良く考へて見れば、文化とか自然とか云ふことは、元來根本的に違つた經驗範圍に屬する絶對對立的のものと云ふよりは、同一經驗でもこれを見る立場の相違から、學問上研究の便宜の爲めに、違つた體系に組み入れるだけの話である。然らばかゝる對象の研究上、或る程度の混同は寧ろありがちのことであり、又兩種の研究方法の或る程度の並用に因つて、其の解釋が一層明確になることもあるのは少しも怪しむに足りない。元來研究的便法たる特殊の方法論を、絶對的眞理の如くに固執しやうとするのが無理な話である。これ等兩方法の並用もあり得べきものだ云ふことは、リッカート自身すら既に認めて居るのであつて、これが社會科學に於ては、更に一層明かに認められただけである。

さて然らば社會學はどうであるか。これは一種の社會科學である。そしてしかも以上述べた社會科學の特質を最も良く現はしてゐるものである。佛蘭西や亞米利加の社會學者中には非常に大膽に、社會學は自然科學であると公然揚言し、そして純客觀的實證的立場から、通則發見の爲めの普遍化科學としての立場を確立しやうと努めて居る人達さへある。然るに一方に於ては、殊に獨逸の哲學者達の中にあつては、これを

正確に文化科學の定義に當てはめようとしたり、更に一層形而上學や認識論的立場に接近した、一種の形式科學として體系づけ様とする人達さへある。併し大多數の社會學者達は、社會科學其のものゝ性質を理解して、これ等兩極端の中間を行き、哲學の長所も、文化科學の特徴も、又自然科學の優越性をも認め、たゞ複雑な社會現象の解釋上、最も効果的であり、しかも合理的である、研究方法と學問體系とを發見しやうと努力してゐる。

次に社會學は、社會科學それ自體の中にあつて、いかなる立場を取るかと云ふことが、多くの學者に依つて、根本問題として論じられるのが常である。初めは甚だ漠然として、社會學と社會科學と殆んど同意義に考へ、總ての社會科學を綜合したものが社會學であるかの如くに説明された。これは社會學がまだ判然と其の領域を確立しなかつた創立時代の觀念であり、歴史哲學の影響の下に一種の社會哲學として存在した爲めであつた。次に現はれた觀念は、社會學は社會諸科學に共通する一般法則を研究する科學だと云ふのである。そして最後に發達した觀念は、社會學は他の社會諸科學の綜合でもなければ、又其の通則學でもなく、總ての他の社會諸科學と等しく、一種の特殊的社會科學であると云ふのである。これ等三者中、第一の廣大な意味に於ける綜合觀を採るものは今日は一人もゐないが、第二と第三の説にはそれぞれ特色

があつて、いづれの方が絶対に良いとも云ひ得ない。それはどちらにも眞理が含まれてゐるからである。約言すれば、見方に依つては、確かに社會諸科學の通則發見が今尙社會學の重要な一方面であると同時に、他面に於ては自己獨特の特殊的研究が根本問題であるからである。そして事實上に於ては、學說としてどちらの方法論に傾くかに拘はらず、いづれも多少これ等兩面の研究を取り入れて、其の間に種々の工夫をこらしてゐるのである。

第四節 社會學の目的

社會學は人間社會生活の科學的研究、及び此の研究に基づく豫見と統制とを目的として生れ出た科學である。そして科學には理論的方面と應用的方面との別がある。前者は純粹の學であり、後者は術である。此の兩者はいづれも獨立しても其の存在の目的と價值はある。學の純粹目的とは、知識を得ることそれ自體を指すのであり、知識の獲得は人間の根本欲望の一つである智慾の満足を來すことに依つて存在の意義がある。「科學の爲めの科學」と云ふのは、結局此の意味である。そして此の場合には、知識の應用は其の知識獲得の直接目的ではなく、單に間接的派生的のものとなる。又此の反對に、純學理的方面の研究が主眼ではなく、たゞ既存の學理を利用する技術は、實生活上多數の技術者が實行して居る所で

あつて、これ又十分に其の存在の理由をもつ。併し總べて科學の眞價は、學と術と相俟つて初めて全きを得るものである。學を全然顧みない術は短見淺薄に陥ると同時に、全然術に適合しない學は所謂空理・空論・死學であつて、個人的知慾の満足といふ小さな孤立的意味以外に、共通高尚な社會的な大きな意味をもたない。

元來どんな理論的學問でも、決して知識慾に因つてのみ發生し發達するものはない。必ず生活の實際的必要に迫られ、又は刺戟されて、初めて發達するのである。たゞ事實認識の正確を期する爲めの便宜上、理論と實行とを引き離して、出来るだけ第三者的超越的態度をとつて考究するのが理論科學である。そして此の認識は、決局再び實生活の問題に適應すべきやうに整序されて、始めて其の存在の意義が満たされるのである。だから純粹理論其のものが、絶對的な究極の目的ではない。勿論理論科學の社會的價値は、其の應用性が必ずしも直接的・即時的たることを要しない。間接的であり、又將來へ向つての可能性で足りるのである。併しそれが果して眞に正鵠を得てゐるならば、少くとも其の一部分は直接的・即時的應用性を具有すると同時に、此の應用的價値が將來益々増加すべき筈のものである。科學の理論が應用力に富むことは、其の理論が實際經驗に基づくものであり、従つて種々の問題を具體的に把捉する能力を有し、其の方法が嚴正確實

であることを表明する。だから應用性の多少は、結局理論の妥當性を測定する一つの標準尺度となることが出来ると云つて良い。苟くも經驗科學と名付け得るものであるならば、それは人生の實踐と無關係のものは絶對にない筈である。

科學の目的は、先づ學自體にあると同時に、結局は術に依つて世を益することである。だから、科學としての社會學も亦同様であつて、これに學としての純理論的體系があると同時に、術としての應用方面が發達した。前者を理論社會學又は純粹社會學と云ひ、後者を應用社會學・實際又は實踐社會學などと呼ぶ。社會學發達の經路を顧みれば、外見上は常に學を以て主とし、術は學から誘導派生された發達物の形になつてゐるが、實際上の動機に至つては、其の發生も發達も共に、知識慾の刺戟に因るよりは寧ろ社會改良の情熱的推進力に動かされた方が多いのである。即ち社會學の動機は主として主觀的理想と感情の力であり、其の研究の態度方法は客觀的理智的な通則發見的科學や哲學であつたのである。だから斯様にして樹立された理論は、決局又理想の實現の爲めに適用されて、將來を豫見し集團生活を有利に統制する爲めに、實際生活上へと還元されるのである。

第五節 社會學の領域

第一款 理論社會學

理論社會學又は純粹社會學は、人間の社會生活を科學的に研究して其の一般法則を發見することを目的とするものであるから、これが爲めに必要なあらゆる方面の研究を包含する。それは社會學本來の目的と、先行諸科學の既得の領域の存在に依つて制限されるだけである。

然らば理論社會學は果してどんな範圍の研究に當つて居るか。「先づ研究對象の基礎を爲す社會其のものゝ性質・起原・構造・機能・發達等を考察し、更に社會生活の本質を研究する。次にこれと關聯して、此の社會の基礎を爲す人間の人間たる性質即ち人間性が、如何に集團生活其のものと不可分的な關係に立つか、又各人特有な個性又は人格も自然的發生體ではなく、全く社會生活の創造物であるかの關係を究める。更に進んで社會生活諸現象の動因を分析研究する。そして此の動因に附隨事項として看過することの出来ないのは、自然環境や人口の影響である。社會生活は元來精神的のものであるが、此の精神的社會生活作用に重大な影響を與へる自然環境との關係は、やはり間接的動因の一つとして或程度までこれを考究する必要がある。次に社會生活の諸現象が如何なる形式を採つて進展するか、其の過程の根本理法を究める。そして此の社會生活の運行過程は、同時に所謂社會進化の問題となり、更に延いては進化の成果たる文化論となる。社會の起原發達の經路を辿り、文化の集團生活的意義過程を考究する

欠

MISSING

に爲し得るものではない。前者は多くは所謂社會問題の解決に關し、理論社會學の原理法則と關連しての理論的研究であり、後者は社會惡弊を除去し福利を増進する爲めの集團的行動、即ち所謂社會事業として知られる實際行動が其の大部分を成す。そして社會事業は、社會學以外多數の社會科學又は自然科學的理論の應用をも混入する場合が多く、従つてそれは社會學獨特の領域でないのは勿論のこと、又他の學——例へば經濟學、政治學、法學、倫理學、心理學、生物學などが更に一層重要な關係に立つ場合もある。が併し、やはり社會學は比較的重大の關係を有する場合が多いものと考へられるから、これをもやはり應用社會學中に數へる學者が多いのである。又社會經濟學及び社會倫理學と呼ばれる實際的社會科學を、應用社會學中に數へる學者もある。これも實は種々の實用的社會科學の混成體であるが、それ等を特に社會學の見地から研究する場合には、應用社會學と見ても不合理ではあるまい。現在應用社會學の領域として認められてゐる主なるものは、都市社會學、農村社會學、家族社會學、宗教社會學、道德社會學、法律社會學、社會經濟學、藝術社會學、教育社會學、犯罪社會學、慈善救濟社會學、遊園娛樂社會學、社會病理學、社會調査學などであり、此の他にもなほ追々と學としての形式を具へつゝあるものがある。そしてこれ等諸項目中には、社會學以外の學問の研究と重複する者もあるけれど

教育
進歩

も、それは互に別の立場から、別の方法や法則を用ひて研究するのであるから、根本的に對立衝突したり、他の仕事を阻害することはない、却つて互に他の研究を補足助長し合ふべき性質のものである。例へば所謂「社會政策」の如きは、各國に於て種々の學者がこれを論じてゐるのであるが、これを應用社會學の一部として取扱ふべきや否やは、要するに社會政策其のものゝ立場の定め方に因つて決定されべきものである。若しそれを狹義に解釋し、主として國家權力統制の下に置かれる協調的經濟政策を意味するものに限れば、それは社會學が直接干與すべきものではなく、寧ろ經濟學が最も適切な支配的地位に立つだらう。併し若しもそれを一層廣義に解し、國家の直接統制以外の集團統制をも認め、且經濟政策以外の種々の文化政策をも包括して、全體社會的改良・改造・福利増進等の問題を取り扱ふものと解釋すれば、應用社會學が最も適切な指導的地位に立つか、少くとも他の社會諸科學と同様な干與權を社會學の立場から主張することが出来るのである。

第五款 社會學の定義

一體學問の定義を設けると云ふことは至難の業である。學としては最も古く發達した哲學でさへ、今日なほ一定の定義を見つけることはむづかしいのを見ても解る。況して新興科學にあつては、其の研究の目的・對象・方法・領域等に関し

て疑義異説が多く、従つて何人も賛成し得るやうな適當の定義を下すことは到底望まれない。そこで始めから全然定義などは作らず、直ちに研究内容の發表展開に取り掛る學者が多い。純科學的立場から云へば、此の方が寧ろ合理的である。併し教育的目的に添ふ爲めには、初學者の便宜の爲め豫め先づ定義の詮衡考究を爲し、學の性質・目的・方法等に涉る研究の基礎方針の大體を示すのが通例である。社會學は社會科學中でも殊に新興部門に屬し、まだ形成期の途中にあるものだから、今の時代に完全な定義を求めやうとしてもそれは無理である。總べて科學は、内容が發達充實すれば、其の意義はおのづから明かになる。豫め學の目的・方法・輪廓・體系等を議論し、それ等にばかり全力を傾注してゐたところで、内容が空虚又は甚だしく不完全である間は、決して満足な定義などの出やう筈はない。併し社會學も、異論異説はまだ多數あるけれども、發生後既に百年を經過し、従つて大體の傾向は既に定まり、其の内容も亦漸く豊かになりつゝあるから、これが傾向・目的・性質等を示すに足りる相當の定義も澤山現はれた。依つて次にそれ等中の主なるものを一通り紹介して、今後の研究進行上の参考に供しやう。

(一) 社會の科學又は社會生活の科學として。

ウォード、タルド、スタッケンバーグ、マキーンヴァー等は「社會學とは社會を研究する科學である」と云つた。サムナーは

「社會學は、社會内の生活の科學である」と云ひ、テンニースは「社會學は、人間共同生活一般に關する理論である」と云つた。これ等は皆社會學創造期に於ける定義の試みとしは、決して間違つてはゐない。成る程社會又は社會生活其のものを全體的又は部分的に通則的研究をすることを主眼とする學問は他にないのであるから、初期の定義としては差支ないが、今から見れば餘り漠然としてゐる。

(二) 社會現象の科學として。

スペンサーは「社會學は、社會單位(個人の意味)の合同行爲から生ずる、あらゆる現象を説明す」と云ひ、ウォードは第二の新定義を立て、「社會學は、社會現象と社會法則とを如實に研究する科學である」と述べ、ロスは「社會學は、社會現象を研究する科學である」と説明した。

これ等の定義も、大體に於ては正確である。社會現象を扱ふことは、他の社會諸科學も同様であるけれども、社會現象其のものゝ本質・機能・結果等を考究するものは社會學だけである。他の社會諸科學は、社會現象の特殊の方面を特殊の立場から考察するのである。だからこれ等の定義は間違ひではないけれども、説明の言葉が足りない爲めに意味が曖昧になり、何んでも社會現象を研究するものならば皆それを社會學に入れるかのやうな印象を與へがちである。

(三) 社會過程・社會關係・相互關係・相互作用・又は集團行動の科學として。

スモールは最初作つた定義に於て「社會學は、社會過程の科學である」と云ひ、ライトは「社會學は社會關係の科學である」と説き、エルワードは「人間關係、即ち個人並びに集團間の相互作用の科學である」とし、ラッツェンホーファーは「社會學は、人間相互關係の科學である」と云ひ、又パークは「社會學は、人間集團行動の科學である」と定義した。

これ等の諸定義は相當に満足出来るものではあるけれども社會過程だけに限るのは狭過るし、社會關係・相互關係・相互作用・集團行動・社會的行爲など云ふのも少し漠然として物足りない。

(四) 社會化形式の科學として。

ジンメルは「社會學は、社會化形式の確定、組織的整頓、心理的論證、歴史的展開の研究を目的とする特殊社會科學である」と云つた。これは形式社會學派の代表的定義であつて、研究對象を社會化作用の形式方面に限り、内容的研究は一切除外しやうとするのであるから、社會學全體を代表するものではない。従つてそれは、後章に更に詳しく説明する通り狭過る。

(五) 比較的妥當な諸定義。

以上述べた諸定義よりも一層妥當であると思はれる定義

は、先づウォードの最後の定義「社會學は人間の集團生活、及びそれに資すべき、又はそれを改變すべきあらゆる事項を研究する科學である」、マックス・ウェーバーの「社會學は、社會的行爲を其の意味を明かにすることに依つて理解し、其の過程と結果とを因果律的に説明する科學である」、スモールの最後の定義「社會學は、結合關係に依つて他人の上に作用し、又他人に作用される状態にある複數人を研究する」、ギティングスの新定義「社會學は社會の起原、發達、構造、活動を、進化の過程に協働する物理的・生理的・精神的諸原因の作用に依つて説明しようとする一企圖である」、及びエルワードの新定義二つ、即ち「社會學は社會集團の起原、發達、構造、機能の研究する科學である」及び「社會學は、複數人の相互關係の起原、發達、構造、機能を取扱ふ科學である」などである。

以上の諸定義は、形式上も亦其の内容も共に比較的充實整頓された、満足に近い定義である。

(六) 定義。

最後に著者の定義を求めれば、それは目下の場合次の如く云ひ得ると思ふ——「社會學は、人間集團生活の性質、構造、動因、過程、結果を研究し、且その豫見と統制とを目的とする科學である。」

社會學は、集團生活の主體である社會とは何んぞやと云ふ

問題、即ち社會及社會生活の本質を究め、次に人間が如何にして社會を構成するかの動因及び社會運營の機能的過程を明かにし、更に其の成果である人間の社會的人格や、社會の構造・組織・一般文化の性質構成をも併せて研究する。そして此の研究に當つては、他の個別的特殊社會諸科學は、社會生活を特殊な立場に立脚して比較的部分的な研究考察をするに反し、社會學は社會生活其のものゝ全體的關係の立場から一層綜合的包括的な意味の解釋をする特徴をもつてゐる。これは決して他の特殊社會諸科學の發見物を掻き集めて、手広く百科辭典的な蒐集的混合物を作る意味ではなく、又他の社會諸科學の上位に立つと云ふのでもない。他の社會諸科學とは比較的獨立の立場からの特殊的研究——例へば家族の研究のやうな——もやれば、又他の社會諸科學に共通な通則の考究もするが、兎に角それが社會學である以上は、其の研究事項である社會現象や社會事實が、全社會生活の一部として考へてのみ眞の意味が解ると云ふ立場から出發して、他の社會諸科學よりも一層包括的機能的な考察をする特徴をもつ。どんな科學でも、他の科學の與件に依存しない絕對獨立のものはない。殊に社會科學は皆多少相互依存的である。他の科學に依存しない科學などは到底考へ得ないし、又たとへあるとしてもそれは極めて貧弱なもので考慮の價值もないだらう。殊に社會學は社會解釋上包括的見地を採るのだから、他の社

會諸科學の發見し提供する與件を廣く參照し利用するのは當然であるが、と云つて社會學はそれ等參照された諸科學の寄せ集め品だとは云ひ得ない。これに依つて他の諸科學が從來爲し得なかつた新たな研究をし、自己獨特の領域を開拓したのである。以下章の進むに連れて、これ等の關係は明瞭になるだらう。

第二章 社會學の發達

第一節 序 說

前章に述べた通り、社會學がどんな學問であるかに就ては、今なほ多數の學説があり、議論がある。そしてそれらの中には、自己の立場だけが最上又は唯一の社會學であつて、他は皆謬見邪説であるかのやうに主張するものさへある。これを見て、何が果して社會學であるかの判斷に迷ふものは、決して素人や初學者だけではあるまい。

併し多種多様の學説があると云つても、それは社會學に限つた問題ではない。これ等多數の學説は、要するに學問發達の過程を表徴する必然的存在であり、其の大多數は、全然誤謬でもなければ、勿論無用の長物でもない。同時に又、それ等の中のどの一つでもが、完全でもなく、全部でもなく、又唯一の眞理でもない。皆一長一短を具へて、しかもそれ等の一つ一つが、苟くも大家の業績である以上は、それぞれ何か相當の役目を果して居るのである。總て學問は、多數の理論異説の徐々の蓄積と、漸次的改良綜合統一とに依て、始めて進歩發達を遂げて來たし、又將來もさうするに違ひない。社會學のやうな、比較的まだ新しく、且研究對象の廣大な學問にあつては、殊に異説が多くあるのは當然のことであつて、

それらの批判淘汰と統合とは、新學說の發見樹立に劣らず重要なことである。そこで社會學の諸問題に立入る前に、先づ過去に於て、代表的な學者達が果してどんな理論を述べ、そしてそれ等がいかに變遷發達して來たかの要點を、主として其のまゝ歴史的に、そして多少批判的に略説し、これに依つて讀者みづから、社會學に關する何等かの豫備觀念を頭に思ひ浮べることが出來て後、更に進んで本論に入り、それぞれの問題を考究することにして見たい。

本章を読むに當つて、豫め注意すべき一つの要點がある。社會學の發達は、最初非常な自然科學的實證科學としての希望と情熱とをもつて生れ出たのではあつたけれども、當時の學界の一般情勢に支配されて、其の抱負と計畫とに拘はらず、内容は依然として歴史哲學や、社會哲學の領域を脱することが出來なかつた。併しその後、徐々に實證的普遍科學としての要素が増加されるに従つて、益々明確に一社會科學としての體貌が具はつて來たのである。勿論斯の如き發達は、平坦な一直線上を常に滑かに走つて行はれたのではなく、或は右し、或は左し、時に多少の逆行さへあつたし、又現在もさう云ふ學派があるけれども、良く其の經路の全面を通觀すれば、其の中心動向は科學主義の發達勝利であつたことが解るだらう。

第二節 オギュスト・コント

Isidore Auguste Marie François Xavier Comte

(1798—1857)

1. Cours de Philosophie Positive, 6 vols. (1830—1842)
2. Discours sur l'Esprit Positif. (1844)
3. Système de Politique Positive, 4 vols. (1851—1854)

第一款 コントの略傳

社會學的研究傾向は、遠くは既にギリシヤのアリストテレス以來、多數の哲學者、政治學者、經濟學者、歴史家、其の他の人々に依つても行はれた事を認めることが出来る。併し初めて社會學 Sociologie と云ふ名稱を發見し(Cours de Philosophie Positive, vol. IV, p. 185)、そして一定の學的體系を與へたのは、佛蘭西の自然科學者で、且近代實證哲學の始祖と見られてゐるオギュスト・コントであつた。彼はパリの理工科専門學校で自然科學を學び、早くから秀才を以て認められた。併し此の頃から社會政治の諸問題に強い興味をもち、自由思想家としての閃きを見せた。理工科専門學校在學當時から、既にモンテスキュー、コンドルセ、アダム・スミス、ヒューム等の著作物を好んで研究し、二十歳の頃から佛國社會主義の元祖と見られるサン・シモン (Claude Henri de Saint-Simon,



1760—1825) の門に學んで、専ら社會政治の改造の爲めの根本理論の發見に努めた。後に説明する彼の學問發達の三段階的分類は、サン・シモンの創意になるものであつた。

コントは、母校に於て數學と天文學の講義をする傍、知人等の勧めに因り、一八二六年に先づ自宅に於て少數學者の前に社會學的講義を開始したが、其の後間もなく精神過勞と家庭の不幸の爲めに精神病に罹り、約一年間休養した。そして此の間セーヌ河に身を投じて自殺を企てたことさへあつた。併し其の恢復後再び自宅で講義を繼續完了し、一八二九年には同講義を公開した。そして一八三〇年に其の大著「實證哲學講義」の第一卷を著し、一八四二年に最後の第六卷を著し、前後十二年間に亘つて大業を完結した。此の著書中第四卷から第六卷までが、社會物理學 *Physique sociale* と名づけられ、彼の實證的宇宙哲學體系中の社會學に當る部分である。

第二款 實證哲學

實證哲學と云ふ言葉は元來サン・シモンが作つたものであつたが、コントは師の用語と精神とを受け繼いで、更にこれを独自の立場から體系づけたのであつた。其の實證主義に於て彼は、科學的精神が神學や形而上學と異なるのは、單なる主觀的想像思索を、益々客觀的觀察判斷に従屬させる點にあると云つた。そして、實證主義は、人間の想像力に對しても、

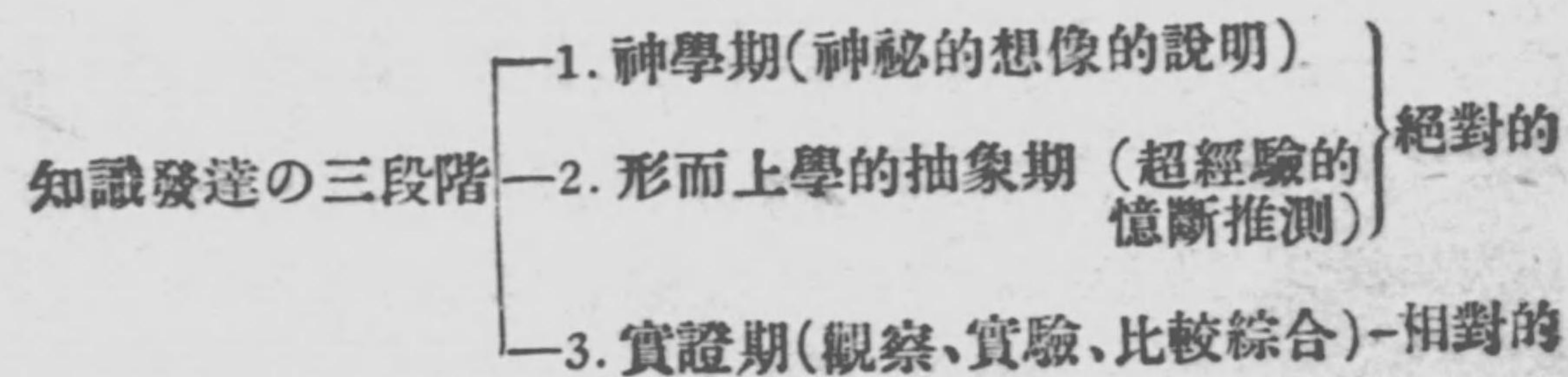
最も宏大にして最も豊富な領域を提供するけれども、其の領域は、觀察された又はされ得る事實の發見・完成・整序と、更に新研究を可能ならしめる爲めに効果的なものにと限定される。次に實證主義が、神學的又は形而上學的哲學と異なる要點は、前者に依つて從來絶對的であつた諸觀念を、益々相對的に改造することである。物の本質や、其の第一原因又は最終原因の探求は、常に絶對性を帯びるが、これに反して現象の研究は、相對的法則に立脚しなければならない。何んとなれば、「精確な實在なるものは、未だ曾て何人に依ても發見されたことはないが、現象の範圍に於ては、思索の進歩は只だ觀察の漸次的改良にまつものだからである」と喝破して、今日の斬新な科學的觀念や哲學的新傾向の先鞭をつけたのであつた。

此の實證主義を社會現象に適用して、彼は社會物理學即ち社會學を作つた。彼は次の如く云つた。「社會現象の豫見は、第一に想像を組織的に觀察に従屬せしむることに依て觀察された實在の根柢を推定せんが爲めに、形而上學的觀念形態範圍を放棄すべきことを前提とする。第二には、政治概念は絶對性を失ひ、事實の自然過程に従つて理論が事實の豫見を吾人に可能ならしむるやうに、文化の可變狀態に相對的になることを豫期する。而して第三に、永續的政治行動は確乎たる法規に依つて限定されべきことを豫期する。何んとなれば、

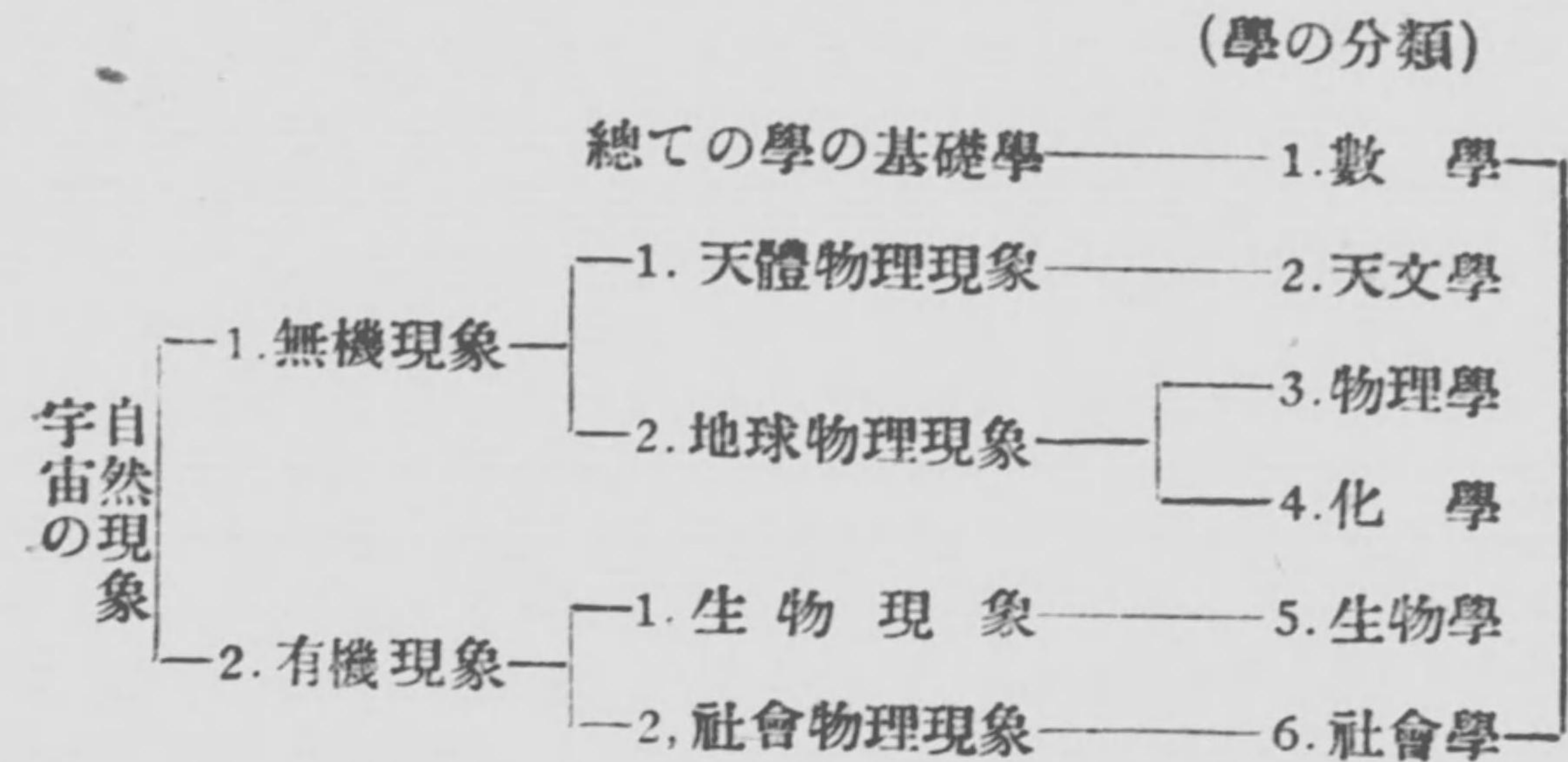
若し社會事象が、人間たると神的たるを問はず、苟くも立法者なるものゝ偶發的干涉に因て常に擾亂され得る状態に置かれる限りは、いかなる科學的豫見も不可能だらうからである。(「實證哲學」四五五—四五六頁)

彼は人間知識の發達を先づ三段階に分ち、第一を神學期と云ひ、神祕的架空的であり、第二を形而上學期と云ひ、主觀的抽象的思索に終る。第三即ち最後の發達は、實證期と呼び觀念的絶對の研究から去つて、宇宙の起源發達や、現象の因果關係を實證的に研究し、理性と觀察とを調整して知識の手段とすると説いた。又總ての學問は、其の性質上普遍性が大であり、單純であり、他の學問の知識に依存することが少い程度に正比例して比較的早く實證期に到達する。「天文學は最も普遍性が多く、最も單純で、最も少く他の科學に依存的である爲め先づ第一に實證期に到達した。次いで物理學、化學、生物學と云ふ順序に發達し、最後に社會學が漸く實證期に入つた。そしてこれ等總ての學の基礎は數學であるから、學問の體系上數學を第一位に置くべきであると主張し、次の表に示すやうな分類を作り出した。

(コントの知識の三段階)



(コントの學の段階的 분류)



- 1. 普遍性の大なるものから小なるものへ。
- 2. 單純なものから一層複雑なものへ。
- 3. 他の學に依存性の小なるものから大なるものへ。

即ちコントは學問を對象の性質に依つて分類し、社會學は最も複雑であり、最も廣く他の先行諸科學に依存し、そして普遍性は比較的なほ最も少き最後の發達物であるが、併し學としての重要性は最大であると考へた。

第三款 社會靜學

次にコントは、社會學を「社會靜學」と「社會動學」とに分けた。「前者は社會秩序保全の法則、即ち社會内の勢力平衡を得る爲めの構造組織を研究するものである」そして社會現象の分化作用と全體的综合統一作用の説明に依つて、人間の相互依存的連帶生活體たる社會の性質機構がどんなものであ

るかを説明した。先づ社會の起原を先天的人間性に歸した。人間は功利的打算に因らず、自然的必然的に集團生活を爲すものであるが、たゞ利己的本能が調和を防げることがあるから、同情や理智作用でこれを統制しなければならない。理智の作用が高まるに連れて文化は向上する。社會は先天的性慾に基づく人間の共存集團なる家族に始まり、これを單位として村落、都市、國家等の發達を見るに至る。これ等は皆人間性に基づく自然的發達體であるから、其の組織構造は、概して其の時代の一般文化の狀態に一致するものである。そして從來の政治理論の絶對性を相對的見地で置き換へることが、實證哲學の政治的適用上に於ける主なる科學性である。故に社會の科學的研究は、其の狀態に關しても運動に關しても、部分部分を個別的に分離して考察することは出来ない。各部分を相關連せしめて綜合的に研究しなければならないと論じた。

第四款 社會動學

次に「社會動學」は、社會の進歩發達即ち進化の法則の研究である。社會の進歩は、理智の發達と愛他的協力的な徳性の増大とに因り行はれる。そして理智の發達は既に述べた神學的、形而上學的、實證的の三段階を経て行はれ、それぞれに相當した文化が發達する。假令ば神學的段階は好戰的・軍國的・獨裁的であり、形而上學的段階は中間的過渡期であつ

て、法制的、官僚的であるが、動搖混亂が多く革命的である。最後の實證的段階に至つて民主的・平和的・産業本位的の社會となると説き、制度組織其の他一切の文化を、大部分理智の發達形式に隨伴して必然的に展開するものと考へた。次に社會の進歩は、人間固有の好奇心と、壽命と、人口増加とに刺戟される。好奇心は智力發達の原動力である。壽命は有限である爲め、人間が新陳代謝して益々舊文化の上に新文化が堆積される。但し壽命は相當に永くなければならない。若し餘り短か過ぎれば、各人が社會に於て十分機能を完うすることが出来ず、従つて文化に貢獻する力が減殺されるからである。人口の増加は人間の接觸を増し、生活を複雑活發にし、分業の發展を促進し、従つて生活方法の進歩を來す。

學問研究の方法に關しては、彼は先づ直接法と間接法との二大別を設けた。直接法は對象に關する觀察・實驗・比較に依るものであり、間接法は他の諸科學を關聯せしめての研究である。觀察法は、益々良く訓練された觀察者と改良された觀察の手段方法とに依り、錯誤が漸次的に減少され、同發的相關關係又は繼起的因果關係の合理的發見が可能となり、複雑な社會現象も追々明晰に解釋されるやうになる。研究對象をありのままではなく、觀察者の便宜に置き換へて精細に觀察する實驗法は、自然科學や歴史學等の方陣の援助に依り、社會學に於てもやはり十分可能である。最後に比較法に關して

は、大體更に三種の別がある。第一は、人間社會と動物社會との比較に依り、社會制度の自然的起原に關する貴重な知識が得られる。第二は、社會の共存的狀態を各地方各國に涉つて同時的に比較考察することに依つて、人間精神の發達は地理的人種的區別に拘はらず等質的であり、これ等の差違は只進歩の速度に關係ある以外何等の影響も及ぼさないと云ふ、根本法則の確立を可能にする。第三は各時代の年代的比較であつて、これは歴史的な連續關係や進歩の順序を發見する爲めに必要である。

次に間接法は、社會學と他の諸科學との連續依存關係から來るものである。總ての社會的研究には、先づ二つの對象がある。一は社會現象の要因としての人間自身であり、他は其の中に社會現象が發達する環境である。然らば社會學は、人間性の法則を示現する有機體科學と、人間生活の外的狀態を指示する無機體科學との全體系に依存するものである。

第五款 人道教又は人類教

コントは學問の効果を「豫見せんが爲めに知る」(Savoir pour prévoir)と云ふ點に置いた。そして最初彼れは、殆んど理智の全能性を信じ、殊に社會問題は自然科学的正確さの社會知識の發達に因つて、必然的に解決されると考へたのであつた。併し晩年に至つて、彼れの主智說的實證主義に矛盾を感じ、再び理想と感情の力を認めるやうになつた。そして、

學問は未來を豫見させる力は與へるけれども、其の豫見したものを實現する力は人間の感情にあると信するやうになり、遂にサン・シモンと同じやうに最後の解決を宗教的實行運動に求めるやうになつた。そこで彼れは、實證的宗教と自から呼んだ人道教(la Religion de l'Humanité)なる一種の倫理的宗教説を立て、同情慈愛の基礎に立つ愛他的獻身的行動を人間の義務とし、愛他の感情を宗教の核心とし、人類の進歩社會の改善の爲めに盡した所の一切の人間を綜合したものを神と考へ、これを崇拜信仰する教儀、教理、祈禱の形式、僧侶に關する法則までを定めた。其の結果當時の英佛兩國には、彼れの熱誠に動かされて、多少の信者も現はれたのであつたが、到底大なる勢力を得ることは出來ず、彼れの死後には遂に消滅して、只だ社會運動として其の精神が繼續されたのである。即ち人道教は、科學的社會理論の理想的社會改良へ向つての歸結の一形態であつて、後に現はれた應用社會學の前身であつたと見ても良い。

以上を見れば、コントの社會學觀念は、まだ粗雑ではあつたが、其の根本精神と大體の方針に於ては精確であり、今から約百年前に初めて世に向つてなされた提言としては、驚くべく進歩的なものであつた。彼れの體系の微細な部分に關しては勿論錯誤缺點が多いけれども、今日の社會科學の一般的基礎を固め、社會學なるものを世に生み出した功績は永遠不滅

である。彼れの學は今絶對的無價値であり、死滅した單なる過去の遺骸であるが如くに説く學徒もあるが、それは甚しき誤りであつて、彼れの精神は其のまゝ全社會科學を通じて生きて居り、其の體系は源流となつて今尙流動しつつある。それ等は死滅したのでもなければ頽敗したのでもなく、總ての他の學問や他の碩學の業績と等しく、たゞ後繼者達に依つて更に改良され、愈々完成されべきものである。

第三節 ハーバート・スペンサー

Harbert Spencer (1820—1903)

- I. Social Statics, 1850.
- II. The Synthetic Philosophy, 1862—1893:
 1. First Principles, 1862; revised, 1900; Reprinted with an additional appendix, 1904.
 2. Principles of Biology, Vol. I, 1864; Vol. II, 1867; revised and enlarged, 1898.
 3. Principles of Psychology, First edition, 1855; Second edition, Vol. I, 1870; Vol. II, 1872, Third edition, 1880; Fourth edition, 1899.
 4. Principles of Sociology: Vol. I, First edition, 1876; Third and enlarged edition 1885.

Vol. II, Part IV, 1879; Part V, 1882.

Vol. III, Part VI, 1885; Parts VII and VIII, 1895.

5. Principles of Ethics:

Vol. I, Part I, 1879; Parts II and III, 1892.

Vol. II, Part IV, 1891; Parts V and VI, 1863.

第一款 スペンサーの略傳

ハーバート・スペンサーは數學教師の家に生れ、幼少の頃から強い自然科學的興味と、事物に對する鋭い觀察力とをもつてゐた。彼れの父は彼れが十三歳の時、牧師であつた伯父の家に勉學の爲め彼れをあづけた。そして此の伯父の指導の下に三年間數學と科學を勉強し、殊に物理學と化學に關して勝れた才能を發揮した。此の伯父は立派な博學の士で、科學にも通ずると同時に社會問題にも造詣が深く、貧困問題に關する多數の小冊子を發表した。スペンサーの自然科學と社會科學に對する其の後の大研究は、實に此の伯父の刺戟に因つて芽生えたものであらう。彼れの才能を見込んで伯父が大學に行くことを勧めたが、彼れはこれを辭去して郷里に歸り、父の學校の助教師となり、かたはら相變らず科學的研究を續けた。併し十六歳の時鐵道技手となり、二十歳の時迄土木工事に働いたが、此の間にも勞働の餘暇に建築土木雜誌に種々の研究發表をした。一八四一年に一旦土木技手を止めて歸郷し父の發明事業に手傳つたが、それは失敗に歸した。此の間社

會政治問題にも興味を以て、「政府の行動権限論」“Letters on the Proper Sphere of Government”, 1842. と云ふ論文を「ノンコンフォーマリスト」“Nonconformist”誌上に発表した。併し生活の爲め一八四五年には再び土木技手に歸り、三年間これを繼續したが、一八四八年に全然土木と縁を斷ち、倫敦の「イコノミスト」“Economist”と云ふ當時英國で最も有力な財政經濟の週刊新聞の副主筆となり、五年間その地位に止まつた。これは彼れに種々の問題や種々の社會的方面に接觸する機會を與へ、其の天才を研く爲め絶好な修練場となつた。斯くて彼れは一八五〇年には「社會靜學」“Social Statics”を著し、其の博識高見は忽ち天下の視聽を集めた。一八五五年には「心理學原理」第一版を著し、進化の原理を人間精神に當てはめた。一八五八年には進化の一般的理論の草案を發表したが、これこそ後に大著「綜合哲學」“Synthetic Philosophy”となつたのである。斯様に彼れは進化論に關する種々の發表を、既にダーウィンよりも早く發表してゐたのであるが、後に一八五九に至り、ダーウィンの「種の起原論」“On the Origin of Species by Means of Natural Selection” 1859. が發展されるに至つて、愈々自己の假説に自信をもち、大規模の下に其の後の全生涯を打ち込んで「綜合哲學」の完成を見たのである。

スペンサーは以上略傳に示した様に、正統な學校教育は受

けて居らず、既に若い頃から勞働しつゝ、殆んど苦學自修で仕上げたのである。しかも其の學は古今東西に通じ、哲學、自然科學、社會科學、行く所として大成しないのはなく、進化論も或る意味に於てはダーウィンに先立ち、社會學も、彼れ自身の云ふ所に依れば、一八五〇年に於ける彼れの「社會靜學」の發表の頃までには、まだコンとの社會學に就て何も知る所がなかつたのだし、其の後と雖も學の内容は主として独自の立場から研究したのであつたが、しかもコンの體系を更に完成し、且進んで、コンが企てゝ爲し得なかつた、社會現象の詳細な内容的研究をも爲し遂げたのである。彼れの天才的博學は近世史上に於けるアリストテレスの再現であると云つて賞嘆した學者があるが、敢て過言ではない。そして四十二歳の中年に着手して三十餘年の長年月に亘り、晝夜寸暇を惜んで成し遂げた全十卷六千頁の大業は、しかも常に非常な健康虛弱状態の下に於て行はれたのであると云ふことを聞くに至つては、全く學界の一驚異である。彼れは終生獨身で通して、學問研究の爲めに全生涯を捧げ、一九〇三年十二月八日に八十三歳の高齡で没した。以下彼れの社會學體系に就て其の要點を略述しやう。

第二款 社會靜學

社會靜學は、スペンサーの最初の纏まつた著書であり、彼れが僅か三十歳の時の作物である。こゝに彼れは、人生の目

的と其の根本社會法則と思はれるものを構想した。先づ人間の努力の目的は幸福の探求であると考へた。そして此の幸福は、結局自由と正義なる外的状態に依存するとした。原來自由を各人が最大限度に獲得する所に幸福の本質はあるが、此の自由を各人間に平等ならしめる爲めに、社會に依つて個人的自由に加へられる制限が正義である。即ち自由は、個人的活動の目的たる幸福への最高手段であり、正義は社會存在の究極の目的であるとする。そして、『人間幸福の追求は、其の才能の行使の自由を意味する。但し此の自由は、あらゆる他の人間の同様の自由の存在に依つてのみ制限される』(Social Statics, p. 36.) と云つて、所謂自由放任主義 *laissez faire doctrine* の基礎を固め、社會改良の爲めにするあらゆる政府の加へやうとする直接干渉に反對する、徹底的個人主義の論陣を進めた。彼れの自由は決して絶對性のものではなく、他の個人のもつ同様の自由を侵害しない限りに於てのみこれを認めると云ふ合理的のものではあるが、彼れは社會其のものに固有である力こそ、社會進歩の最上且唯一の動因であり、國家が直接社會の福利増進を取締らうとするのは、政府の適當行動の範圍を越ゆるものであるとして、國家の行動權限を、正義の保證と秩序の保全に置いたのである。

彼れは社會哲學を靜學 *statics* と動學 *dynamics* とに二分し、前者には完全社會の平衡の法則を取り扱ひ、後者には社

會を完全に向つて進歩させる力の問題を取り扱はうとした。そして前者の對象は、完全な幸福を獲得する爲めに吾人が守らなければならない法則を決定することであり、後者の對象は吾人をしてこれらの法則を遵守することを可能にさせる所の其の時の勢力を分析することであると考へた。(p.233)此の理論の骨子は、それから九年後にダーウィンが完成した自然淘汰の原理を包括して、進化論に先鞭をつけた驚くべき獨創力を現はしたものであつて、其の社會學的貢獻の主要點は次の如くである。

1. 人間性は修正可能である。環境の刺戟に對する反應として、先づ動物に對し、次に人間に對し、最後に社會に對する關係に於て平衡が確立される傾向がある。
2. 此の平衡が確立される過程は、環境に對する適應不能者の自然淘汰である。
3. 社會機構と社會觀念とは、相互關係的であり、並行發達するものであつて、決して其のいづれも他と分離して單獨的に進歩することは出来ない。
4. 進歩は自然的不可避的である。そして進歩の究極の目的は、個人的自由と社會的團結との調和、即ち私益と公益との調和に依つて獲得される所の最大幸福である。

即ち自然淘汰に重點を置く自然進化觀念を基礎として、必然的社會進歩論を提唱したのである。『それ故に進歩は偶發

的ではなく必然的發生物である。文化は人爲的ではなく自然の一部として發生する——丁度胚が發育し、花が開くやうな具合に。全有機的創造を基礎づける所の法則に従つて、過去に於て人間の修正が行はれ、又現在も行はれつゝある。そして若し人間が將來永く生在し續け、又自然環境に變化が起らなければ、これ等の修正は遂には人間を完成に導き、人間の才能は完全に社會狀態に適合し得るやうに形作られ、従つて社會惡も不徳も消滅し、人間は完全になるに違ひない』(Social Statics, pp. 31—2)と論じた。そして此の觀念は、彼れの其の後の思想體系を通じて、彼れの人生觀社會觀の基礎を成してゐる。

第三款 第一原理

彼れの「綜合哲學」は、「第一原理」、「生物學原理」、「心理學原理」、「社會學原理」、「倫理學原理」の五種十卷の大業であるが、此の中直接社會學に屬するものは「第一原理」と「社會學原理」とであるから、これ等二種の著作に就て彼れの學說を考究しやう。次に先づ第一原理に就て述べる。

第一項 可知不可知

第一原理は、全體系に關する基礎理論であるが、殊に社會學に密接の關係をもつものであつた。そして彼れの社會學體系それ自體の重要な部分を構成する。人間思想の内容を彼れは先づ不可知的と可知的との二つの範疇に分ける。

(一)不可知者

不可知的範疇は絶對的・非制約的であり、その概念は實在であるが、其の性質は知識圏内に導入することは出来ない。可知的範疇に屬するものは、相對的・制約的であり、感覺的認識の對象となる。前者は宗教の範圍であり、後者は科學の範圍である。人間精神は將來も永遠に、確定的現象や現象間の關係だけでなく、現象や其の關係が含蓄する所の非確定的何物かに關し考慮を費すに違ひない。故に、若し知識が意識を獨占することが出来ないとするれば、精神が永遠に超知識的事物にも關係する可能性がある。然らば常に宗教存在の餘地がある。何んとなれば、宗教は其の主要問題が超經驗的だからである。然るに科學はこれに反し、單に一般知識の高等に發達したものであつて、若し科學を否定するならば、それと共にあらゆる知識は又否定されなければならない。人類歴史の縦糸を通じて常に走る所の横糸の如く至る所に必ず存在する宗教は、何等かの永遠的事實を表現する。然るに一方科學は又、事實の組織立てられた集積であり、しかも愈々益々發達し且錯誤から淨化され純化されつゝある。斯く兩者とも事物の實在的根據を持つとするならば、これ等兩者間には一種の根本的調和が存在すべき筈である。何んとなれば、絶對的永遠的に對立する二種の眞理の系列が同時に存在すると云ふ假説は信じられないからである。外見的衝突は、主と

して兩者の境界の混同に因る。即ち宗教そのものと屢々混同される所の宗教形式と科學との不調和、及び不可知と可知の範疇概念の混亂に因るのであるから、先づ兩者の明確な區別が重要である。

(二) 可 知 者

可知的事物は、精神の把握力圏内に來る不可知者の種々の表現である。客觀的類似と相違とを含む所の關係は、思惟の最後の形式である。關係は二種の異なる系列から成り立つ——即ち共存又は空間關係と、繼續又は時間關係とである。空間の概念は共存的位置の意識から發生し、時間の概念は繼續的位置の意識から發生する。共在的諸位置即ち空間的諸點が抵抗を起せば、物質の概念が發生する。物體即ち占領的延長は、空間即ち非占領的延長と意識上區別される。同發的でなく繼續的に發生する所の共存的抵抗諸點の位置の變化は、運動の概念を生ずる。空間と時間とは、精神關係の形式の抽象であり、物質と運動とはこれらの關係の内容から構成される具象である。運動は空間、時間、物質等の先行概念を包括するものであるが、併しそれら諸概念の派生體ではない。一層先行的なそれは「終極者の究極」である所の力の概念を含有する。あらゆる諸多の意識形式は力の經驗から誘導され得るけれども、力の經驗其のものはどんな他のものからも誘導され得ない。

吾人が現象と名づける所の可知的結果の未知の原因、これ

等可知的結果間の異同、及びこれら結果の主觀客觀兩者への分離——これらは則ち、それ無しには吾人が思惟することの出來ない假定である。そして知識の假定から誘導される次の三つの原理又は過程を認めなければ科學は成立しない。

A. 物質不滅 無より有を生ずと云ふ假定は、論理的に考へられ得ない。何んとなれば、無自體が意識の對象となることは不可能だからである。此の反對に、有から無も生じ得ない。若し生ずると云ふなら、それは科學ではなく魔術である。物理化學が此の原理を説明する。

B. 運動繼續 同様に運動も無より生じ又無に歸することは出來ない。阻止されたやうに見えるのは、單に運動が状態又は性質上變化を生じたゞけである。

C. 力の持續 物質不滅と運動の繼續は、力の形で表現される。併し力と云ふことは最後の概念である。人間の精神は無より生じ無に歸する孤立した力の概念を組織的に説明することは出來ない。如何なる表現された力も、それが因つて來り、そしてそれは其の一反作用である所の、等量の先行的力をもつ。此の力の持續と云ふ根本的の普遍法則から四つの系論が演繹される。

1. 力の間の關係の持續 同様の状態の下に同一物體に加へられた等量の力は、同一の結果を惹き起す。これは力學的根本通則であつて、若しこれを否定すれば、それは原因なしの

結果を假定し、又力の無よりの出現或は無への歸屬を認めなければならなくなる。故にそれは明白なる思惟の矛盾であり、そして力の持続の否定となる。

2. 力の變化と等量 槌の打撃は震動に變形し、震動は熱と光と音響を惹き起す。電氣は磁力と熱と光とに變形する。化學作用も亦變形した力の種々の表現となる。生命的力・精神的力・社會的力等も亦自然力の變形である。社會に發生する萬事は、有機的又は無機的作因或は兩者の結合の結果である。即ち人間自身の力、又は人間に支配され或は支配されない周圍の自然力の結果である。社會生活・社會力・社會活動・社會組織は、人口の多寡・自然環境・食物の供給・勞資の分量・及び其の他に因つて變化するのである。生命力と云ふ中間者を通じてそれから社會力が發生する所の物理的力は、一體どこから出てくるかと問へば、其の答へは從來太陽の放射能からと云ふのであつた。人間の社會生活は地上の動植物的産物に依存し、これら動植物的産物は太陽の光と熱とに依存するのであるが、社會内に發生しつゝある諸變化は、又あらゆる他の變化の系列を惹き起す所の力と共通の源をもつ諸力の結果である。

3. 運動の方向 この法則は、牽引力と反撥力との共存から生ずる論理的歸結である。そして運動は常に最大牽引力の方向、又は最少抵抗力の方向に向ひ、或はこれ等兩者の合成

である。總ての生物と等しく、社會は又此の法則に従ふ。それは物理的・生命的・社會的環境と一致し、環境の結果として、成長し・繁榮し・移動し・闘争し・内部的變化を表示する。

4. 運動の律動 律動は平衡の取れない諸力間の衝突から起る。振子の動搖、風にひらめく木の葉の震動、流れの面の漣、絃樂器の糸の震動、熱・光・音・電氣の空間的波動等は皆此の法則の實例である。天體運動の周期性、地上の晝夜・四季の變動、脈搏の均齊、食事・睡眠の周期的要求、感情的反應の波動性——これ等の物理的又は生理的の律動法則は、そのまゝ又社會に適用され得る。遊牧的社會の周期的移動、生産消費の期節的需要、景氣循環、物價・結婚・出生・死亡・犯罪等の統計カーヴの高低、スタイルや流行の變動、政治的多數黨の交互的變化、輿論の變化、及び其の他の社會事象は、廣く此の法則に従ふ。但し社會的律動は、多種多様の勢力の結合の爲めに屢々極めて面倒な複合體として現はれる。

第二項 進化の法則

可知的範圍の宇宙を構成するあらゆる物質界は、絶えざる變動状態にある。その完全な發達史は、二つの過程を含まなければならない。一は感知不可能の物よりのその出現であり、他は感知不可能の物へのその消失である。前者は進化であり、後者は分散である。運動の喪失とそれに因て生ず

る統合は、結局運動の新しい獲得とそれに繼ぐ分解とを惹き起す。此の二つの過程は、絶えず反對作用を行ひ、其の均衡に因つて成長又は衰頹、生又は死が生ずる。其の間の完全な平衡は決して確立されない。單純から複雑へと進展につれて、混亂から秩序へ——不定的排列から確定的排列への進展がある。發達はそれがどんな種類であつても、たゞ異質的部分の増加を現はすだけでなく、これらの諸部分が互に他の部分から區別される差異の明確さも増大する。例へば、發達した太陽系に於ける構造と排列の明確さや、地殼の現存状態、現在の動植物、近代の思想形態等は、皆此の原理を證明する。社會の發達もこれと同様であつて、野蠻時代は單純で不確定であるが、文化の進むにつれて、それぞれ明確な境界をもつ一定の領土に住む諸民族が分化し、一定の段階・機能・特權をもつ社會階級が分化發達し、嚴密な慣習や法典が確立され、宗教や教育は標準化された制度となる。

進化の定義は次の如くである。「進化とは、物質の統合と運動の隨伴的分散であり、その過程に於て、物質は不定的不統一的な等質體から確定的統一的な異質體に變り、又其の間に保持された運動もこれと平行的變形を遂げる變化である。」

そして彼れは、多數個體間の調整統一された行動を含む所の過程と、其の産物の全體とを包含する進化の形相を「超有機的進化」と名付けて、一般有機的進化と區別し、社會的昆

蟲類・高等脊推動物群・及び人類社會の進化に對して此の語を使用した。

物質 mass の組織體への統合分化は、其の保持する運動の統合と分化とを意味する。分散的運動の統合から具體的運動が生ずる。分子的運動は、統合に因つて瓦斯、液體、固形體等の特殊的運動に變形する。光、熱、音響、電氣等の旋律的波動は又統合運動の一形式である。生物學的機能の發達や、心理學的意識の變化も、運動變化の一形式である。これと同様に、社會進化に於ても、個人的行動の合流に因つて生ずる機能的運動は、それら運動の量と、多様性と、正確さと、結合とに於て増大する。保持された運動の統合に因つて、社會的機能が正確さを獲得するにつれて、社會組織は秩序と確信性を増大する。

以上のやうな立場から更に進んでスペンサーは、現象に關する次の五つの進化の法則を提言した。

1. 等質體の不定性 等質的狀態は、不安定な平衡状態である。環境から來る極小的擾亂も完全な等質状態を破壊して異質性の増加に依つて一層永續的な平衡が獲得されべき過程を導入する。此の法則の社會的適用の例を示せば、野蠻社會及び文明社會は、共に階級に分裂し、階級は更に多數の優劣上下の單位に分裂する特徴をもつ。そしてその不安定な權衡は破壊され、一様性が多様性に加速度的に變化する。そし

て優越と服従の關係が、全社會に擴充する強大な階級的區分から、村落の朋黨や學童の小群に至るまで其の中に確立されるのを見る。

2. 成果の増加 分化された物質に加へられた力は、不可避免的に多種類の結果を惹き起す。又物質が分化される間に、隨伴的な力自體も分化する。斯くして、比較的に一様な力は一層多様になる。これを社會に見れば、人口の増加と食物の必要の刺戟は、職業の分化即ち分業發達を促し、社會活動を専門化し、藝術・科學を發達せしめ、國民を戰爭に陥れ人類を進化させる。生産の増加はやがて又人口の増加を來し、其の結果再び人口過剰となり、移民となり、欲望は増大され、機能的活動は強烈になり、社會機構は修正變更される。産業革命はその一例證である。

3. 分離 渾沌たる異質状態に陥る危険は、類似單位がそれぞれ等質集團に結合して互に分離する傾向に因て防止される。この過程が上昇的系列を完成する。それは一様な力が多様な諸對象物に働きかける結果として、又は反對に多様な諸力が一様な諸對象物に働きかける結果として發生し得る。星雲が分離して太陽系を形成し、地質學的堆積體が秩序正しく整頓され、河の流域に沈澱物の成層が發生するなどは、此の法則の物理的例證であるが、社會も亦同様これに支配される。人間の類似性は階級的及び等族的分裂となり、經

濟的・政治的・慈善的・科學的・藝術的・宗教的結社も、亦構成集團の本質を成す所の類似性或は相違性を表現する。

4. 平衡 あらゆる場合を通じて、平衡へ向つての進歩がある。律動の普遍性を必然的にし、總ての力の多様な力への分解を必然的にする所の對立的諸力の普遍的共存は、同時に又結局平衡の設定を必然的にする。地球の周期的變化、成熟形態に達した有機體の權衡の取れた機能、及び十分發達した社會の作用反作用過程等に於て展開される事物の状態は、相殺的變動に依つて特徴づけられる。社會に於て平衡の法則は、人口と生活資料との間、出生率と死亡率との間、需要供給・生産分配の間、社會機構と社會機能との間、流出移民と流入移民の間、過激主義と保守主義の間、個性化と社會化の間、進歩と安定との間等、至る所に絶えず行はれて居る。

5. 分散 分散は下降的系列を表示する。それは進化がその道程を終了した時に起る。集成體が遂に過度の運動の爲めに分離し、そして不斷に喪失するものと等量をその環境から受容する時、又その變化が終局を告げる所の平衡に到達した時、それ以後は左様な集成體は、それが含有する運動の量を増加し、やがて漸次的或は急激的に必ず分解を惹き起すやうな運動過剰を其の各部分に與へる所の、環境内に起るあらゆる作用に支配されるやうになる。生物の死、天體の死、社會の死は、何れも等しく此の過程の特徴を表示する。たゞ其の

平衡の不安定又は安定に因て、それは急速に来るか又は長期間に亘つてその到来が延期されるかの別がある。

以上が彼れの第一原理中の重要な社會學的法則である。

第四款 社會學原理

社會學原理三卷は、全體を通じ八篇に分けられてゐる。それは(1)社會學的與件、(2)社會學的歸納、(3)家族制度、(4)儀禮制度、(5)政治制度、(6)宗教制度、(7)職業制度、(8)産業制度である。これ等の中第一の社會學的與件と第二の社會學的歸納とが最も重要な理論であり、他は多くは其の適要であるから、茲には最初の二つの項目だけに就て述べやう。

第一項 社會學的與件

あらゆる集成體の活動は、其の集成體を構成する單位と、それを支配する環境の力との性質に因つて決定されるものであるから、社會學的與件は、社會の生活活動を制約する社會現象の、それ等總ての要素を包含するものでなければならない。

A. 地理的與件 自然的外在的要素、即ち溫度と濕度を含めた氣候、肥沃性・地形・地勢を含めた地表、植物の量と種類、動物の有益有害の考慮等。

B. 生物學的與件 先天的內在的要素、即ち身體的遺傳特質・強弱・活動性・耐久性の程度、社會的活動を助長・阻害又は變更する所の感情的特質、智能の程度・思考の特別傾向

等を含めた智的特質等。

C. 第二次的又は隨伴的與件

1. 社會がもたらす所の漸次的な環境の變更。例へば伐林・排水等に因つて生ずる氣候や地表の變化、植物の増殖・優秀又は有益な種類の植物の産出、有害な動物の撲滅・有益な種屬の馴化・増加・輸入等。
2. 機構と機能との異質性の増加が伴ふ、社會集團の廣さと密度との増大。
3. 社會と其の成員間の相互作用。
4. 超有機的環境に對する社會の作用・反作用。
5. 物質的用具施設・言語・知識・慣習・法規・制度等の超有機的成果の蓄積。

以上がスペンサーの提供した社會學的與件である。

第二項 社會學的歸納

社會の科學的分析説明の手段として、スペンサーは次のやうな歸納的研究方法を提供した。此の方法は從來一般に社會と生物との類推法と呼ばれ、往々無稽の兒戲的詭辯として一笑に附する者さへあるが、一種の便宜的説明方法としては、非常の價值こそあれ何等の不都合はない。彼れ自身明かに一般有機體と社會との區別を認め、後者には特に「超有機體」の名稱を附して混淆を避けてゐる。のみならず、社會なるものの概念が、現今でさへ甚だ漠然として、種々の空想的奇説を

唱へる者さへあるのを見れば、スペンサーの説明方法は少くとも其の當時にあつては、最も適切であつたし、今なほ有益だと云ふことが出来る。そして其の根本理論に至つても、今なほ其まゝ適用されるものが非常に多い。若し社會なるものに、其の個別的成員の個性と離れて確認し得る何等かそれ自體の特別個性を構成する一種の進化的集合體として、具體的永遠的實在性をそれに認めることが出来なければ、社會に関する科學的研究は全然不可能であつて、結局社會學は何時になつても、たゞ一種の觀念哲學として主觀的抽象論に終始せざるを得ない。

スペンサーの類推的説明の要點は次の如くである。

1. 成長は、有機體と社會的集合體とに共通の過程であつて、量的増大である。それは、率又は量の可變性をもち、そして構成單位の内部的増殖と複合性をもつ、微小な等質的集體たる原體から増加する共通特徴をもつ。
2. 容積の増加には構造の進化が伴ふ。先づ複合は分化を伴ひ、複雑性の増加は確定性の増加を伴う。斯様にして小さい原始的な等質的群が、異質的にして複雑な政治的社會となる。
3. 機構の分化は機能の分化を伴ふ。生物又は社會の一般的であつた機能は、特殊化された機能に分化する。そして益々能率を増進する。

4. 有機的並びに超有機的集合體の特殊化された機能をもつ分化された機關は、益々相互依存的になる。無機體と異り、有機體及び超有機體にあつては、其の如何なる部分の變化も總ての爾餘の部分の變化に影響する。斯の如くにして統一性は多様性と同時的存在である。

5. 有機體又は社會の生命は、その構成單位の生命に因つて産出され且制約される。

次に有機體及び社會の機關が、相互依存系統に分裂する過程を次の如く論じた。

1. 支持的系統 有機體の消化系統は、社會の生計支持的機關に類似する。いづれに於ても、機關の性質構造は、生活支持に役立つやうな手段に適合する。
2. 分布系統 生理的並びに社會的分業は、分裂し且協働する各部分に營養配賦の道を要する。生物の循環系統、社會の運輸交通手段及び通商交易の道が、此の目的の爲めそれぞれ必要の機能を營む。
3. 統制系統 各部分と其の機能の分化及び特殊化は、生物又は社會が其の生命支持の爲め、並びに他の生物又は社會との衝突に備へんが爲め、全一體としての活動を可能にする爲めの組織の一體系を必要とする。此の機能は「神經——發動」系統及び「政府——軍隊」系統に依つて掌られる。

第五款 要 略

以上に依つて、スペンサーの社會學は、社會を有機體的機能的實在と見、主として其の進化の理法を科學的に發見するのが主眼であつたことが解る。以上略述したもの以外に、なほ彼れの龐大な著書の中には多數の重要な問題が残されてゐるが、それ等を一々茲に取扱ふことは出来ないから、次に米國の社會學者ギディングスが作つた、スペンサー社會學の要略と稱するものを紹介して本節を結ぶことにする。

1. 社會は有機體又は超有機的集合體である。
2. 社會と其の周圍の事物との間には、自然界に於ける他の有限者間に於けると同様に、勢力の平衡がある。社會と社會との間、社會内の集團間、又階級其の他のものゝ間にも平衡がある。
3. 社會間及び社會と其の環境間の平衡支持作用は、それ等社會間に生存競争を惹き起す。
4. 生存競争に因つて、生者及び死者に對する恐怖が發生する。生者に對する恐怖は、衝突に隨伴して政治的統制の根源となる。死者に對する恐怖は、宗教的統制の根源となる。
5. 政治的統制並びに宗教的統制に因つて組織され支配されて、不斷の衝突は武力主義となる。そして此の武力主義が、人格・行動・社會組織を不斷の戰爭状態に適するやうに形作る。

6. 武力主義が多數の小社會集團を一層大きなものに併合し、そしてそれ等が更に益々大きく併合される。斯くして社會複合が達成される。此の過程は、人口中の益々多數の部分が永續的に平和状態にあり、そして産業に従事し得る範圍を擴大する。
7. 永續的平和と産業とが、人格と行動と社會組織とを、平和的・友交的・同情的生活に適するやうに形作る。
8. 平和型の社會に於ては、強制壓迫は減少し、自由意志と個人的創意とが増大する。社會組織は可塑的になり、個人は社會的結合を破壊することなくして自由に場所を移動し社會關係を變更することが出来る。そして原始的暴力であつた結合要素が、今は同情と知識とに置き換へられる。
9. 武力主義から産業主義への轉換は、所與の社會と其の隣接社會間、所與の民族の社會と他の民族の社會間、一般社會と其の自然環境間の力の平衡の程度に依存する。諸國民や諸民族間に平衡が確立されぬ限りは、平和的産業主義の最後の確立はあり得ない。
10. 社會に於ても、他の有限的集合體に於けると等しく、分化の程度と總ての進化過程の全錯綜は、複合進行の割合に因て定まる。其の進行度が緩慢であればある程、進化は完全で且満足である—— (Franklin H. Giddings: Studies in the Theory of Human Society, pp. 113—14.)

第四節 レスター・ウォード

Lester F. Ward (1841—1913)

1. Dynamic Sociology, 2 Vols., 1883.
2. Psychic Factors of Civilization, 1896.
3. Outlines of Sociology, 1898.
4. Pure Sociology, 1903.
5. Applied Sociology, 1906.

第一款 ウォードの略傳

コントが佛蘭西の社會學創始者であり、スペンサーが英吉利社會學の開祖であるに對し、ウォードは亞米利加社會學の元祖である。そしてこれ等三人は、いづれも家庭が經濟的に恵まれなかつた爲めに苦學又は自修で、初期の形成期にあつた社會學體系樹立の難業を企て、しかも永遠的價值ある大業を完成したのであつた。且コントは元來天文學者、スペンサーは土木工學と生物學が主であり、ウォードは古代植物と地質學が専門であつたに拘はらず良く社會學を大成したのだから、其の偉材と、不拔の精神努力とは、眞に後世學徒の模範である。

ウォードは家庭が貧しかつた爲め、勞働しながら僅かに小學校を卒へた。其の後或は農僕となり、或は車大工となり、一八六二年に二十歳で漸く中學に入り、二年間勉強した時、

南北戰爭が始まつたので學業を中止し直ちに志願して北軍に投じ、チャンセラーズヴィル (Chancellorsville) の戦ひに奮戦して身に三弾を受け、重傷の爲め癱兵として一八六四年十一月に軍籍をとかれ、其の功に因り、戰爭終結の年、一八六五年に合衆國大藏省の官吏に採用された。後には移民局長、統計局附屬圖書館長、合衆國博文館古代植物主任、地質調査省主任技師等の地位を與へられ、官吏を一九〇六年に至るまで繼續した。併し一方斯く官職に依て生活の道を立てると同時に、彼れは傍ら大學教育を受け、ジョージ・ワシントン大學 (當時コロンビア大學と云つた) から一八六九年に文學士を受け、一八七一年には同大學から法學士を受け、更に大學院で植物學を研究して一八七三年にマスター・オブ・アーツの學位を授けられた。後に一八九七年に同大學は、彼れの學界に於ける功勞を認めて法學博士の名譽學位を贈つた。一八七三年から一九〇六年まで彼れは植物學及び地質學の研究を續け、これ等の學問上の研究に關して、六百種以上の優秀な論文其の他の發表物があり、最高權威者の一人である。斯く一方自然科學を本業として居る間にも、彼れは早く大學時代から既に社會學には異常の興味をもち、コントやスペンサーの著作物に注意してゐたが、大學卒業の年には既に社會科學に關する大規模著作の梗概を作り、其の後公職と他の研究との傍らずつと其の計畫を繼續進行して、一八八三年遂に不滅の價

値ある名著『動的社會學』の大業を完成したのであつた。そして更に續々と其の他の社會學的著書をも公にし、一九〇五年シカゴ大學のスマールが米國社會學會を創立すると同時に其の第一代の會長に選ばれた。一九〇六年に、彼れは四十一年間の永い官吏生活を止めて、ブラウン大學の社會學教授になつた。スペンサーと等しく四十二歳の中年で社會學者となり、六十五歳の老齡に達して初めて社會學の教授となつた。そして其の後死に至るまで七年間其の地位に止まつて、最後まで社會學を研究し續けたのである。一九一三年四月十三日に、七十二歳で歿した。

彼れの社會學の著書は、最初の著作『動的社會學』が社會學の一般法則を説いた最大最高のものであり、後の著書は大體に於てその敷衍擴大であるから、大部分これに依つて彼れの説を紹介し、更に『動的社會學』に次ぐ名著『純粹社會學』と『應用社會學』に關しても多少要點を附加して、以下彼れの社會學體系を考察しやう。

第二款 ウォードの社會學の重要點

ウォードは『動的社會學』の序文で、彼れの社會學體系中若し從來の學者に依つて注意されなかつた新原理があるならば、其の主要なものは恐らく左の諸點であらうと云つて、みづから次に掲げる五項目を數へてゐる。

「1. 一般進化の法則と區別された集合の法則。

2. 社會力説、及び社會力が感情と機能との間に含包する根本的對照。
3. 一方これら眞の社會力と、他方動能の間接的方法の適用と發明・藝術・動的活動の本質とを具象する所の悟性の指導勢力との對照。
4. 人爲的即ち目的的過程の、自然的即ち發生的過程に對する優越。
5. 世界の現存知識の平等的且普遍的分配に對する最高必要の認識及び表明。

以上の中最後は最も重要なものである。從來世上に、これ等眞理に關する朦朧たる描寫はあつたけれども、其の何れもが、未だ曾て組織的に明示され又は明確に認識されたものはないと信じられる。』——と云つてゐる。(『動的社會學』第一卷序文七一八頁)

第三款 一元的宇宙觀

ウォードの社會觀は、先づ其の出發點に於て、徹底的な一元論的且綜合的な宇宙觀に立脚してゐる。其の要點は次の如くである。

1. 宇宙萬有の基礎は一種のエネルギーである。それは自然力であり、又宗教の神である。此のエネルギーは、宇宙創造の過程に於て萬物の構造中に蓄積され、其の本質は一元的物質的であるが、併し其の最高表現に於ては又

高度に精神的である所の、同一原則の下に調和良く作用しつゝ種々に表現されるのものである。

2. 天體の星も人間の精神も、皆同一起原をもち、そしてたゞ其の構造と機能とが異なる所の宇宙エネルギーの分化したものに過ぎない。人間も一般動植物も、其の他總ての無生物體も、悉く其の根柢に於ては同一宇宙エネルギーの表現である。
3. 宇宙エネルギーは創造的建設的のものであり、總ての外見的破壊すら又一種の改造に過ぎない。エネルギーの衝突的表現の絶えざる複合、即ち協力の原理 (the principle of synergy) に依つて、綜合的創造 (synthetic creation of nature) が行はれる。綜合的創造は進化的であり、其の系列に於ける後者は順次前者からの展開であり、總て萬物は全一體としての聯絡關係をもつ。
4. 此のエネルギーの法則は、又倫理道德や宗教の本質を説明する。何んとなれば、これに依つて人間は宇宙萬有と親族關係に立ち、そして人智に理解され得る限りに於ては、人間こそ此のエネルギーの最高表現であり、宇宙萬有の一部分、即ち大宇宙の一縮圖であり、又永遠不滅の一部分である。

即ちウォードの宇宙觀は、單純な唯物的一元論ではなく、其の最高表現に於ては精神的文化的である一元的エネルギー

の展開として考へたのである。

第四款 集合の法則

第一項 第一次的集合、即ち宇宙進化 (Cosmogony) — 物質の生成

物質とは、あるらしく見える所のものである。視界にある宇宙現象は、物質分子間の關係の系列として最も良く説明することが出来る。物質は哲學的に考察すれば、無限に分裂し得るが、併し決して思索中に於て無に還元することは出来ない。世の中には常に、科學の出發點を構成する所の、究極的分子・原子・電子・又は其の他何等かの可觸的小區分體の觀念がある。先づ全然非集合的等質狀態に於て存在し、そして引力と放射力との二種の力の法則に従つて作用しつゝある不滅の運動を具へてゐると推定された物質から出發して考へて、其の必然的歸結は、空間の或る部分に或る種類と程度の物質の集合が発生するだらうと云ふことにならざるを得ない。そして此の場合には、等質狀態は破壊されて、一種の異質狀態が発生するだらう。此の原理に依れば、宇宙に於ける集中的運動 (concentrative motion) の分散的運動 (dissipative motion) に對する超過を推定しなくとも、如何なる程度の集合でも容易に説明することができる。何となれば、吾々に取つて研究可能である所の、是ら等質狀態の凡ゆる高等表現を通じて觀察され得ると同様の旋律的干満高低が、亦物質の根

本状態に於ても存在すると想像されざるを得ないからである。一方に於て、今日形成されたやうな集成體は、分解の大きな干潮の爲めに、悉く洗ひ去られる時が確かに來るかも知れないし、そして宇宙の他の部分に於けるそれに匹敵すべき進化の満潮に因つて代償されるだらうけれども、併しそれにも拘はらず、そこでそれが始まつた部分に於ける宇宙進歩の繼續又は程度に關しては、無限以外の何等必然的制限はないのである。併し又同一原理に因つて、宇宙のどんな部分に於てとも、非集合的状态は相當の長期間に亘つては存在し得ないことが説明され得る。そんな状態は一種の絶對的等質状態であり、従つてその固有の不安定性は常にそれを破壊し、そして唯一可能的な異質状態——即ち多少の集合状態を惹き起すことができる。宇宙の變動はそれ故に、集合状態と非集合状態との間に發生するのではなく、集合の程度の相異なる状態間に發生するのである。

科學の機能と其の範圍とは、種類・形態・大きさ・又は關係に何等實際的制限をもたぬ所の物の集合體の研究である。物質の基礎を成す化學的元素は、分子的及び質量的特質を有し、可觸物質を形成する爲めに、種々の状態の下に於て特定の割合に結合する。あらゆる既知の物質——それは瓦斯體であらうと、液體・固體・生命體・非生命體であらうと、最も不安定的且等質的な星雲から最も具體的分化的な有機體に至るま

で——外見上無限の形態を有する物質と名付けられるものは、悉くこれ等元素に還元され得る。

第二項 第二次的集合、即ち生物發生學 (Biogeny)、精神發生學 (Psychogeny) 及び人類發生學 (Anthropogeny)

1. 生物の起原 Biogeny 化學的元素は非常な高熱——恐らく攝氏の約六千度位の熱の下に形成されたい。元素の強い安定性が此の事を表示する。熱の下降につれて元素の結合が増加し、複雑性の増加は安定性の減少を來す。現今地球上の溫度に於て、不安定的結合が絶えず形成されつゝある。それは主として酸素・窒素・水素・炭素の種々の割合に於ける結合であつて、「有機的化合」と呼ばれる。

生物學は左の與件に因つて、生物の無機體からの發達を説明する。

第一、蛋白質的物質なる類似蛋白質(protein)なるものは生物の組織中に見出される所の總ての元素的物質を含有する。

第二、類似蛋白質が、更に複雑な結合を爲して原形質となり、生命現象を現はす。原形質の化學的性分は正確に解つてゐる。原形質的物體が更に集合して原形質體(plassonbodies)となり、それが更に同様の過程を経て生

物細胞 (biologic cell) となり、これが總ての一層高等な有機的發達の基礎となる。斯様に生命は物質集合の結果である。海底には、大量のまだ分化を遂げない不定形原形質が存在し、それは組織無しにあらゆる生命現象を現はしてゐる。此の物體は動物植物の細胞中に見出される所の物質と同様のものであり、そして又自發的運動の同一特質をもつ。

第三、個々の原形質體は右と同一物質から構成され、同様の運動力を具へてゐる。たゞそれは特定の容積をもつから、明確な個體を成してゐる。これは運動力、營養攝取力、生殖力をもち、従つて生物ではあるが、まだ全然組織化されてゐない。

第四、單純な單細胞生物と此の原形質體との差は、たゞ前者はその原形質集合體の中心に核をもつことだけである。核自體も亦原形質から成り、他の一般原形質と密度や色彩等が異なるだけである。

第五、あらゆる生物は、動植物とも、これ等細胞の結合から成り、細胞は生物學上形態學的單位を成す。

第六、以上の要點は、生命は化學的即ち分子的の集合體である。即ち生命は、原形質なるものゝ一特質である。そして原形質は、水や石灰と等しく眞に化學的物質であり、その特質はそれと不可分的である。恰かも水

がその有する特質に因て、適當な状態の下に於ては球狀體となり又は結晶體となると等しく、原形質は、その有する特質に因て生命有機體に發達するのである。

2. 精神の起源 Psychogeny 總ての原形質は、形態を變化し得る伸縮性なる、著しき特質をもつ。この現象は收縮性又は可動性と名付けられる。それは則ち純然たる生命現象であつて、最後の分析に於ては結局生命觀念の唯一的事實である。併しこれは又同時に精神現象が發生する出發點であつて、生物學も心理學も共にこゝから分岐する。最も抽象的意義に於ては、生命も精神も共に同一事實の二局面に過ぎない。その事實は收縮性でも又可動性でもなく、兩者の基礎を成し又それ等を惹き起す所の分子的變化である。

あらゆる收縮性現象の表現は、必然的に感受性現象に隨伴される。そして感覺と感覺保持の觀念の根柢には一層包括的な意識の觀念がある。感覺の本質は意識である。故に意識の特質は、あらゆる原形質の分子中に或る限度に固有的であると推定しなければならない。

精神現象は、腦其の他の神経系統の物質的分子間に存續し、そして又一方神経系統と、他方實際上機械的接觸手段に依て神経系統に訴へる所の外界の物質的對

象との間に存在する關係である。精神は關係的であるが故に非物質的である。併し總ての關係と等しく、その基礎として物質をもつ。即ち腦と神経系統の調整された装置に因つて發動させられる所の生命體の組織立てられた物質をもつ。

3. 人類の起原 Anthropogeny 宇宙進化の過程は中絶しない。そしてそれは人間をも含む。併し凡らゆる有機的生命の形式中に於て、人間程他の形式と非常な相違をもつものはないので、人間は他の生命體とは別の起原をもつのではないかと云ふ疑ひを起させられる。だが如何に人間が他と違ふとしても、動物の生命や種屬の起原に關しては、其の間の關係と等質との事實を否定する事は出来ない。兩者の發達史は同一であつた。

以上の如き基礎觀念から、ワードは更に人類の生物學的並びに人類學的説明を與へてゐる。

第三項 第三次的集合、即ち社會發生論 (Sociogeny)

人間社會は、究極的原子から社會的集合に至るまでの、宇宙進化の永い繼續的系列中に於ける最後の段階である。總ての他の集合體と等しく、それは自然淘汰又は適應の成果である。人間に特別の内在的結合傾向の存在を推定すべき何等の理由も存在しない。人間に關しても、其の他總ての場合に於けるが如く、牽引力と排斥力とがある。人間の場合には、前

者を社會的と云ひ後者を反社會的と名附ける。そして人間結合の程度はこれ等二つの力の結果即ち平衡状態である。

優秀な叡智又は功利的理解力が、主なる社會化要素となる。神経系統の發達と言語の發達と社會の發達とは、相互的に有利に作用し合ひつゝ、同時的に進展したに違ひない。

第五款 社會力——感情又は慾望——動的作用

次にワードの社會力論を彼れが『動的社會學』及び『純粹社會學』に於て述べた所に依つて紹介する。

1. 總ての活動可能的生物は、慾望と名附けられる所の、彼れ等の精神状態に従つて活動するのである。慾望なき所には自發的運動と呼ばれるものは存在しないだらう。故に吾れ等は、慾望は總ての活動の本質的基礎であり、)そしてそれ故に有情界に於ける眞の力である、と推定して満足せざるを得ないのであらう——事實と論理的調和とが、この理論の適用を人間並びに總ての他の下等動物に對して、等しく豫想すべき事を吾人に要求する。(『動的社會學』第一卷 四六八頁)

2. 有機世界に於ては、自然は二つの根本的目的をもつ様に思はれる、——即ち個體の保存と種屬の繼續とである。これ等の目的は、必要な活動を爲すやうに個體を導く所の、個體に固有の慾望の手段に依て達成される。生命に絶對的に必要な二つの機能は、營養と生殖とである。あらゆる有情者にあつては、これ等の機能に相應する二種の慾望がある。それは

食慾及び性慾と呼ぶことが出来る。(「動的社會學」第一卷四六八頁)

3. これら自然の目的に對し、生物のこれに相應する目的を想定することが出来やう、——人類に關して云へば、それは則ち人類の目的である。自然の目的は生命の保存と永續とであり、人間の目的は欲望の満足にある。前者は客觀的であり、生物學的過程を構成する。後者は主觀的であり、道德的又は社會學的過程である。(「動的社會學」第一卷 四六九頁)

4. こゝに吾人は「固有の本質的」社會力を見出す。併し別に又これ等根本的欲望の派生形式がある。それ等は、其の種々相が此の根本的基礎の上に立つものなることが殆んど認識し難いまでに、廣く經濟的並びに家族的生活の全面に涉つて擴大する。

5. 併しこれ等の或は固有的又は派生的の本質的社會力以外に、なほ主として派生的であり、そして非本質的と呼び得る所の他の社會力がある。それ等は營養と生殖と云ふ二大機能に直接結びついてはゐないが、それ等の或る者は、人間の發達した状態に於ては實際非常に重要なものとなつた。これら派生的欲望は、第一に美的情操——第二に感情的又は道德的の力——第三に智的力である。(「動的社會學」第一卷 四七一頁)

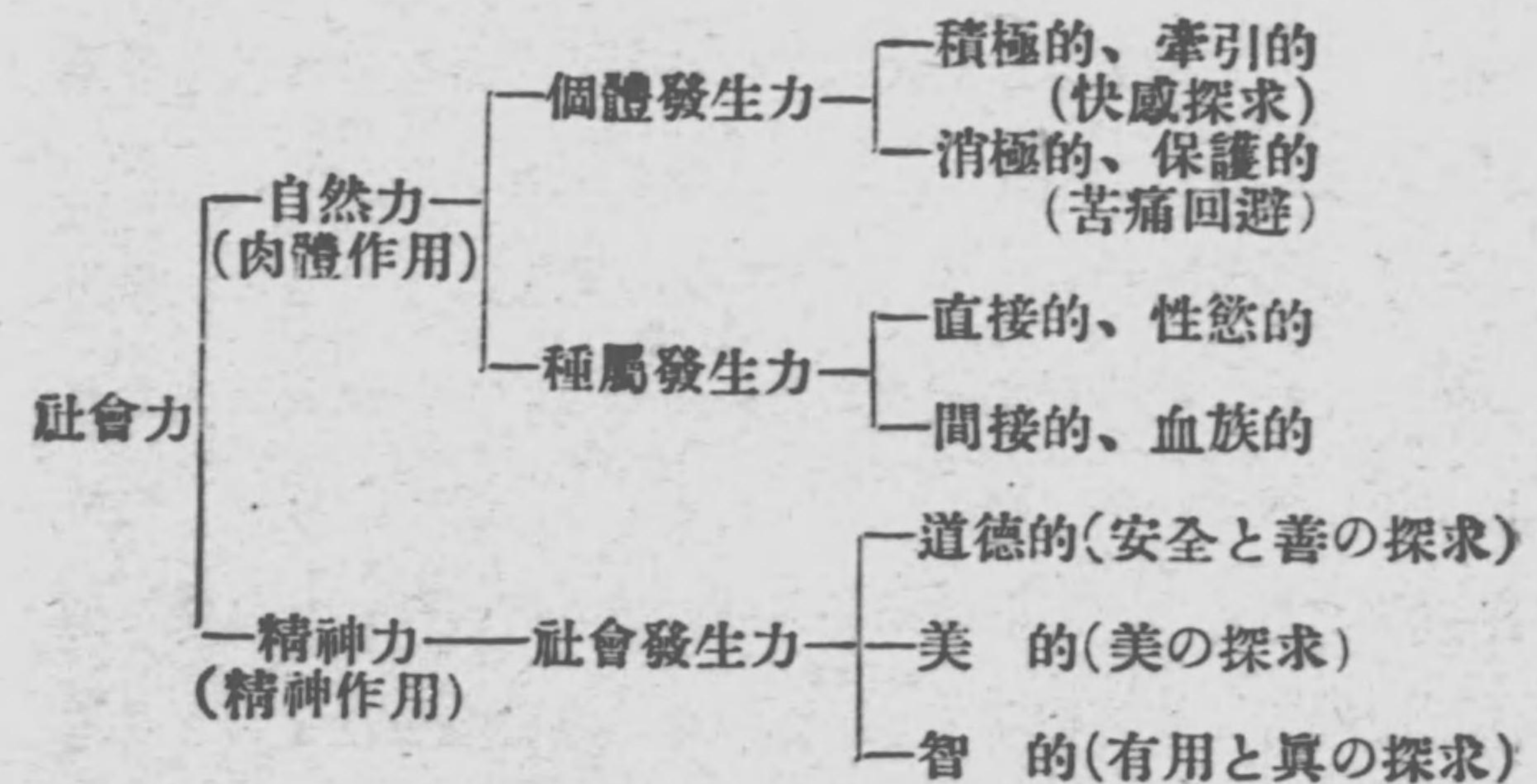
6. 保存的及び生殖的の本質的力は、それぞれ個體發生的(Ontogenetic Forces) 及び種族發生的(Philogenetic Forces) と呼ばれ、非本質的の力は社會發生的(Sosiogenetic Forces)

と呼ぶことが出来る。(「純粹社會學」二六〇頁)

7. 以上の諸事實の社會學的重要性は、それ等事實が、生物に依つて表明される現象は、他の種類の現象に固有であると同様に一定の感知し得べき特性をもつこと、そしてそれ等特性の手段を通じ、技術の適用に依つて、現象は調査され・理解され・且支配され得ると云ふことを、吾人に表示する科學的意義をもつ點にある。諸他の現象と等しく社會現象は、一定の先行原因から發生し、科學の力の範圍内にある制約に依存し、そしてそれ故に、自然現象が支配され得ると同様に、これ等先行制約の賢明な變更に因つて又支配され得るだらう。

(「動的社會學」第一卷 四七三頁)

8. ウォードの社會力分類圖解



(「純粹社會學」——二六一頁)

以上の社會力の分析は、ウォードの社會學の中心概念の一

つであり、「動的社會學」第一巻と、「純粹社會學」とに於てこれが爲め數百頁を費して居るのである。

第六款 叡智の指導力

次にウォードは、社會過程上に於ける叡智の重要作用を認め、「動的社會學」中に大いにこれを論じてゐる。彼れの説に依れば、精神の發生的根本部分は、個人並びに社會に動的力を與へる感情である。これ等の感情は、分化されない原生的生物有機體の根本的飢餓の感じから發達し、進化の過程中に於て、今や人間性中に認められるやうな肉體的・情緒的・智的欲望等の集成體となつた。そして、生存競争の過程に於て生物を有利にする爲めに、叡智は感情指導者として徐々に進化した。初めそれは無意識的直觀形式に於て、次いで半意識的、更に意識的推理形式に於て、そして最後に廣汎な普遍化と深遠な眞理洞察能力となつて進化した。

併し若し感情が根本的に人間行動を指配するならば、暴力に依る以外は調節を求めることが出來ないで、欲望衝突の爲め不斷の鬭争状態に陥るだらう。そして安全性を無視した快樂強調の爲めに、社會は結局自滅に終るだらう。故に徐々の進化に因つて叡智が發生し、社會存續の目的を達すべき手段方法を認識するに至り、個人的自制と社會的協働の有利性を示すに至るのである。社會的叡智は、徐々に抑制と拘束、法律慣習、理想と主義等を作り上げ、肉體的感情の勢力を一層

高等な情緒や野心に誘導するやうになる。この時以來社會は只に肉體的感情の満足を求めるだけでなく、道德的標準・美的理想・智的眞理等に對する欲求をも満足させる爲に努力して來た。これは單なる肉體的基礎から文化的基礎への變遷である。叡智が精神内に益々大なる部分を占むるにつれて、それは個人的指導に對してだけでなく、更に進んで社會的指導の理想をも構成し得るやうになり、即ち社會は集合的選擇過程(collective teleosis)の段階に進展して、熟慮的に其の將來の計畫を立てるやうになる。

感情又は慾望は、あらゆる有情的現象に關し第一要素を成し、そして其の種々相に於て社會力を包括する。併し進化の一般法則下に作用しつゝある所の自然的社會力は、其の性質上動的であるが、自然進化の特徴であうやうな種類の進化をもたらすに過ぎない。それは先づ社會を創造し、そして從來の其の發達を説明するには足りたのである。それは受動的又は消極的進歩と呼ばれべきである。併しこれと別に、知識と云ふ外來的要素に基因する所の能動的又は積極的進歩と名づくべきものがある。進化の法則に因て決定される所の社會現象の常道に加ふるに、吾人は又それ等を特別の進路や目的へと制限し且指導する所の、新しい力を認めなければならない。それが他の諸力と區別される主なる特質は目的と云ふことである。約言すれば、それは目的々力である。非智的者と

して考へられた純然たる自然の過程は、決して社會現象を説明するに十分なものとは考へられなかつた。目的々力が特別の進歩的目的に向つて、人事を支配し、統制し、制限し、指導すると常に信じられて來た。古くはこれは神學的觀念であつたが、目的力の觀念そのものは一種の神人同性的觀念である。併し此の人間が自分自身の爲めに自然を修正し得る人間力に對して、これを人間の神性に歸着して説明されたことはなかつた。此の目的々智力を、吾人は社會動學の眞の能動的又は積極的力として提言する。

一般に了解される所に依れば、智力 (mind-force) は實は何等の力でもなく一種の制約に過ぎない。それは推進するのではなく、たゞ指導するだけである。此の定義の狭い範圍内を除けば、文明が表はす廣大な成果をもたらすものは智力ではない。と同時に又文明の成果は智力なしでは決して獲られないのである。即ち總ての成果をもたらした原動力は既に検討した社會力であつて、智力はたゞ社會力の進路を適當に指導するだけである。智力の役目は、社會の進行を障礙なき道筋に導き、これら社會力の自由活動の繼續を可能ならしめ、進路に於ける障礙物との衝突に因つて停滯することを防止するにある。換言すれば、文明に関する智力の機能は、社會力の動的状態の保存とその靜的状态の防止であり、そして社會力と社會力以外に作用しつゝある自然力との間の平衡の恢復

を阻止するにある。

第七款 人爲的目的々進歩の自然的進歩に對する優越

動的社會學が力説するのは人爲的進歩である。人爲的進歩の大なる成功は、最も忠實に自然を模寫するに因るのではなく、最も完全に自然を變更して、人間に有利に征服するにある。先づあらゆる進歩は適應に依て持ち來たされる。そして適應には二種ある。一つは受動的即ち一致的であり、他は能動的即ち豫見的である。前者は自然的進歩を表はし、後者は人爲的進歩を表はす。前者は成長を結果し、後者は製造となる。前者は發生的過程であり、後者は目的々過程である。受動的適應にあつては、目的と手段とが互に直接的近接状態にあり、極小的相違に因つても變種が發生する——即ち分化過程である。能動的適應にあつてはこれと反對に、目的は手段と遠く距つて居り、手段は深慮先見の作用に因て目的を獲得せんが爲めに調節されるのである。これは即ち計畫的過程である。智的目的々進歩は、非智的自然的進歩よりも一層經濟的であり且急速である。力の浪費を省き失敗を減少するからである。

自然淘汰に因る盲目的適應過程と、人爲淘汰に因る目的々業績の過程との間には種類的差別があるとし、後者に對してウォードは「選擇過程」(telesis) と云ふ名稱を附した。そして選擇過程の成果を「目的々進歩」(teleological progress) 又は

「人間目的々進歩」(anthropoteleological progress) と名づけた。

感情又は欲望は動的力を構成し、叡智は指導的力となつて作用し、其の結果として人間の業績即ち文化が生ずる。「人間業績」(human achievement) の現象は社會學の與件を構成する。そして社會學の主題は實に此の人間業績である。何んとなれば、それは「人間は何であるか」よりは「人間は何を爲すか」であるからである。それは又構造ではなく機能である。構造や機關は手段に過ぎず、機能が眞の目的を成す。人間と他の一般動物との廣義の區別を認め得る特徴は、此の永續的人間業績である。環境は動物を變形するのであるが、人間は環境を變形し得るのである。此の自然現象の人爲的變形こそ、人間行動の最大特徴である。それは業績を構成するものであり、他の一般動物には不可能のことである。此の業績の動因は、社會力の内容を具象する所の「關心」であり、其の方法は發明である。文明は何等人間の變化に因つて建設されるのではなく、「後天的才能」(acquired aptitude)の宏大なる機械的装置の蓄積に因つてなされるのである。發明は技術や制度となり、そして社會の永遠的所有物となる。これこそ人間の勞働が動物の活動と其の種類を異にする理由であり、そして又社會學が、反射作用と本能の力とに因つて、形成され繼續される所の、所謂動物社會なるものゝ研究を含めて取扱ふ

のは不適當である理由なのである。

以上の如く論じて、彼れはコントやスペンサー流の自然進化的社會進化觀に反對し、眞の社會進歩は人爲的目的々である故これを「業績」と呼ぶべきであると云つて、「進化」と「業績」とを區別した。そして業績こそ社會學の研究主題であると考へたのである。

第八款 動能——社會過程

目的々現象の特徴はそれが意識的業績であり、目的を包含し、そして努力を必要とすることである。總ての生物は生存の目的を達する爲めに絶えず努力しつゝある。此の生物界の普遍的努力は等しく人間にも及び、社會科學上の一重要研究事項を成す。斯く生物が其の欲望を満足させる爲めに表はす努力を「動能」(conation) と呼び、其の求める目的を「動能の目的」(ends of conation) と呼ぶ。動能は、發生的過程の特徴としての直接的動能と、叡智の作用に因て獲得される間接的動能との二種に區別する必要がある。そして人間の動能と社會過程を構成する所のその發達とを特徴づけるものは後者である。

第九款 人間動能の目的

動能の目的は六種類あり、その順序は變更を許さない決定的な次のやうの一序列を成す。

1. 幸福。快樂又は享樂の苦痛又は不快に對する過剩。
2. 進歩。自然現象を人間に有利に調和させることに於ける成功。
3. 動的行動。智的、發明的、即ち動能の間接的方法の行使。
4. 動的意見。人間の宇宙に對する關係の正確な見解。
5. 智識。環境に對する熟知。
6. 教育。現存知識の普及。

以上の六つの定義に相當して、動的社會學上の六つの定理がある。即ち次の通りである。

1. 幸福は動能の究極目的である。

幸福は總ての人間努力の目標であり、動的社會學の問題は幸福の組織である。幸福の根本的基礎は感情である——即ち快樂の愛好と苦痛の恐怖である。より大なる幸福が個人に依つて直接的に求められるかも知れないけれども、それは社會を通じて間接に獲得される。

然らば其の獲得の過程はどうであるか。即ち以下列挙する通りである。

2. 進歩は幸福の直接手段である。

故に進歩は動能の第一近接目的、即ち究極目的の第一手段である。進歩は「人類幸福の總和を増大するもの」と定義される。そしてそれは主として自然現象を人間に有利に調和さ

せることの成功に依つて獲得される。進歩は、可能力が常に機會を超過するが故に可能である。一層完全な満足に對する努力的慾求の剩餘が常に存在する。生殖は營養を侵害し、人口は生活資料を壓迫する。動物進化は環境の障壁に依つて限界される。併し腦力の發達につれて此の限界に對する不満が起る。そして進歩を構成する方法は、人爲的手段に依つてこれ等の障壁を除去するにある。此の目的を達する爲めの主なる手段は、交通の發達と生産技術の擴大とであつた。それ故に人間進歩は目的々であり、人爲的である。

3. 動的活動は進歩の直接手段である——故にそれは動能への第二近接目的であり、即ち究極目的の第二次的手段である。

進歩は、發生的現象と區別されべき人爲的現象であるから、それは全然人間行動の結果である。併し此の場合に「動的」と云ふ觀念こそ最も重要である。あらゆる行動が皆進歩的なのではない。自然的衝動から由來する行動は無意識的且靜的であり、それは社會秩序を建設する。動的行動は智的動能から發生し、これが社會進歩を惹き起すものである。それは目的々、間接的、發明的、仲介的である。そして動的行動には、個人的と集合的との二種類があるが、從來主として個人的又は小集團の限界内にあつた動的行動が益々社會化され、個人的選擇過程が集團的選擇過程に依つて補足され又は置き換へられる時、進歩の將來は益々有望になる可能性がある。

4. 動的意見は動的行動の直接手段である——故にそれは動能の第三近接目的であり、即ち究極目的の第三次的手段である。

人間が爲す行動は、彼等が抱くところの見解に依存する。そして行動の價値は、意見に含まれる二種の性質に因つて定まる——即ち意見の正確さと、意見の主題の重要さとである。動的意見の四大基礎は、宇宙論的・生物學的・人類學的及び社會學的である。これらいづれの場合に於ても、如何に人間が思惟するかは自然に取つては全然没交渉であり、其の過程は不變的ではあるが、人間自身に取つてはその見解が正確であることが根本的である。それに因つてのみ進歩は成し遂げられるからである。

5. 知識は動的意見に對する直接手段である——故にそれは動能の第四近接目的であり、即ち究極目的の第四次的手段である。

知識は意見の直接與件である。人間は單なる選擇行動に依つて合理的思惟を爲すことは出来ないから、知識（即ち叡智と經驗との合成體）の手段に訴へざるを得ない。

一般的精神に就いて見れば、現在人間の知識的能力は現に所有されてる有用な知識の量を遙かに超過するし、そして有用な知識の現在の蓄積はそれの一般的分配よりも遙かに超過する。その結果として、一般知識の水準は現在の知識獲得可

能性よりも遙かに低位に止まり、しかも其の低き知識さへも甚だ不完全な分配状態にある。

6. 教育は知識への直接手段である——故にそれは動能の第五近接目的であり、即ち究極目的の第五次的且最初的手段である。社會秩序を社會進歩にする秘訣は、正確なる知識を使用するにある。そして斯る知識獲得の過程を教育と呼ぶ——此の用語は明かに不完全ではあるが、先づ教育と呼んで置く。

a) 經驗教育、即ち「試行錯誤」的方法 (trial and error method) である。これは根本的であり、ある事物に關しては今なほ必要ではあるが、時間と努力との上から見て非常に不經濟である。

b) 頭腦練磨法としての「訓練教育」即ち「智的運動」法は幼稚な中世心理學の遺物であつて、今は餘り顧みられなくなつた。吾人は思案に依つて思惟を覺えるのではなく、寧ろ客觀的實在と接觸する手段に依つてこれを習ふのである。例へば數學の研究練習が推理力を強めると云ふ理論程馬鹿げたものはあるまい（ウォード自身は一流の數學者・統計學者であつた）。

c) 「文化教育」即ち「仕上げ」は望ましきものであり、そしてそれは本質的に快樂満足を與へることが出来る。

d) 「實驗的教育」即ち真理の經驗的發見法が本質的である。

これに依つて知識は増進されるからである。併し知識の發見は、その普及に對する何等の保證を伴ふものではない。そこで此の進歩の手段が獲得し得られるにも拘はらず、無智が進歩の大障礙として優勢である。

e)「告知教育」即ち世界の最も重要と考へられる現存知識を出來得る限り社會の全成員に擴張普及させる事である。一方進歩の最大手段たる正確な知識が獲得出來るにも拘はらず、他方進歩の大障礙物がなほ非常に多いから、これら障礙を排して知識の一般普及を計ることが社會進歩の最大問題である。

以上の如く論じて、ワードは社會進歩に對する教育至上主義を強調し、既に述べた如く「動的社會學體系の極致は、現存世界知識の平等的普遍的分配の最高重要性の認識とその表示である」と斷言するに至つたのである。そして彼れは、男女平等の強制的公營教育制度を主張し、其の教育の内容や手段方法等に至るまでも、熱心に研究發表した。

第十款 純粹社會學と應用社會學

ワードの社會學的な最大名著は「動的社會學」であり、これは彼れの全體系を網羅して居る。「純粹社會學」も「應用社會學」及び其の他も、皆其の延長的性質のものである。依つて本節中紹介した所は大部分「動的社會學」からであつたが、同時にそれは他の著書の説明ともなつたし、且「純粹社

會學」及び「應用社會學」からも時々併せて引用參酌しつゝ、ワード社會學の重點を述べたのであつた。併しワードが、彼れの學的體系上「純粹社會學」及び「應用社會學」をどんなものとして考へてゐたかに就て、以下彼れ自身の言葉を借りて略説しやう。

第一項 純粹社會學

「私の云ふ「純粹社會學」とは、社會現象と社會法則とをありのままに取り扱ひ、社會現象の發生過程を説明し、觀察される事實を惹き起した先行制約を探求し、そして人間の現存社會状態に關し、人間の知識状態が許容する限り心理學的・生物學的・宇宙論的因果關係に溯つて、原因論的診斷を爲すところのものと云ふのである。

併しそれは單なる診斷學に止まるべきであつて、總ての治療的處置は全然除外されるのである。あらゆる道德的考慮は此の場合だけは無視され、そしてたゞ現在事實のありのままの發見説明に注意が集中されなければならない。純粹社會學は「社會が如何にあるべきか」の問題、即ち如何なる社會理想にも無關係のものである。純粹的取扱ひ方法は總ての批判や是認の言明や毀譽褒貶等は必然的存在體に對しては全然適用すべきものでないとして、それ等に對して超然たる態度を取る。此の嚴密な客觀的取扱ひ方法はまた、如何にそれが醜惡であらうとも、事實をありのままに

直視することを必要とする。事實を辯解し又はこれを賞揚或は非難するのは、決して純粹社會學の役目ではない。同様に又純粹社會學は單にそれが高等民族の或る洗練された認識には嫌惡すべきであるとの理由の下に、眞に存在する事實を否定したり、それを故意に縮小し又は言ひ紛らはすが如きことは全然許さないのである。』(「純粹社會學」四—五頁)

即ちワードは、純粹社會學を純粹理論的經驗科學として取扱い、これに依つて社會現象の普遍原則を研究する一般社會學であると解釋したのである。

第二項 應用社會學

「その中心的考慮は、それが完成の域に接近する程度に比例して人類に有益のものとなる所の、眞の一社會科學と云ふことである。若しそこに、對手たる哲學的體系と特に異なる點があるとするならば、それは決して目的を見失はず又意識的努力の可能性を忘れないと云ふ、實際的特性をもつ事である。最も啓發された科學的な思想さへも支配するやうになつた所のものは、實に失望哲學に對する反動である。應用社會學は、今や世界に蔓延しつつあり、そして餘り偏狹な宇宙進化論の概念がそれを減少するよりも寧ろ増大するやうになつた所の一般的癱瘓症に對する一治療法を指示することを目的とする。應用社會學は、努力が知識に指導される限り、努力なるものゝ効果を揚言する。それは

科學的決定論の誤つた解釋に因つて人間行動の上に加へられた活動禁制を除去し、そして等しく誤つた意志力の概念に依據することなく、行動力を主張するものである。』(「應用社會學」—序文)

「丁度純粹社會學が「何んぞや、何故ぞや、如何にしてか」の問題を解決することを目的とするやうに、應用社會學は「何んの爲めにか」と云ふ問題の解決を求めやうとする。前者は事實・原因・原理を研究し、後者は主意又は目的を取扱ふ。一は社會學の主題を取扱い、他は其の用途を取扱う。純粹社會學が或る點に關しては如何に理論的であらうとも、應用社會學は本質的に應用的である。それは直接關心に訴へる。それは社會理想や、道德的考慮や、當爲の問題に關係する。純粹社會學は「社會の自然的發達」を取り扱うが、應用社會學は「自然的過程を促進する人爲的手段を取扱う」のである。純粹社會學の主題は業績であり、應用社會學の主題は改良である。前者は過去と現在とに關係し、後者は將來に關係する。業績は個人的であり、改良は社會的である。應用社會學は、社會改良の爲めに社會に依つて意識的計畫的に指導された人爲的現象を考察する。改良は則ち社會的業績である。純粹社會學にあつては、見地は全然客觀的である——それは社會の機能に關するものと云ひ得るだらう。應用社會學に於ては、其の見地は主觀的

である——それは感情に関し、集合的福利に関する。純粹社會學に於ては、人間の欲望や欲求が社會の發動要因として考へられる。應用社會學にあつては、それ等のものはその満足に因つて得られべき享樂の資源として考へられる。』(「應用社會學」九六頁)

更に彼れは應用社會學と、社會改良技術との區別を重要視して、次の如く論じて居る。

『併し應用社會學は政府や政治ではなく、公民學でも社會改良學でもない。それは社會學の原理を實際に當てはめるのではなく、如何にそれが當てはめ得られるかを示さうとするものである。それはやはり一種の科學であつて技術ではない。應用社會學が爲さうとして要求する最大限度は、社會的及び政治的行動に對する指導法則としての或る概則を設定することである。併しこれに關しても、それは極めて注意深く考慮しなければならない。原理はたゞ最高普遍化に因つてのみ成立する。それは現在の出來事や、其の當時の通俗的又は緊急の問題に對しても、最も一般的な關係をもち得るのみである。これ等の問題を詳細に論議し、そして特にそれにみづから參加するが如きは、科學を放棄して政治家となつたものである。スペンサーの業績の可なり部分はこの特徴をもつた適例である。彼れの「綜合哲學」中にさへ相當に此の弊害が発見される。それは彼れ

の偏見や感情を反映して居るから、それだけ非科學的である。のみならずそれは、私が度々説明した通り、全體として見たスペンサーの體系それ自體とも調和を缺き、寧ろそれと衝突して居る。』(「應用社會學」九——一〇頁)

以上に依つて見れば、ウォードは社會學と云ふ語の科學的用法に非常に注意深かつたことが解る。今日往々にして、「社會學的」と云ふ語を單なる「社會的」と云ふ語を混同して、犯罪問題・性問題・一般社會問題等をも其のまゝ悉く「社會學的」問題と呼ぶ人が多くあるが、これ等は全然ウォードの意味に反する不注意の通俗的用法である。

ウォードはスペンサーが科學的決定論の弊害を現はし、人間社會の發達進歩の過程をも恰も自然進化の過程に類似するが如く説き、個人主義的放任主義的社會進歩觀を抱いてゐたのに反し、人間社會と動物社會との嚴然たる區別を後者の目的々人爲統制にありと喝破し、社會の發達を人間の選擇的能動的心理作用に歸して、教育を中心とする集合主義的社會統制を主張したのである。即ち彼れは初めてスペンサー社會學の、機械論的、受動的、自然進化的社會觀を論破して、心理的、能動的、人爲統制進歩觀を樹立し、世界の社會學界に新しき動向を與へたのである。故に彼れは、所謂心理學的社會學の世界の始祖と見られるに至つた。

第五節 ガブリエル・タルド

Gabriel Tarde (1843—1904)

1. La Criminalité Comparée, 1885.
2. La Philosophie Penale, 1890.
3. Les Lois de l'Imitation, 1890.
4. La Logique Sociale, 1893.
5. L'Opposition Universelle, 1897.
6. Les Lois Sociales, 1897.
7. Études de Psychologie Sociale, 1898.

第一款 タルドの略傳

今迄に述べた三人の社會學者は、學の創始者及び初期の開拓者として、いづれも基礎的理論體系の全體的組織統一に専念したが、これから述べる諸學者達は寧ろ第二期的工作期に入り、それぞれ其の人の素質傾向に従つて異なる種々の特殊的研究に進んだのである。斯くして科學としての眞の發達期に入るのである。

佛蘭西の社會學者ガブリエル・タルドは、初めは法律學者であつた。パリの法律専門學校を出て二十六歳の時判事となり、其の後引き續き二十五年間其の職にあつた。併し彼れは早くから科學的實際問題に深い興味をもち、それ等問題に關聯しての哲學的方面にも注意を拂つた。そして官職の餘暇が多かつたので、これを専ら犯罪學の研究に費し、犯罪學・犯罪

統計學・形罰學等に關する一權威者と認められるに至つた。後に彼れは司法官の職を退いて、一八八〇年頃からは専ら研究と寄稿著述とに従事するやうになり、一八九三年に「犯罪人類學雜誌」「Archives d'Anthropologie Criminelle」の主筆となり、終生此の地位を繼續した。一八九四年には司法省統計局長に任せられ、同時に政治學専門學校教授となつた。一九〇〇年に一切の官職を退き、佛蘭西専門學校の近代哲學教授となり、一九〇四年にパリで歿した。彼れをして社會學者として世界的に重き地位を得せしめたのは、一八九〇年の大著「模倣の法則」であつた。彼れには多數の著書があるけれども、特に社會學的價値の顯著なるものは、「模倣の法則」、「社會的論理」、「普遍的對立」、及び「社會法則」である。

以下彼れの獨創的貢獻と思はれる要點を、彼れの主著「模倣の法則」と「社會法則」から抽出して説明する。

第二款 根本社會法則

「模倣の法則」の序文に於て、彼れは「純社會的」法則と云ふことを強調してゐる。「本書に於て私は、人間現象中生命的及び生理的特徴と區別して考へられる「純社會的」方面を出来るだけ明晰に指示しやうと努力した」と云ひ、此の研究を彼れは彼れの「純粹社會學」又は「一般社會學」として考へてゐた。

彼れは先づ科學の範圍内に於ける現象展開の三大過程を認

める、——即ち「反復・對立・適應」である。

第一、科學は總て「反復」方面から考慮された現象の調査である。現象が繰り返さなければ普遍化は不可能であり、單發的科學なるものはあり得ない。故に先ず「反復」に注意する。

第二、再生問題に加ふるに、科學は現象の破壊の問題にも關心をもつ。故に科學が注意を拂ふ所の事實のあらゆる範圍に於て、科學は第二の問題として、そこに存在しそして對象と密接な關係を有する「對立」の發見に努める。故に科學は力の間の平衡や、形態の均齊、生物の生存競争、總ての生物間の鬭争等を考慮しなければならない。

第三、最後に現象の適應と、創造的生産に於ける其の關係とが考慮されなければならない。

以上三者は科學が宇宙の神祕の殿堂を開く三つの鍵である。これ等は互に混同されてはならない所の三つの別個の法則である。併しそれは又、斯く一方特殊であると同時に他方に於ては互に密接な關係に立つ。(「社會法則」四一七頁)

以上三種の法則が、タルドが一般科學の發達、特に社會學の發達過程を説明する根本公式である。

第三款 現象の反復——模倣

タルドは、現象の正規性は其の反復性に基づくものであり、從つて科學は萬有の反復性を普遍化して初めて成立すると考へ、先づ反復を基礎概念として次の如く公式化した。

1. 化學・物理・又は天文の世界で認められる總ての類似性は、周期的運動——而して大部分は震動運動に依つてのみ惹き起され又説明される。

2. 生命の世界に於ける總ての生命的起源の類似性は、遺傳的傳承に因つて發生する、——それは有機體內又は有機體外に於て行はれる生殖再生の結果である。

3. 社會に於ける社會的起原の總ての類似性は、種々の形式の模倣——慣習模倣又は流行模倣、同情模倣又は服從模倣、教訓模倣又は教育模倣、素朴的模倣、熟考的模倣等——の直接又は間接成果である。(「模倣の法則」一五——一六頁)

此の第三公式を展開して、彼れの社會學は構成されたのである。模倣的反復の通則が社會學に於て占める地位は、習慣と遺傳の法則が生物學に於て、引力の法則が天文學に於て、震動の法則が物理學に於て占める地位に相當する。總ての社會現象がそれにまで還元され得る究極形式は、二人間に存在する精神關係である——此の二人中の一人は他の一人に對して精神的感化を與へ、そして此の感化は常に其の根抵に於て後者が前者を模倣することに因つて起る。此の模倣作用こそ社會の起原であり、或る一人が始めて他の一人を模倣した時から始まつたのである。

社會學者が社會學獨特の興件として取らなければならないのは此の關係である。こゝに彼れは社會的祕密の殿堂の扉を

開く鍵を求めべきであり、こゝに彼れは歴史の外見的渾沌と人生の真中に於て識別し得る所の、少數の單純ながら普遍的な根本法則を把握しなければならない。〔社會法則〕三九—六一頁

模倣はそれに因て發明が社會的に採用される手段である。それは可能的又は現實的に社會を創造する。それ故に社會は左の如く定義することが出来るだらう。

① 社會とは、其の成員が相互的に模倣する傾向を有するか、又は實際的模倣はない場合にも、其の成員は等しく同一雛形の傳承的模倣である共通特色をもつことに因り互に類似する所の集團である。〔模倣の法則〕七三頁

② 以上の如く定義して後タルドは、更に模倣を強調して、「要するに、社會とは何ぞやと問はれれば、それは則ち模倣であると答へる」と斷言した。〔模倣の法則〕八〇頁

これに依て見れば、タルドは社會の起原も、社會の過程も社會の本質も、悉くこれを模倣の想念に歸し、模倣の法則の研究が社會學の全體であると考へたのであつた。

第四款 論理的模倣の法則と論理外模倣の法則

タルドは模倣を論理的と論理外的との二つの法則に分けて分析する。前者は合理的選擇の場合であり、後者は無意識的・感情的・非合理的の場合である。

第一項 論理的模倣の法則

論理的模倣の法則は、個人が或る發明を他の發明よりも一

層有益であり、又は一層眞實であると考へた時、即ちそれが既に彼れの精神内に宿る（それも勿論過去の模倣に因つて）所の目的や主義と一層良く調和する時に作用する。斯の如き場合には、新舊の發明又は發見それ自體だけが問題であつて、發明者又はそれを採用する人物とか、發生の時や場所などに附隨して生ずる名聲又は不評判とは、分離して考へられるのである。

あらゆる新發明は、先行的信仰や欲望と直接關係がある。社會は相互的に或は助長し又は制限する所の同意と反對との過程に因つて組織される。社會制度は全然これらの状態に依存する。社會は欲望や欲求の競争と協働とに従つて作用する。故に進歩は一種の集合思考である。此の集合思考はそれ自體の頭腦はもたないけれども、續々現はれる發見を互に交換する所の、多數の學者や發明家等の間に模倣に因つて生ずる頭腦の連帶的作用に因つて可能にされる。

社會の進歩は個人の進歩と等しく、置換と蓄積との二つの方法に因つて行はれる。故にそこには論理的闘争と論理的同盟とがある。

A. 論理的闘争

これは二者間選擇の闘争である。そして肯定否定・賛成反對・又は競争者間の選擇の形式に於て現はれる。例へば、新發明が既存のものゝ置換として提供される場合は前二者のい

づれかに當てはまり、多數の發明が同一欲望を満足させやうとする時には第三の争闘形式が當てはまる。これは一方に於ては、新しい言葉・新宗教・新産業過程・又は新社會形式の出現に依り、そして又他方に於ては、多數の言語・政黨の綱領・建築のスタイル・或は社會制度の間の競争に依つて例證される。それは不決定を決定に變形する所の社會過程であり、三種の異つた方法のいづれかに依つて成し遂げられる——即ち對手の一方の進歩の延長に依る他の一方の抑壓か、暴力の行使に依るか又は非軍事的問題に關しては投票或は命令に依るか、或は對手雙方の和解又は自發的退却に依つてある。

B. 論理的同盟

闘争・置換の代りに、發明家は屢々互に助け合ひ補足し合ふことがある。これは發明の置換でなくその蓄積過程である。慣習・言語・宗教・政治思想・産業過程・社會改革等が既存制度の上に接合する。

吾人はこれを、進歩の革命的方法に對照して、進化的方法と名づけることが出来るだらう。そして以上二つの方法中いづれが採用されるかは、發明の性質と既存形式の種類とに因つて定まる。(「模倣の法則」第五章)

第二項 論理外模倣の法則

論理的法則は、實際上は容易に滑かに行はれるものではない。概して論理外的勢力が模倣されべき模範の選擇に干涉し

て、其の結果往々にして論理的見地からは最低級の發明が、たゞ其の地位又は發生の時の理由に因つてさへも選擇採用されることがある。

論理外的過程の作用上に光明を與へる模倣の様式に關する二つの豫備的觀察がある。第一に模倣は正確さに於て増大し、第二にそれは益々不隨意的且無意識的になることである。模倣は文明人の間に於ては、模倣することの熟練と便宜が發明の數と其の複雑性よりも寧ろ一層高速度で増加する程に、そんなにも社會生活の根本精神となつてゐる。社會生活は永い間には、禮儀作法の形式——換言すれば、個人的想像力に對する慣例の完全勝利——に導くやうに運命づけられてゐる。此の慣例の必要は、それが或る程度の強度に達する時には意識されるやうになり、そしてその満足の爲めに激烈で急速な方法を探る。丁度個人に於て、無意識的習慣は原來意識的且自決的行動であつたと等しく、國民に於ても、傳統慣習に依つて行はれ又は云はれる所の萬事は、困難な且非常に議論された輸入に依つて始まつたのである。人間は彼れがそれを望むから模倣するのだと考へるのは誤りである。何んなれば、此の模倣意思其のものが模倣に依つて傳承されたものなのだからである。

先づ理論的又は目的々價値は等量と假定して、論理外模倣には次の三種の形式がある。

A. 主觀的標本は客觀的標本よりも先に模倣される。

即ち内面的模倣は外面的模倣に先立つ。故に觀念の模倣は其の表現體の模倣よりも先に發生し、目的の模倣は手段の模倣に先立つ。

B. 社會的上位者は社會的下位者に模倣される。

これは名聲勢力の人格的方面である。模倣は上から下へと擴がる。單に個人だけでなく、階級も、又地方的區別も含まれる。下級者は上流階級を、田舎人は都會人を、野蠻人は文明人を、子供は大人を、被征服者は征服者を、と云つた風に模倣する。

C. 慣習模倣と流行模倣、即ち過去の模倣と現在の模倣。

これは名聲の非人格的方面であり、その中特に場所よりも時間的要素を中心として考へた場合である。秩序を立てる力と進歩を助長する力との間に何等最後の平衡が確立されないのは、社會本來の性質なのである。斯くて慣れたものと新しきものゝ模倣の間に不規則的な旋律的振動がある。或る時代或る場合には古きものゝ名聲が勢力を有し、又或る他の時代や場合には反對に新しきものが勢力をもつ。古きものゝ模倣を慣習模倣と云ひ、新しきものゝ模倣を流行模倣と云ふ。慣習が上位を占めてゐる時には、人間は其の時代よりも彼れ等の自國に一層心酔し、反對に流行が支配してゐる時には、彼れ等は自國よりは其の時代に一層の誇りを感じるのである。時

を経れば、流行も模倣作用に因つてやはり亦慣習となる。併し此の流行の精神が遂には慣習の精神に戻ると云ふことは、決して退化を意味するものではない。それがあらゆる一般文明の進歩の方法なのである。(「模倣の法則」第六章)

第五款 現象の對立

タルドは第二の根本社會法則として普遍的對立を論ずる。それは反復が理論的立場から重要である如く、實際的立場から科學の重要問題である。物理的分子間には索引反撥の如き衝突作用があり、生物間には生存競争があり、そして戦争に陥る所の社會的觀念や形式間にも競争や議論がある。科學の進歩は、最初認められ又は想像された少數の外面的粗雜なる對立を棄て、これに代ふるに無數の發見困難な深遠微妙な對立を取扱ふことに依つて實現される。天文學・物理學・化學・生物學・生理學・社會學・經濟學等に於て此のことは例證される。タルドの云ふ對立とは、最高度の相違又は推定的自然對立を意味するのではなく、それは二つの力・傾向・方向等の間の關係を意味するのである。對立中特に社會學的重要性を帶ぶるものは、時間關係が同發的である場合と、事件が前後的である場合とである。前者にあつては、衝突・闘争・それに次ぐ平衡があり、後者にあつては交替・旋律がある。

第一項 衝突的對立

衝突的對立はこれを廣義に解すれば、反復的現象の論理的

又は目的々闘争である。それは、最初の發明者からそれに影響される各人に至る迄、長い過程を通じて到達する所の、反對「模倣線」の遭遇である。これに戦争・競争・議論の三形式がある。非常に廣い論理的意味に於てのみこれ等は繼續的段階を爲すと考へられ得る。併し實際上は同時的である。

1. 戦争 戦争は對立が絶對的になつた時、即ち生存の問題そのものが含まれたか又は含まれたと信じられた場合に起る所の暴力行使である。主としてそれは、政治的類型の社會的對立から生ずる。それは、過去に於ける模倣線合同の産物である集團・氏族・種族・都市・國家・帝國等の、場所・資源・宗教的信條・政治的制度等に關する致命的衝突である。それは征服又は條約締結に依つて對立を解決するが、その方法は概して自己排除である。戦争は始め頻發する多數の極度に殘忍な小戦争から後に追々稀に生ずる少數のさ程憎惡心なき大戦争へと移り、愈々益々稀になつて平和の範圍が擴大する傾向を示す。實際上、戦争の發達は、他方に於ては平和の範圍の徐々の擴大である。

2. 競争 戦争が終局を告げた時にも、又戦争除去の過程の間に於ても、同時にそこには政治的類型の對照を成す所の經濟的類型の對立即ち競争がある。それは安全保證よりも生活支持に關係する。それは同種の物品の生産者間、消費者間、及び生産者と消費者との間に起る。文化の發達は、發明と模

倣の過程に因つて作られた欲望の増加並びに其の欲望満足の増加の爲めに競争を増々激烈にする。併し競争も戦争と等しく、小規模頻發的から大規模稀發的になる傾向をもつ。競争は、結社・會社・企業合同等の形に於て、自ら一時的に結合に還元する。併し斯様な方法に依つて、最早それ以上成長の餘地がないので、しばらく戦つた後に只だ互に結合することだけが出来ると限られた數の宏大な結合に遂に到達する。

3. 議論 議論は、流血行爲や破産行爲を伴ふ争議の代りに辯論的な争議である。それは概念的、即ち一般知的模倣線の衝突である。社會的對立の全範圍を通じて働きつゝある議論の一大原因は、教義信條・語句・道德的格言・産業過程・政治理論・科學的原理等が、恰も生物の遺傳的反履に因る増加の場合と等しく、模倣的反履に因つて幾何級數的に傳播擴充する傾向をもつことである。其の不可避的重複の結果は、目的々闘争に依る争議と排餘及び論理的綜合に依る雜種と文化の接觸融合とである。

第二項 旋律的對立

旋律的對立は、論理的聯合の對立である。それは力の興亡・來去に關するものであり、肯定又は否定ではなく肯定及び否定を交互的に包む所の衝突の形式である。それは癱痺及び破壊の力ではなく、促進と阻害の力である。それが量的であらうと又は質的であらうと、旋律なるものは自發的に適應する

所の力の正常的一作用であるらしい。移民や犯罪者の増減・景氣不景氣の交互的到來・國家及び文明の興亡等は其の例である。

第六款 現象の適應

適應は自然的調和である。反復は社會過程の方法であり、對立はその手段であるが、適應は實に其の目的である。

集團は、或る者が爾餘の者に適應したか又は全體が共同機能に適應したか其のいずれかの方法で、連帶的に適應した個人の集團體である。即ち集團は適應體である。又互に關係ある複數集團も相互適應をなすことが出来る。此の場合には一層高等な適應體が構成されるのであるが、それが更に次々に無限大の適應發達をする。

科學の進歩は、先づ第一に全體の廣大な調和、又は少數の巨大であるが漠然たる外面的調和を發見し又は想像し、そしてこれ等のものを漸次的に無數の効果的な微小な適應を形成する多數の内面的調和に依つて置き換へるにある。この過程は天文學や生物學等に於て明かに認められるやうに、又社會學の發達過程とならなければならない。

根本的社會適應は其の最後の分析に於て、其の中の一人は他の一人の無言・口頭・又は暗々裡の出問に對し言語又は行動に依つて答へる所の二人の人間間の適應である。此の根本的調和は、次の如き二人者間の關係である——即ち其の一人

は教へ他の一人は習ひ、一人は命令し他の一人は服従し、一人は製造し他の一人は購買し消費し、一人は俳優・詩人・藝術家であり他は觀覽者・讀者・好事家であるやうな——換言すれば、同一結果を作り出さんが爲めに協働する所の二人者間の關係から成り立つ。

進歩の基礎たる發明は、若し此の言葉を結局模倣されべく運命づけられてゐる對象に關連するだけに限るならば——と云ふのは創造者の精神内に閉ぢ込められて居るだけのものは何等の社會的價値は無いからであるが——それは人間間の總ての調和の母である所の觀念間の一調和である。新適應は、其の本質的特徴に於て一種の新發明であり、發明・模倣・適應の過程が繰り返されて上昇的進歩となる。

第三の發明を惹き起す所の二つの發明の精神的結合は、丁度以前にその要素が種々の實例の光に依つてその創造者の精神に持ち來されなければならなかつたと同じやうに、多數の概念を其の精神に纏める爲めに必然的に模倣の機能を要求する。そしてなほ、發明のあらゆる新綜合は、概して先行發明よりは一層廣範圍の模倣線を要求する。そこには模倣と云ふ統一的成長と、發明と云ふ組織化的成長との、二つの絶えざる錯綜がある。精神が一つの判斷から更に一層複雑な他の判斷へ、又は一つの選擇から一層包括的な他の選擇へと移る時には、それは記憶又は習慣と呼ばれる自己模倣の二元的

形式に於ける精神的反履の力に依つて、判断は概念に壓縮され、そこでそれの合同する二つの項目は密着せしめられ、識別され難くなり、そして選擇又は目的は常に一層少量の意識を含む所の反射作用に變質される爲めである。傳統及び慣習なる尊嚴ある名稱の下に、廣汎に涉つて社會に行はれる所の此の不可避的變形に依つて、吾々の以前の判断は概念に假裝して、或る新判断の要素の一部となるやうに調節される。吾人の理解や意志の最低作用から最高作用に至るまで、此の過程は變りなく同様に發生する。社會的であると同時に心理的である所の此の旋律に因つて、非常に吾人の賞讃を博する所の蓄積された發見や發明の多數の宏大な構造物——例へば吾々のもつ言語・宗教・科學・法典・行政制度・兵事組織・産業・藝術などのやうな——が、徐々に作り出された。

以上のやうに社會過程の展開を説明し、そして此の過程に於て、個人と社會とがどんな關係に立つかについて、タルドは個人優位觀を採り、次のやうに主張した。「あらゆる社會建設の材料や設計は皆個人的貢獻であるから、私は社會現象の本質的且獨特な性質と考へられてゐる所の、個人の上に加へられる拘束の專制的・不可抗的性質なるものを認めることを拒むのである。」

斯くして社會は、反復・對立・適應の過程を繰り返して、益々進歩發達するものであると説明した。

第七款 結 論

タルドは其の氣質に於て、科學者であると同時に藝術家であつた。一方非常に鋭い觀察力や精密な分析力を有すると同時に、其の説明は活氣があり興味を惹く。従つて一方に於ては彼れの著書は非常に廣く讀まれたと同時に、他方に於ては科學者間に往々淺薄皮相な戯文の如くに非難されたこともある。併し前述のやうな彼れの面白い二重的性格を豫想して作物を検討するならば、一見皮相の如き彼れの説明中には、やはり深遠不滅の眞理の含まれてゐることが見出されるだらう。例へば彼れの「社會は模倣」なりと云つたのは、甚だ淺薄輕卒のやうにも聞えるが、彼れの眞意は一層深い意味をそれに含ましてあるので、其の句の前後の説明關係から歸納すれば、それは「社會とは、それに於て彼れ等の創意が相互的に感化し合ふやうになり、そして有益なる協働的行動に調和され統一される所の、複數人の間の相互作用の繼續的過程である」と云ふことになるのである。これを彼れは、「社會は模倣なり」と極めて簡潔強力に藝術化して表現したのであつた。模倣の法則それ自體も、これを理論的體系全體として見る時は、往々世間に誤解される如き單純粗雜のものではなく、發明・反復・對立・適應の論理的過程の繰り返してあつて、確かに社會學上に於ける偉大な貢獻であつた。

彼れは複數者間の模倣を社會の本質とするけれども、其の

學的立場は個人の心意を中心とする個人優位主義であつて、社會は先づ個人から成り、社會秩序や社會變動の原因も皆個人の精神活動にあるとし、集合體それ自體の精神ではなく集團の成員たる個人の精神が集團生活の結果として社會的に變動するに過ぎないとした。此の點は後に述べるグンプロヴィッチやデュルケームの社會優位主義及び集團實在主義と對照を爲すものである。

タルドの學理は寧ろ單純であつた。又其の法則も短所缺點が少なからず含まれて居り、修正補足されべき幾多の部分がある。彼れの模倣の法則は、米國の社會學者ロッシ (E. A. Ross) に依つて、大に改良され、これに因つて愈々廣く世に認められるやうになつた。(Ross; Social Psychology, 1907) 即ち彼れの社會學は社會學の全部でもなければ、法則の最後の解決でもなかつたけれども、彼れは自己獨特の立場から特種の社會學問題を提げて立ち、勇敢に戦つて良く此の新興科學の發達に貢獻したのである。彼れはウォードと相並んで、一般に世界の社會心理學の始祖として認められて居る。

第六節 ルードヴィッヒ・グンプロヴィッチ

Ludwig Gumplowicz (1838—1909)

1. Der Rassenkampf, 1883.
2. Grundriss der Soziologie, 1885.

第一款 グンプロヴィッチの略傳

グンプロヴィッチは奧地利國北邊の露西亞との國境に近いクラカウ市 (Krakau) のポーランド系ユダヤ人の家柄に生れた。始めクラカウ大學に入り後にウィーン大學に學んだ。在學中から既に雑誌記者生活に入り、一八六九年には自分の個人雑誌を創刊して五年間それを繼續した。一八七五年に三十七歳でグラッツ大學の行政學並びに奧地利行政法の講師に聘せられ、一八八二年に教授となり、一九〇八年に病氣の爲め退職するに至るまで同大學で三十三年間其の教職にあつた。

彼れの研究は法律學の外に歴史學・政治學・社會學等に涉り、非常に博識高潔の人格者であつて、學生達は彼れに「天使」と云ふ綽名をつけてゐたさうである。併し彼れが學的名聲を轟かしたのは社會學に於てであつた。「民族闘争」と「社會學原論」とは其の主著である。これ等二大業績は各國語に翻譯されて世界に廣まり、彼れの古稀の祝賀には多數の碩學が集つて、彼れの學界に於ける功績を記念する爲めグラッツに社會學會を創立した。

併し彼れの人生は餘り幸福ではなく、其の晩年は悲惨な運命に見舞はれた。一九〇八年十月に彼れは、社會學界の長友であつた米國のウォードに送つた私信に於て、破損した齒の尖端が舌を痛め、醫者は痛らしいと云ふ。そして此の診斷が確證されれば其の時には、自分は自殺するつもりだと報告

し、次いで翌一九〇九年三月の手紙で、自分は非常に不幸な生活をして居ること、ワードの新著「應用社會學」の獨逸譯の完成を見るまで生きる見込はないこと、彼れの妻も病苦に攻められて居り、生きることは彼れ等兩人に取つて最早これ以上耐えられない過重な負擔であることを訴へた。此の病氣は實は癌ではなかつたのださうだが、越えて同年八月二十日彼れ等夫妻は共に毒藥自殺をしてしまつた。誠に氣の毒な偉人の末路であつた。

第二款 集團優位主義

グンプロヴィッチの社會觀は、先づ集團優位主義である。彼れは次の如く云つた。

社會過程の眞の要素は、個々の個人ではなく社會的集團である。故に歴史の展開に於ては、吾人は個人の行動の正規性ではなく、集團の行動の正規法を研究すべきである。（「民族闘争」三九—四〇頁）。

個人的心理學の大なる錯誤は、人間が思惟すると云ふ假設である。此の假設は個人の思惟の根源に對する絶えざる探求や、何故に個人は斯々思惟しそして他の違つた思惟形式を取らないのかと云ふ理由の探求に吾人を導く。そして素朴的な神學者や哲學者達に、人間は如何様に思惟すべき筈の者であると考へさしたり、又はさう思惟しなければならぬと他人に向つて忠告をするやうにすら彼れ等を誘導する。これは誤

謬の連鎖である。なぜならば、思惟するのは人間自身ではなくて社會集團だからである。彼れの思考の源泉は、彼れが其の中に住む社會的周圍の事情即ち彼れが呼吸する社會的雰圍氣であつて、彼れは彼れの頭腦に集中して來る所の社會環境の影響が彼れに強ゆる所のもの以外には何も考へる事は出來ない。吾人が考へるものは、幼時以來吾人が服従させられて來た所の精神的感化力の必然的成果である。出生に依つてそこに入り込み、その中に生活し、活動し、そして彼れの存在をそこにもつ所の社會環境は其の基礎である。そして恰かも一片の貨幣の如くに、世間へ出れば彼れは完成體である。人間行動の自由と云ふ信念は、人間行動は彼れの思惟の成果であり、又彼れの思考は専ら彼れ獨特のものであると云ふ觀念に基づいてゐる。これが誤謬なのである。彼れが肉體的にさうであると同様に、彼れは精神的にも自成ではない。彼れの精神と彼れの思想は、彼れの社會的環境の產物であり、それから彼れが生じ又其の中に彼れが生きる所の社會的原素の產物である。（「社會學原論」一五六頁）

第三款 社會過程論

グンプロヴィッチ社會學の特色は、人間綜合の根柢を成す社會過程の理論に於てである。これは彼れの「民族闘争」及び「社會學原論」に於て論じられて居るのであつて、其の要點は次の如くである。

1. 人類の多元的起原論 人類の起原に就て一元論を却け多元論を採る。そして太古へ遡る程多數の小民族が分離存在してゐたが、それらが追々少數の大民族へと融合統一されて行つたと考へる。
2. 集團的敵意鬭争 多元的起原をもつた爲め、人間は其の初めから、違つた集團・國民・人種等の間に必然的絶對的な敵意と鬭争とをもつた。
3. 鬭争に因つてのみ社會は成長發達をした。始めの人種的集團は群 (horde)、即ち血縁・地縁・又は共通の利害の紐帶に依つて結合された小群體であつて、種々の人種的特徴を代表する。各群は小さな一人種又は一社會を成してゐた。これ等多數の原始群は互に鬭争に因つて追々大きな群や社會に成長した。
4. 征服搾取國家の起原 總て階級化作用は、民族的集團利益の衝突に基づく征服作用に因つて始まる。そして階級が一旦出來上つた以上は、上位階級は下位階級を自己の利益の爲めに搾取することに依つて、階級制度を存續する。勝利を得た集團は敗北した集團を大いに搾取した。そして效果的にこれを支配する爲に法律を制定した。斯様にして征服者と被征服者間の聯合に因つて國家は成立したが、其の組織に於ては征服者は必ず特權支配階級となり、被征服者は奴隸的被搾取階級となつた。そして政府は、征服戰爭に於て指導的地位に立

つた少數者の支配の下にある。法律は支配と搾取との爲めに設けられたものである。中等階級は商工業發達の産物であるが、此の商工業も亦搾取の一形式である。

5. 言語宗教の融合に因る階級の調和 征服者と被征服者の言語は追々互に融合して一種の新言語が發達し、宗教も亦合同一體となり、これに因つて両者が益々接近融和する。被征服者の宗教は征服者の宗教に従屬的地位を占め、其の神も隷屬的群小諸神となる。

6. 國家の統一 以上の方法の繰り返しに因り、多數の集團が征服し又は征服されつゝ、益々少數の大集團——種族・民族・國家と云ふやうな——に統一されて社會國家が發生成長する。そして共通の經濟的・政治的・民族的生活を助成する所の集團的結合統一が確保され、斯くして敵意は外に轉じ、更に他の諸國家に向つて發動されるのである。

7. 鬭争の永續性 此の征服鬭争過程は、益々其の範圍を擴大するけれども決して其の特徵を改めない。斯くして結局將來に於ては、總ての人類が一國家の下に包含統一されることになるかも知れない。併し其の到來の時期は無限大に遠距離であるから、吾人は目下の状態に於ては「永遠的民族鬭争」と呼んでも差支へあるまい。

以上が彼れの社會過程觀・階級觀・國家觀である。

第四款 進歩に對する悲觀說

以上のやうな社會過程論の結果は、必然的に悲觀論に陥らざるを得なかつた。そして彼れは次のやうな極端な悲觀説を述べた。

勿論發明や發見の範圍内に於ては、進歩のあることは否定し得ない。併しそれを人間知識の一層大なる完成への接近と云ふ點から見て説明するのは誤りであらう。人智には一定された、それ以上擴大し得ない上部限界があり、それは少數の個人的天才に依つてのみ往々到達されるけれども、有史以來人智に何等の質的變化はなかつた。それはたゞ、其の上に働きかけべき爲めの材料の益々蓄積された供給を持つだけである。人智の固定の例證としては、自然力の發明發見と何等の関係もない範圍に於ては、即ち道德や哲學などの範圍内では、過去四千年間に亘つて何等進歩の表示がなかつたばかりではなく、何等の新しい事さへ云はれてゐないことである。普天の下何等新しいものはなく、又何等の新しいものも發見され得ない。道德、慣習、人間の幸福、社會關係等に關する吾人の認識は、最古の民族の示した認識力以上に成熟してはゐない。寧ろ反對に種々の點に關し、吾人の方が却つて彼れ等に劣ることのあるのを發見する。

生命に於て、歴史に於て、各人は彼れの自然的素質に依て制約されるまゝの運命を辿るのである。併し彼れの自然的素質なるものは彼れ自身に依存しないで、そこから彼れが生れ

出た社會環境に依存する。何となれば運命は、云はゞ彼れの屬する種屬の價値の割合に應じて彼れに降りかゝるものだからである。個人の運命が個人の業績に比例して定まらないのはこれが爲めである。彼れ自身の價値はそれとは違ふかも知れないけれども、それは問題にならない。歴史的の展開はそれには何等の考慮をも拂はない。

それ故に、社會の最高概念及び最後の言葉は、人間の歴史は一種の自然過程であると云ふことである。たとへ人間の自由及び自決と云ふ傳統觀念に捕はて淺慮短見に陥つてゐる爲めに、吾人は此の知識觀念は道德を毀損し破壊すると信するに違ひないが、併し實は其の反對にあらゆる人間道德の極致なのである。何となれば此の觀念は、そのみが歴史を支配する所の自然法則に對する人間の自制的服従を、最も莊嚴に説くものだからである。これらの知識の法則に貢獻することに依つて、社會學は合理的自制の道德——それは個人の想像的自由や自決、及び秩序の自然法則に反する恐るべき犯罪に現はれる所の不合理な大望等に基づくものよりも一層高等であるのだが——の基礎を設定する。

第五款 結 論

グンプロヴィッチは、スペンサーの極端な個人優位的社會觀に反對して又他の極端に走り、徹底的な社會優位觀を採つた。従つて個人の存在作用を看過又は無視したのは第一の缺

點である。次に人類の多元的起原論も、これは何ん等確證又は確認された學說ではなく、たゞ單なる一假説に過ぎない。そしてこの漠然たる假説の上に立てられた民族闘争説も、必ずあらゆる人格や民族が常に互に憎惡闘争するものではなく、又社會も國家も必ずしも戦争の結果に因つてのみ發生成長するものでもない。階級の發生も亦必ずしも征服關係の成果だけではなく、種々の階級が種々の原因に因つて發生する。殊に彼れの社會進歩に對する極端な悲觀説は、ワードの進歩觀と對比する時は、其の缺點がおのづから明かになるだらう。彼れも晩年ワードの注意深き警告説明に因つて、非常に此の見地に變化を生じたつたそうだが、惜しい哉これを明かに體系づけて發表する機會を待たずして不幸な終りを告げたのであつた。彼れの悲觀的宿命的な社會觀と人類の多元的起原説とが、ワードの議論に因つて變化を來しつゝあつたことは、彼れの「ワードに對する一オーストリア人の感謝」と云ふ論文中に簡単に發表されてゐる。それは第一に彼れの「社會の自然過程説」なる永遠的鐵則は、それ自體が一種の自然力である所の人間知識の助長に因つて修正されるものであること、次に彼れの人類多元起原説は、現代の地質學期に於ける統合過程には一致するけれども、併しその背面には、單一の發生地と共通の遺傳とをもつた所の人類が多數の等質群に分裂された所の反對分化過程のあると云ふことを

認めなければならなくなつたと云つた。併し此の修正は彼れの學說の一補足に止まり、民族闘争論なる彼れの根本觀念には少しも動搖も來さなかつた。

以上の種々の缺點にも拘はらず、グンプロヴィッチの社會理論は、闘争型社會過程説として、マルクスと相並んで新見地を開拓したものであつて、これら特殊の社會現象に對し世の研究者の注意を強く惹き、そして爾來これに關して益々注意深い科學的研究が多數世に現はれるやうになつたのであるから、彼れは新興科學開拓者の一人としての職責は十分に果したものと云へやう。

第七節 グスターフ・ラッツェンホーファー

Gustav Ratzenhofer (1842—1904)

1. Wesen und Zweck der Politik, 1893.
2. Soziologische Erkenntniss, 1898.
3. Soziologie, 1908.

第一款 ラッツェンホーファー略傳

ラッツェンホーファーは奧地利國ウィーンの貧しい時計工の家に生れ、幼時から父の仕事の手傳ひや徒弟奉公をして勞働に従事し、小學校教育さへ満足には受けなかつた。十六歳の

時志願して軍隊生活に入り、其の頃の軍隊の悪風に感染して酒色に耽り、盛んに喧嘩口論もした。何回もの決闘で受けた傷の痛手が晩年に再發して、これが爲めに彼れは遂に斃れたのである。

彼れは軍人として天稟の才を具へたらしく、其の昇進が非常に速かつた。二十二歳の時中尉となり、ポヘミヤ戦争に出征して勳功を立てた。一八六八年に陸軍大學に入り、一八七二年には參謀本部付きとなり、一八七八年に陸軍文庫の管理者となつた。この文庫勤務の數年間に、彼れの勉學に大いに役立ち、主として彼れの軍事問題に関する研究の基礎を作つた。一八八九年には大佐に昇進し、一八九八年には陸軍中將に任せられ、同時にウィーンの最高軍事裁判所長となつた。併し此の最高地位を占めたにも拘はらず、彼れの天性の理想性は軍事行政の精神に甚しい不満と失望とを感ずるやうになつた。最高司法権の發動までが餘りに專斷的であり、矛盾だらけであることを痛感して耐えられなくなり、斷然職を辭して四十二年間續けた軍隊生活を清算してしまつた。

彼れの學的經歷は斯くの如く、兵學を除けば全然獨學自修の人であり、何等指導者をも持たなかつたのである。併し彼れは荒い軍人生活をしてゐたにも拘はらず、早くから既に社會生活や政治生活に關して哲學的並びに科學的の強い興味をもち、餘暇を割いて熱心にコントやミルやスペンサーを研究

し、後に至てグンプロヴィッチに學んだのであつた。彼れの著述は、初めは皆軍事的のものだけであつたが、一八九三年に最初の社會學的名著「政治の本質と目的」を著はし、次いで一八九八年には「社會學的認識」を公にした。一九〇八年公刊の「社會學」は彼れの死後令息が其の後の彼れの遺稿を整理編纂したものである。

一九〇四年に米國セント・ルイス萬國博覽會を機として、同所に社會學大會が行はれ、世界の碩學が招待されて參列したが、その時ラッツェンホーファーも獨逸の社會學界を代表して出席し、「社會學と其の問題」と題する彼れの最後の講演を爲した。其の頃彼れは病が既に重かつたのを學のため押して渡米したのであつたが、歸途遂に船中に斃れてしまつた。

第二款 社會過程

ラッツェンホーファーの社會學は、グンプロヴィッチと等しく主として社會の機能に就いてあつて、スペンサーのやうに其の構造組織に關しての研究は殆んど顧みなかつたのである。即ち彼れにあつては、社會學は社會過程の學である。此の社會過程に關しては、これ亦グンプロヴィッチと等しく民族闘争に始まり民族闘争に因つて進行すると考へた。

今其の要點を次に掲げる。

1. 社會の原動力としての性慾と食慾

人類の生活支持と増殖、即ち自己保存と種屬保存の本能は

あらゆる社會的接觸の原動力である。總ての生物は、元來其の根本的衝動を、阻害されることなしに充たさうとする性向をもつ。即ち勞苦せずには食はうとし、無制限に生殖しやうとする。この根本的衝動は、阻害されることなしに地球上に擴がるやうに人間をも刺戟する。

2. 人口増加と生存競争

人口増加に因って惹き起された生活資料の制限が、個人と社會との上に生存競争を強制する。人類は他の生物と等しく、同種屬とは平和關係を持続しつゝ、求食生殖をすることを選ぶが、併し累進的な人口増加と生活資料の缺乏とは、其の個人的利害を他の總ての同胞人類の利害と絶對的對立状態に陥るやうにする。只人間が血縁又は勞働や戰爭に於ける協働などに因る關心の共同社會を構成する限りに於て、對立が姿を隠す。併し關心の共同が攪亂されるごとに、それは復忽ち現はれる。絶對的對立は、關心の共同の繼續に對する精神的保護者である。

3. 社會的相互關係の起原としての血縁

總て原始的社會組織は、血縁の共同に基礎づけられてゐた。併し人口の増加と食物の不足との爲めに、此の原始的社會組織は空間的分化を餘儀なくされ、その結果分散した人類が種々異つた生活状態を経験して、人種的分化を生ずるやうになる。そして斯様に分化した人類間の衝突は鬭争又は戰爭を誘

發する。

即ち彼れはグンプロヴィッチと正反對に、人類の一元的起原説を出發點として社會過程を分析した。

4. 征服國家の發生

血縁共同社會の社會機構は常に單純である。支配者に依る征服が、社會的接合と國家的生活の起原である。生殖と求食との動力の下に繼續的擴大が行はれ、或る民族に依る他民族の征服となり、そして生活状態は其の結果に於て益々複雑化し、文化は無制限に人間要求の形式を増加するから、社會機構の無数の分化が初まる。社會機構の分化と混合が、社會過程の實際的内容である。

5. 新社會機構の個性化と舊社會機構の社會化

社會過程は一面から見れば、新生社會機構の個性化と既存社會機構の社會化との繼續的旋律である。併しこれ等個性化も社會化も共に、其の根柢は個人の關心である。機構の個性化過程の方面は變異となつて現はれ、社會化方面は社會機構の進化として認められるやうなる。

6. 分化と社會化

個人的衝動に基づく分化作用は社會が其の個人の數に等しく分散するまで續行することが出来る。何んとなれば、各個人は銘々自分の利益を社會機構の内容として考へて居るからである。それ故に分化は人間を面倒な社會拘束から解放し、

個人意志の變化の間に社會的必要線に沿うて變動する。併しこれに反して、集團構成の衝動に基づく社會化は人間を拘束し、そして社會利益の爲めの任意的服従と、外部的利益の下に生ずる強制的屈服との間に、社會的必要線に沿うて震動する。そして社會化の最後の限界は、全人類そのものである。何んとなれば、若し全世界を通じて宏大な統一的利益が痛烈に要求されるやうになれば、人類全體が同一社會機構の下に統合されることもあり得るだらうからである。分化に對しても社會化に對しても、「社會的要求」(ウォードの「欲望」と略ぼ同意味)は人間の内在的素質中に包まれ且含蓄されて居るか、又は生活状態に因つて規定されそして社會情勢に因つて決定された所の關心である。

7. 社會統制の必要

人口増加の結果として人間が其の利用し得べき地上に擴充すればする程、個人的選擇上に於ける變化が益々多く社會過程の上に現はれるだらう。そこで社會的要求をその適當な支配下にもも來す爲めの社會化的拘束抑制が必要である。あらゆる征服は統制關係を決定する。此の相互關係の社會的典型は國家である。

8. 國家統制の種類

國家統制の種類は、社會過程の進化的段階に依存する。單純社會機構から複雜社會機構への變遷、總ての外來的社會機

構の破壊からそれ等のものゝ種々の混合形式への進展等は、征服者支配の國家に於ける特徴である。又征服に依つて確保された共同社會的性質の基礎に打ち立てられた平和的關心の勝利は、文化國家を展開する。斯様な國家は、被征服者の上に加へる統制の必要を創造的文化的自由と調和させやうと努力する。

9. 社會關係の擴大

一般社會擾亂に於て、鬭争と戦争とは社會機構を統合する。故にそれは政治力の源泉である。これに反し、文化と通商とは、政治的結合を弱化する。故にそれは社會分化及び政治的分裂の源泉である。併し同時にそれは、社會關係の擴大を惹き起す。恰かも變異が生物を比較的複雜に且完全に導くと同様に、社會分化過程は、社會機構の一層複雜にして更に發達した混合體を作り出す。社會機構は元來その環境内で孤立的状態を保つてゐたが、多數社會機構の接觸が後に益々頻繁になり、遂に人間は社會關係網に包圍されて、往々人類全體が一大社會機構であるかの如き外觀を呈するやうになつた。人口蕃殖・生活支持・搾取が此の社會發達の原因であり、戦争・文化・通商は其の手段であり、關心の調和的満足は其の目的である。

10. 文化國家の發達

一方社會關係網が密度を加へるにつれて、他方社會状態の

激烈な擾亂は減少する。何んとなれば、相互的依存關係に立つ社會機構網の複雑な構造に於ては、あらゆる擾亂は多數の方面に於て有害と感じられ、そして間もなく總ての方面に於てさう感じられるやうになるからである。社會の密度の増加の結果として、文化國家が擡頭し、そして強烈な抑制と相並んで、資本の手段を通じての産業的搾取が優勢になる。此の政治的統制と産業的統制との混合體の次に、どんな種類の統制制度が現はれるかは、今なほ社會過程に依つて示現されてゐない。

11. 社會の平等化

文化國家が征服國家に取つて代る割合に應じて、關心満足に關して人間間に存在する差別が平等化する。人間の間にある政治的・社會的・及び産業的不平等が、原始社會狀態の下に行はれたやうな、享有の均霑狀態に再び變形する。人間の一般的社會化は、勿論社會機構を複雑化する。併しそれは、社會組織の増進的完成に因つて、關心の調和を作り出す傾向をもつ。

12. 智徳優秀な人格者の指導統制

併しそれは、現に存在する生活狀態の種々相を以つてしては、到底まだ社會衝突を惹き起すべき總ての機會を除去することは出来ない。社會秩序は常に、生活支持と健全な子孫蕃殖とを確保する目的に有利なやうに生存競争を組織することである。

それ故に、職業に適應する爲めの個性は多様ではあるけれども、知識上並びに道德上比較的最も完全な個人の指導の下に、人間の文化的・政治的・及び社會的平等を作り出し得るやうな状態を、社會進歩の最後の考案に於て推定するのは正當である。道德的並びに知識的權威者に依つて統制される制度の下に於て、先天的及び後天的關心の退化を伴ふことなき社會發達が可能になるかも知れない。併し實際はまだ豫測することの出来ない永い期間に亘つて、今後平等は、不平等と生活狀態の變動とに制限されてゐなければならないのである。(「社會學的認識」二十二節)

第三款 關心社會力

ラッツェンホーファーは、社會過程の根柢を個人に内在する先天的力であると見、これを社會の原動力だとする。

先づ宇宙を通じて顯現する一種の綜合的創造力なる「原力」“Urkraft”を假設する。それは單なる力學的力ではなく、一種の生命的・精神的性質をもつものであつて、これを關心“Interessen”と名づける。その最初の無意識的な分化されない形式に於ては、適應の増加と種屬の分化とを惹き起す所の進化過程の有機的衝動を構成する。更に發達した半意識的又は意識的形式に於ては、自然環境に對する有機的機構の反作用に因り、自己表現と自己實現——即ち個人的分化と社會的分化——とを惹き起す。

あらゆる社會機構や機能的關係の背後にさへも、集團を構成する所の個人の關心がある。そしてこれ等の關心が分析される時には、それは總ての機構や機能を説明し得る。社會生活は關心の巨大なる集成體又は結束體である。そして社會は個人の關心の絶えざる衝突・適應・及び相互作用である。初め無意識的である關心は、個人の人格發達の過程に於て、自然環境と社會環境とに反應しつつ、漸次明確に意識的になる。

社會進化の過程を説明する所の固有の内在的關心を次の五種類に分ける。

1. 種族關心

これは性の生理的衝動に根柢をもつもの、即ち性關心である。それは種族の繼續を保證し、家族・民族・人種等に表現される所の社會機構の基礎である。

2. 生理的關心

生存の爲めに營養を採求する活動に關するものであり、そして更に自己保存の爲めのあらゆる關聯した形式に擴大される。元來これは、經濟的秩序の基礎である。

3. 個人關心

生理的關心は、其の性質上本質的に自己中心的である。先天的本能が、個人を其の満足へと強制する。それは總ての他の考慮を無視して満足を求めやうとする、強力な要求である。これが個性化過程を説明するものである。

4. 社會關心

種族關心は、元來生理的・個人的のものであつたが、それが設定する血縁關係の爲めに、そして又家族・種族・民族等の環境に對する集合的反作用の爲めに、容易に社會的關心となる。そして利己的關心は集團的福利に從屬的になり、その結果社會化過程が發生する。

5. 先驗關心

人間がその肉體的要求を充足しやうとする努力の結果、及び個人關心と集合關心間の闘争の結果として、究極又は絶對者に對する關心が發生する。それは靈界即ち原力に對する信賴の形式をとり、そしてそれは宗教の形式に於て表現される。

ラッツェンホーファーの關心は、大體に於てウォードの欲望と呼んだものと同様であり、それは個人的並びに集團的行動の眞の原動力であると考へられる。實現されない欲求は、不調整の感情、即ち不愉快且不安の感情を惹き起す。因て人間は、此の感情を消散せしめて満足を求める爲めに、活動を起すやうに刺戟される。主觀的に觀れば關心は動因であり、その満足は人間努力の對象である所の快感を惹き起す。客觀的に觀れば、その満足的手段は自然環境並びに社會環境中にある。

特殊の人間關心は、原力の一分化として種々の強度に於て各個人に内在し、あらゆる個人的並びに集合的努力を刺戟す

る。そしてこれ等關心の基礎に起る人間の集團化が、即ち社會過程である。換言すれば、社會過程は關心を中心としての絶えざる集團構成であり、そして集團行動の手段に依る相互的影響の繼續的作用である。

個人の關心が一致又は相反する程度に従つて分化された此の過程に二つの方面がある。即ち關心の接合と衝突とである。前者は或る人間の目的の爲めに、何等かの意味で他人の關心の助長が相互に彼れ等自身の關心の助成に必要である時に起り、後者はこれに反し、他人の關心に反對することが相互に彼れ等自身の關心を助長する爲めに必要である場合に發生する。かゝる利益の衝突と接合が社會過程の本質であるかどうかはこゝに斷言しないが、形式上社會過程は、一部分彼れ等の同胞の關心と衝突し、一部分はそれと合致する所の關心に因つて動かされる人間の間の絶えざる反作用であると云ふことが出来るだらう。文明の歴史は、絶えず變動し多様化しつゝある所の關心を中心としての、人間集團化・再集團化の繼續的過程である。

以上がラッツェンホーファーの關心社會力説の要點である。

第四款 結 論

ラッツェンホーファーの社會學は、大體の構想に於てはグンプロヴィッチに近似する。即ち社會學を社會過程の學に限り、此の過程を民族闘争觀に依て解釋した。併し彼れはグンロヴ

ィッチの集團優位主義に反對の立場を取り、個人優位主義の見地から社會過程を分析した。又グンプロヴィッチは人類の起原を多元に歸したのに反し、ラッツェンホーファーは一元的起原觀を取つた。従つて社會過程展開の形式に關しても、兩者の間に可なりの相違がある。それは前者に取つては、個人は全々問題外である所の集團間の相互作用であるが、後者に取つては主として集團内の相互作用であり、個人を中心として考察されるものである。そしてしかも、社會過程の本質を個人の有する先天的內在的關心なるものであるとし、其の相互作用の形式が社會過程として顯現すると論じ、獨特の社會學體系を樹立した。

此のラッツェンホーファーの關心社會力説は、米國の社會學者アルピオン・スモールに依つて完成され、其の後多數のこれに追従する、又はこれを利用する學者を生ずるに至つて、それは社會學上重要な一概念となつた。

最後に社會の進歩觀に就ても、グンプロヴィッチとラッツェンホーファーとの間には、根本的の相違がある。グンプロヴィッチは極端な悲觀論者であり、如何なる種類の進歩をも、社會生活關係に於て認めなかつたのである。併しラッツェンホーファーは、征服國家から文化國家へ、不平等社會から平等社會へとの、人爲的向上發展の過程を分析説明し、最後の考察としては、知識と道德との支配する偉人統制國家の具體

的提案をさへ示したのである。此の點に關しては、彼れはスペンサーやグンプロヴィッチよりは、寧ろ遙かにコントとウォードに近いと云ふ事が出来る。

第八節 マルクス社會學

1. Heinrich Karl Marx (1818—1883)
 - A. Das Kommunistische Manifest, 1848.
 - B. Zur Kritik der Politischen Ökonomie, 1859.
 - C. Das Kapital, Bd. I, 1867; Bd. II, 1885; Bd. III, 1894.
 - D. Theorien über den Mehrwert, Bd. I, 1904; Bd. II, 1905; Bd. III, 1910.
2. Friedrich Engels (1820—1895)
 - A. Das Kommunistische Manifest (マルクスと共著)
 - B. The Origin of the Family, Private Property, and the State, 1884.
3. Heinrich Wilhelm Cunow (1862—)
 - Geschichte-Gesellschaft-und Staatstheorie, 1920—21.
4. Max Adler (1873—)
 - Die Staatsauffassung des Marxismus, 1922.
5. Nikolai Bucharin (1888—)
 - Theorie des historischen Materialismus, 1922.

第一款 マルクス略傳

ハインリッヒ・カール・マルクスは一八一八年五月五日獨逸のプロシヤ領ライン地方に生れた。其の父は自由思想をもつた富裕な猶太人系の辯護士ハインリッヒ・マルクスである。猶太人ではあつたけれども頗る宗教に無關心の人で、マルクスが六歳の時に新教派の基督教徒に改宗してしまつた。其の

目的は主に宗教的壓迫の災難を免れ、且社交場裡に出入する資格を得たいためであつた。此の家庭の雰囲気中に育つたマルクスは、やはり幼時から宗教的には冷淡であつた。彼れの父は非常に讀書趣味をもつた人であり、早くから彼れに英國の革命思想家ジョン・ロックの著書類や、佛蘭西の唯物的自由思想家ディドロやヴォルテール等の書に親しむことを勧めた。彼れは十六歳で中學を卒業し、一八三五年にボン大學に入學し、後ベルリン大學に轉學して法律と哲學とを學んだ。名義上の第一専攻學科は法律であつたが、實は哲學と歴史の研究に専念してゐたと自分で云つてゐる。一八四一年にエピクルスとデモクリトスの哲學に關する論文でイエナ大學からドクトルの學位を得た。學生時代の彼れは、當時優勢な哲學であつたヘーゲル派の理想主義者であつたが、其の後フォイヤーバッハ其の他の所謂左翼ヘーゲル派の人々と交るに及んで著しく唯物的になつた。併し彼れは哲學に最も深く興味を感じて、學位受領後ボン大學の哲學の講師を志願したが、其の宗教觀と猶太人であることが禍をなして採用されなかつた。そして一八四⁵年十月彼れが二十七⁴歳の時、ライン地方の急進的中産階級が政府の御用新聞に對抗して自己の利益擁護の爲めに發刊した、「ライン新聞」(Die Rheinische Zeitung)に聘せられ、左翼派同人中嶄然頭角を現はして主筆となつた。併し彼れの筆は遂に政府に睨まれて壓迫を加へられ、一

八四三年の初めに退社を餘儀なくされた。そして間もなく新聞も閉鎖されてしまった。

斯く彼れは人生行旅の門出に於て、第一志望であつた大學教授も斷念しなければならず、漸く成功しかけた記者生活も放棄の止むなきに至り、追々思想上に變化を來たした。これから彼れは從來全然素人であつた經濟學を研究し始め、その方面から社會制度の不合理を觀察しやうと志した。そして一八四三年の夏、新婚後間もなく新夫人と共に自由の天地を國外巴里に求めた。此處で詩人ハイネや、露西亞の亡命無政府主義者バクレーン、佛蘭西の無政府主義者ブルドン、空想社會主義者カペー等と交つた。一方に於ては經濟學と佛蘭西革命とを熱心に研究し、他方種々の無政府主義者や社會主義者と交はつた爲め、此の頃からマルクスは明瞭に社會主義的色彩を表はして來た。彼れが「パリー・フォアウェルツ」に載せた猛烈なプロシヤ政府攻撃文の爲めに、佛國政府はプロシヤ政府から嚴重な抗議を受け、彼れを國外に追放してしまつた。一八四五年三月、彼れは夫人と漸く二歳になつたばかりの長女とを携へて、白耳義の首府ブリュッセルに行つた。そして此の地で講演や著述に従事し、且種々の勞働運動に参加した。此の間に彼れはエンゲルスと共に英國に旅行して其の古典經濟學に接し、その熱心な研究者となつた。ブリュッセル滞在の間に、彼れはエンゲルスと共に、パリに本據を持つ「共

産主義者同盟」に加入し、一八四七年の第二回大會に於てはエンゲルスと協力して其の宣言書を起草することを引き受け、翌一八四八年一月に、有名な「共産黨宣言」を獨逸語で脱稿し、二月にそれをロンドンで印刷發表した。此の宣言書の發表後間もなく、同年二月二十四日にパリに二月革命が突發し、三月三日には獨逸のプロシヤ領ライン州のケルンにも勞働者の暴動が起り、諸所に革命運動が蔓延した。こゝに至つて白耳義政府は、プロシヤ政府からの要求もあり、又自國も擾亂感染の危険を感じたので、多數の他の革命主義者と共に彼れを國外に追放した。そこで彼れは三月四日再びパリに戻つた。此の時は當時の佛國臨時革命政府が彼れを觀迎したのであつた。併し母國獨逸にも革命的暴動が諸所に爆發するのを見て、彼れはエンゲルスと共にライン州に潜行し、一八四八年六月一日に州の首府ケルン市に於て「新ライン新聞」(Die Neue Rheinische Zeitung)を發行して、政府やフルジョア階級攻撃に盛んに氣勢をあげた。併し翌一八四九年五月十九日に同紙は發禁に會ひ、次いで廢刊となつて彼れは再び國外に放逐された。

彼れは三たびパリに舞ひ戻つたが、今度は直ちに佛國政府から追ひ立てられた。彼れは遂に身の置き所がなくなつてしまつた。そこで最後の亡命の地として英京ロンドンを選んだ。ロンドンこそは、當時歐洲諸國中でも最も廣く言論思想の

自由が認められた都市であつたからである。彼れの家族も、彼れの後を追つてロンドンに來た。此の時彼れはまだ三十四歳であつた。そしてこれが彼れの永住の地、又最期を遂げるの地だと豫想してはゐなかつたらうが、それ以後三十四年間即ち丁度彼れの全後半生は此の土地で送られたのであつた。ロンドンに於けるマルクスの生活は、一時極度の貧困に苦しめられた。彼れは英語が得意でなかつたので、講演や著述寄稿も當分見込少なく、エンゲルスが英文の訂正や代筆までして、僅かに米國の一二の新聞雑誌や叢書類に寄せた原稿料で一部分の生活費を作り、大半は友達の同情援助に依つて辛うじて一家の糊口をつなく事が出來た。特にエンゲルスは、物質的に最も多くマルクス一家の爲めに盡した。幸にエンゲルスは、マンチェスターにある父の紡績工場に働き、一八六〇年に父の死の後其の經營者となつたので都合が良かった。尤も彼れは商賣は甚だ好かなかつたのだが、同志を援助する爲めと、自分の戦費を蓄へる爲めに、不本意ながらやつたのであつて、一八六九年からは全然商賣と絶縁して、社會主義の爲めの研究著述と實際運動とに全力を注いだのである。

右に述べたやうに、マルクスは生活苦の爲めに餘暇が少なく、志望の經濟學研究が思ふやうに進まなかつたが、一八五九年に漸く「政治經濟學批判」を著はした。それは彼れの大作「資本論」の前身である。そして一八六四年五月に同志の友

ヴィルヘルム・ヴォルフから受けた遺贈財産と、エンゲルスの援助とに依つて其の後着々として著述が進行し始めた。一八六七年七月二十五日に至つて、彼れが起稿後十五年間心血を灌いだ「資本論」の第一卷が公刊された。其の後彼れは、更に第二卷及び第三卷をも續々完成しやうと努力し、又同時に母國其他各國の勞働運動に注意を拂ひつゝ、最後まで奮闘したのであつたが、永年の生活苦と過勞の爲め、元來頑健であつた彼れの健康も此の頃著しく衰へた。殊に多年苦難を共にした妻子に先立たれて、強い精神的打撃を受け、妻の死後二年目長女の死後二ヶ月目の一八八三年三月十四日彼れも亦遂に斃れた。斯くして主義理想の爲め終始一貫して惡戰苦闘を續けた偉人の活動も、六十五年にして此の世に終りを告げた。

「資本論」第二卷は、エンゲルスが彼れの遺稿を整理編纂して、一八八五年五月五日に公にし、第三卷も同じくエンゲルスの努力に依つて一八九四年十月四日に發刊された。そしてなほ、エンゲルスの計畫では「資本論」第四卷とする豫定であつた「剩餘價值理論」は、エンゲルスが其の業を了へずして死んだ爲め、其の後マルクスの高弟カール・カウツキー(Karl Kautsky)に依つて完結され、一九〇四年に其の第一卷、一九〇五年に第二卷、一九一〇年に第三卷が發刊された。斯くして、マルクスがみづから完了し得なかつた大作も、

同志の友の協力に因つて永く世に傳はる事が出来るやうになつた。

第二款 マルクス社會學

マルクスの研究は、主として哲學的又は經濟學的であり、其の活動は階級運動であつた。併しこれ等研究の方法は、歴史の展開を嚴正な自然科學的立場から如實に分析説明して、一方社會發達の普遍原則を發見すると同時に、他方これが解決の爲めの指導原理を樹立しやうとしたのであつた。故に前者は理論社會學の一般精神と一致し、後者は所謂應用社會學の範疇に該當するやうに見える。殊に彼れの階級闘争社會過程觀は、グンプロヴィッチやラツツェンホーファー等の民族闘争社會過程觀と共に、闘争社會過程說の一大發見であり、それは唯物辯證法と合して社會科學上に多大の新刺戟を投じた。故に最近社會學の流行につれて、これを社會學として説明し唱導する新學派が現はれた。主として各國の社會主義者中にこれを見るのであつて、學者としてはベルリン大學の經濟學史及び人類學教授ハインリッヒ・クノウ、ウィーン大學教授の新カント派哲學者マックス・アドラー、露西亞のマルクス研究家で勞農政府中央執行委員であるニコライ・ブハーリンなどは其の主なる者である。

さて此のマルクス社會學なるものを、社會學としてここに紹介し、又は批判することが、果して妥當であるかどうか

は多少疑問がないでもない。マルクス自身は決して彼れの研究のどれでもを、社會學だと云つたことはなく、又恐らくそんな考さへ持つてゐなかつたらう。にも拘はらず、後世の人々が勝手にそれを社會學に引き込んだり、又は批判排斥したりするのは、實は頗る僭越の沙汰である。例令それが社會學として成立するかしないかに拘はらず、マルクスの目的と使命とは他にあるのだから、社會學批判は決してマルキシズム全體の眞理的又は價值的批判となる譯ではない。そしてマルキシズムの全體的批判は到底こゝで爲し得るものでもなし、又それは理論社會學として爲すべきものではなく、別の特殊研究に譲らなければならない。

併し又翻つて考へれば、今や相當の學者達が、マルキシズムを社會學として説明唱導し、これに對して多數の賛成者や研究者が益々増加しつゝある現状の下に於ては、一般社會學徒と雖も全然これを無視するのは、眞に學に忠實な理由にはならない。否寧ろみづから進んで學の研究の一部分をこれに割く必要がある。殊に今日吾が國に於ては、多數の人々がマルキシズムに對し、賛否のいづれであるやを問はず、兎に角何等かの關心をもちつゝある實狀に顧みて、特に此の必要が痛感される。だから本講義に於ても一節を此の學派の説明に充て、殊にそれが現在吾が國に於て最も問題の多い一理論であるが故を以て、多少詳しく批判して見たいと思ふ。

マルキシズムが社會學として考へられるのは、其の全體一殊に大部分は經濟學的問題である——としてではなく、歴史の展開に関する根本法則の理論に就てである。そしてそれは、所謂史的唯物論と、更にこれと一體不可分のな双生兒である階級闘争説とであるから、本節に於ては研究範圍をたゞこれ等の二點にだけ限つて、以下其の社會學的意義の説明を試みよう。

第三款 史的唯物論

マルクスの經濟史觀、即ち史的唯物論がなんであるかは、彼れの著「政治經濟學批判」の序文中に最も良く説明されてゐるから、これに依つて其の意味を吟味しよう。彼れは次の如く云つた。

「私が學び得た、そして其の後絶えず私の研究の指針となつた所の一般的結論は、これを次の如く簡単に約言することが出来る。

人間は、彼れ等が營なむ社會的生産に於ては、彼れ等の意志とは無關係に、而かも不可避免的に起る一定の關係を認容する。これ等の生産關係は、彼れ等の有する物質的生産力の發達の一定の段階に一致する。これ等生産關係の合計が、社會の經濟機構を構成する。此の經濟機構は則ち、其の上に法律的並びに政治的上部構造が發生し、そして一定形式の社會意識がそれに一致する所の眞の基礎である。物質生活上の生産

様式は、社會的・政治的・精神的生活過程の一般性質を決定する。人間の生活を決定するものは人間の意識ではなく、逆に彼れ等の生活が其の意識を決定するのである。彼れ等の發展の或る段階に於ては、社會の物質的生産力が、現存生産關係と、又は生産關係の單なる法律的表現體、即ち生産關係が曾ては其の中にあつて作用した所の所有關係と衝突するやうになる。生産力の發展形態から轉じて、これ等の所有關係は生産力の拘束物となる。こゝに於て社會革命の時代が到來する。經濟的基礎の變化につれて、廣大な全面的上部構造が徐々に又は急激に變形される。斯様な變形を考察するに當つて、吾人は自然科學的正確さを以て決定し得る所の經濟的生産狀態の物質的變形と、法律的・政治的・宗教的・美的・哲學的——約言すれば、それに依つて人間が此の衝突を意識するやうになりそしてそれを解決する所の觀念形態との區別を常に明かにしなければならない。或る個人に關する吾人の意見が其の個人が自分に關してみづから有する意見に基づいてなされるのではないのと同様に、吾人は斯の如き時代の變形を其の時代自體の意識に依つて判斷する事は出来ない。反對に斯様な意識が、寧ろ物質的生活の矛盾に因つて、即ち社會的生産力と生産關係との間に存在する衝突に依つて説明されなければならない。」（「政治經濟學批判」序文四—五頁）

即ちマルクスは、人間の活動・歴史の展開を自然科學的嚴

正さを以て因果律的に實證説明しやうとし、そして彼れの觀る所に依れば、科學的與件の分析の歸納的結論は、人間は物的環境に支配されて一切の行動を爲すものであり、殊に經濟生活の形式が總て其の他の生活關係をも必然的絶對的に決定するものであると斷定した。これは唯物哲學から出發した經濟史觀なるものであつて、經濟史觀それ自體には重要な科學的意味がある。たゞそれが眞に科學として成立するかどうかは、要するにそれが絶對性を根柢とするか又は相對的見地を取るかの點に歸着する。總ての社會學者は一種の環境論者であり、それには概して所謂精神的と稱せられる環境と物質的と名付けられる環境との何れをも含めて考へる。それが二元であるか一元であるかの形而上學的問題には一切關係せず、たゞ現象の世界に於ては所謂物心兩面の合成的環境を事實として認容し、そしてそれ等が如何に人間に影響し又影響されて人間生活を構成するかを見る。そしてこれ等環境中に最も重要な一要素として、經濟的環境を認める——或は自己保存の意慾と云ひ、或は生理的關心・健康關心・食の關心等種々の名稱の下に根本社會力の一つとしてこれを認める。併し原生動物に於ては、自己保存と種屬保存の爲めの根本動力としての營養的動力と生殖的動力との二者だけを、生命現象中に認め得るに過ぎないけれども、それが分化發達するに連れて益々複雑微妙になり、種々の派生的發達體としての他の動力をも

認め得るやうになる。そして最高等動物たる人類に至つては、これ等派生的發達體と、根原をなした二大生命力との上下的區別限界さへも確立し難いやうになる。のみならず精神作用と名づけられる一種特別の現象が現はれ、それは單細胞動物の單純な機械的伸縮作用と同率を以て解釋することは出来なくなつてしまつた。そしてこれは高等動物特有の獨立現象として、別の解釋を必要とするやうになつた。それが單に食慾の發達止揚されたものであるか、又は性慾の淨化されたものかなどと云ふことは、今日の科學の力では決してまだ解釋は出来ない問題である。併し兎に角、以上述べたやうに、所謂食慾・性慾以外になほ種々の重要な人間の動力があり、又此の動力を支配統制する作用も行はれてゐることは、争ふ餘地なき事實であつて、現象の世界を取扱ふ科學としては、其の中の或るものだけを唯一の原因だとし、他は皆其の結果であるとして豫め絶對的に斷定して解釋することは許されない。それはつまり或は素朴的獨斷であるか、又は形而上學的或は宗教的獨斷の範圍に歸する。科學としてはそれ等總ての與件を、實證知識の許す範圍内で構成し得る假定又には假説を基礎として、相對的・綜合的に取り扱つて行くのである。與件の獨斷的上位下位の決定は、舊型歴史哲學の遺物であつて、決して今日の意味の科學の見地や方法ではないのである。

第四款 史的唯物論の科學的認識

前款に論じたやうな、社會現象研究上に於ける科學と獨斷との區別に従つて考察して、マルキシズムの史的唯物論は果して如何なる性質をもつであらうか。

史的唯物論は、先づ物質的生産力の或る段階に一致する生産關係が社會の經濟機構を構成し、それが總ての文化の基礎であつて、人間の精神作用は此の生産關係を動かす力はなく、反對に前者は全然後者の産物であるとする。即ち社會現象や社會過程の單一原因觀であり、一方的因果關係說である。然るに社會科學の本質は、既に前款に述べたやうに複數原因觀であり、又一方的因果律よりは相互作用說である。總て文化の發生進展の過程は、單純な一方的因果關係では説明出來ず、複雑な相互關係として見て、そこに始めて社會現象の特質が認められるのである。

然るに史的唯物論は、社會現象の因果の連鎖中、經濟的要素だけが唯一の原因であるか、又は少くとも最も重要な原因であると見る。唯一原因と見るのは、そこに何等の科學的斷定の根據がある譯ではなく、單なる觀念的獨斷である。最も重要な原因だと云ふ場合には、其の重要な意味の程度如何に依つて科學となり又はなり得ないのであるが、唯物論的立場からする經濟史觀に於ては、それが殆んど唯一絶對に近い程度のも、即ち因果の連鎖の總ての原因中九十九パーセント的重要性をもつものと云ふことに理解される。さもなければ

それは唯物史觀の特徴を失つて、普通一般の經濟學や社會學に賛同したことになる。然らば經濟的一原因の力が、他の諸原因の力の總和よりも常に遙かに優勢であると云ふことは、どんな方法に依つて決定されるか。そこには彼れ等に依つて科學的に精確な何等の量的決定の方法も示されて居らず、結局これも漠然たる主觀的獨斷であるに過ぎない。社會學は食の關心以外になほ種々の重要な決定的動因を認める。そしてそれ等が極めて複雑な關係に於て、或る場合には或る種の力が比較的他よりも強力であり、又或る場合には別の力がより支配的であることを認める。併しそれ等のどの一つでもが、總ての時總ての場合に於て絶對的に決定的であるとは考へない。苟くも人間である以上は、所謂性的・知識的・藝術的・道德的・宗教的等種々の關心をもち、單なる物慾又は食慾以外の複雑な推進力をもつてゐる。そしてどんな野蠻人であつても、饑餓の本能の發動作用に因つて生命を支へるだけの單純な動物ではないのである。

獨逸の社會學者マックス・ヴェーバーは、法制史及び經濟史の社會學的研究及び宗教社會學の權威であるが、彼れは宗教・魔術・傳統・理想等が、古代・中世・並びに近代の經濟組織の性質を如何に制約し支配したかを明かにし、近代資本主義の起原發達にもこれ等精神文化の影響が非常に重大であつた事を論證した。(Max Weber, 1864—1920: Gesammelt

Aufsätze zur Religions Soziologie, 1922—23, 3 Bde. 「宗教社會學論集」三卷。) 經濟的先行條件が主となつて、個人間・種族間・階級間の闘争關係を激成し、これに依つて社會的發達を促進したのは寧ろ野蠻未開の時代であり、文化の進歩と共に反省的意識中にある人間の精神要素が益々強大な社會力となり、經濟的社會力と相並んで社會過程を誘導支配する。曾て野蠻時代には寧ろ自然進化の過程に近接してゐた社會事象が文化の發達と共に益々目的々理想的人爲統制現象となり、所謂精神文化現象となつたことは、ウォードの社會學が最も強調した所である。社會現象中經濟現象は、決して他の現象よりも先に現はれたのでもなく、又他の總ての現象の單一な一方法原因ともならない。總ての社會現象は、人間の發見以來常に相互關係的・相互依存的であつた。又假りに社會現象が總て一元的に經濟的原因に因つて發生し變化すると云ふ獨斷を假設して見ても、それは決して問題を説明し盡さない。然らば其の「經濟的」なるもの自體はどんな原因から發生し又變化するかと云ふ、更に一層重大な形而上學的問題が未解決のまゝ残されてゐる。若し之れが最後の解釋だとするならば、それは經濟要素自體が第一原因であり、自己原因であつて、他に何等これの發生變化の爲めの別の原因を必要としないことになるだらう。即ちそれは形而上學的絶對であり、神學的の神であり造物主であつて、科學的觀念とは別の範疇に

屬する。

以上の弱點に關し、マルキシスト中にも史的唯物論の非科學性を認識して、社會過程に於ては動力は單に經濟的要素だけでなく、他の社會的要素も時としては、逆に經濟的要素に影響してこれを變化させることもある——と認める人達が現はれた。カウツキー、ラブリオラ、ブレハーノフなどはそれであり、又エンゲルス自身さへ其の晩年に於て此の弱點を告白した。併し斯く修正を加へれば、それは最早史的唯物論の特質は失はれて、一般社會科學の性質を獲得することになる。

第五款 階級闘争説

次にマルクス社會學に於て、史的唯物論の根柢から出發し、そしてそれと一體を成して社會進展の過程を説明する普遍原則と考へられる階級闘争説を考察しやう。

「資本論」第一卷の序文に於て、マルクスは左の如く云つた。

『本書に於ては私は、人間をたゞ經濟的利害關係の化身であり、且特殊の階級的利益と階級關係との表現であるとして取扱ふ。』

更に「共產黨の宣言」の序文中に、次の如く明確に呼びかけた。

『各時代の經濟的生産交換状態と、其の基礎の上に建てられた社會組織とは、其の時代の政治史並びに文化史の基礎で

あり、此の因果關係に依つてのみ歴史は説明することが出来る。だからあらゆる人類の歴史は——土地を共有してゐた原始人社會が消滅した時以來今日に至るまで——悉く搾取する階級と搾取される階級、又は支配階級と壓制される階級との間の階級闘争史であつた。そして此の階級闘争史は、種々の進化の過程を経て發達し、今や非常な時期に到達してゐる——搾取され壓迫された階級、即ちプロレタリア階級は、斷然結束して奮ひ起ち、一舉にして此の全社會をあらゆる搾取・壓迫・階級的差別・階級闘争等の惡弊から永遠に解放しなければ、到底此の強大な壓迫搾取を擅にする支配階級即ちブルジョア階級の拘束を脱することは出来なくなつて來た。……………社會共產主義者等は、其の見解目的が如何なる者であるかを明確に表示することを少しも躊躇しない。即ち彼れ等は、現存社會制度を暴力をもつて破壊する以外には、目的遂行の爲めの良法はないと公然揚言する。吾れ等は、激烈な共產主義革命行動に依つて、支配階級を戦慄せしめやう。此の暴動に依つてプロレタリアールが失ふものは、たゞ彼れ等の自由を拘束する鐵鎖以外には何物もない。併し彼れ等はこれに依つて、全世界を贏ち得るのである。萬國のプロレタリアールよ。固く相結束して立て。』

「總ての過去の歴史は、階級闘争の歴史であつた」と云ふことは、若しそれが、人類文化の發達が階級闘争的社會事實

の存在に因つて、大いに影響されたと云ふ意味に考へるならば、それは從來たゞ漠然と認識されたに過ぎなかつた社會過程の一角に強烈な照明を與へ、社會科學的見地に一大轉換を與へた重大な効果を認め得るのである。それはグンプロヴィッチとラッツェンホーファーの闘争社會過程觀と共に、近代社會科學上の一大發見である。併し此の闘争過程觀も、其の基礎を成す史的唯物論と同様に、それが科學たり得るか否やは、要するにそれが絶對觀であるか又は相對觀であるかに依つて決定される。若しそれが社會過程の唯一絶對の本質であり、他は皆派生的・從屬的の低位のものであるとするならば、それは最早科學の域を脱して、獨斷的歴史哲學となつたのである。即ち本質的に階級間に協力過程の存在を否定するか、又はこれを第二次的從屬的性質のものであると解するならば、それは吾人が實證し得る歴史的事實又は現在の社會事實の科學的與件と一致しない。協力事實は闘争事實よりも一層普遍的であり、そして社會進歩は闘争それ自體の結果ではなく、一面に闘争を伴ふ協働作用の成果である。故に社會と云ふ觀念は本質的には「協働的結合」と云ふことである。若し闘争が本質であり主であるならば、決して社會は成立せず、又存続もしない。即ち社會過程の真相は、「衝突闘争と調節とを包む協働である」と云ふことが出来る。これが社會學的觀念である。これが單純な弱肉強食的な劣等動物界に行はれる

自然淘汰過程と、高等人類の共存生活體たる社會に行はれる社會過程との根本相違である。社會に闘争が存在し、そしてそれが逆に協働を刺戟して進化を助長したと云ふことゝ、闘争それ自體が進化的であると云ふことゝは、全然別の範疇に屬すべき二つの獨立概念である。

次にマルキシズムが、階級闘争を経済的階級だけに限るのは、社會の集團闘争の真相の僅かに一部分的現象を以て全面的解釋としやうとする偏重主義であつて、これは階級闘争觀の根柢を成す唯物史觀の一方的因果關係觀から誘導された必然的歸結である。共に科學的觀念ではない。社會學は經濟階級以外に、人種的・民族的・宗教的・國家的等の別の集團的對立や、性的・年齢的・職業的其の他多數の精神又は物質環境の相違に因る團結的對立關係をも認める。そしてこれ等種々の對立は、時と所と事情とに因つて、經濟的對立よりも寧ろ優勢になることもある。例へば現代世界の趨勢は、一方に於て經濟的階級の強烈な對立關係が、益々増大される傾向のあるのは確かな事實であるが、同時に又他方に於ては、人種的民族的な集團對立も、それと等しき、時としてはそれ以上の、強烈さを以て人間を支配してゐる。

最後にマルクス社會學の云ふ階級の意味が——ブルジョア及びプロレタリアとは果して何を指すか——普通世人に豫想されてゐるやうに明確になつてはゐないと云ふことも、其

の缺點の一つである。

第六款 結 論

本節に於ては吾人は、マルキシズムの社會學性に關してだけ論じたのであつて、マルキシズム全體の價值批判を試みたのではない。従つてマルキシズム其のものゝ價值が、其の社會學性の如何に依つて根本的に左右されるものとは考へない。それは寧ろ、一種の歴史哲學的社會觀として、又階級イデオロギーとして、本來の目的を果すものであらう。

兎に角マルクス自身は、十九世紀が生んだ最大社會思想家の一人であり、其の理論は世界の社會思想や社會運動上に最も強烈な刺戟を與へた。其の經濟史觀は一方的因果觀の獨斷に陥つたにも拘はらず、人生活動の最大動因の一つに對し、未だ曾て何人も爲し得なかつた強烈な照明を與へてこれを舞臺に活躍せしめ、從來唯心的觀念論の弊に痲痺症に罹つてゐた世界の思想界に、徹底的センセーションを捲き起し、これに因つて世人が物心相關の理を一層明確に把握する原動力となつた。同時に其の階級闘争論は、これ亦從來甚だ閑却されがちであつた社會事實の最も重要な一面を暴露して、それが實際の人生行路に於て、昔も今も如何に重大な根本過程の一要素であるかを悟らしめ、單純な兒戲的協調論や、觀念論的相互扶助論の陣營を粉碎して、根本的修正の必要を暗示したものである。併しこれ等理論方面の効果よりも寧ろ遙かに一層重要

な貢献は、從來神聖の殿堂であつた傳統文化の短所缺陷を、完膚なきまでに爬羅剔抉して、靜的機械的倫理道德觀に對し更新進歩の一大動因となり、そして一般大衆に對しては、新しき階級イデオロギーと社會運動の戰術と武器とを提供して、人生航路に革新の大波瀾を捲き起したことである。其の波動は其の後益々擴大強化して、今や全世界を通じて、種々の他の動因と或は衝突し或は合流しつつ、文化の動きに見落すことの出来ない一要素を成してゐる。

第九節 ジンメル及び其の他の形式社會學

第一款 ゲオルヒ・ジンメル

Georg Simmel (1858—1918)

1. Über soziale Differenzierung; Soziologische und Psychologische Untersuchung—Schmoller's Staats-und Sozialwissenschaftliche Forschungen, X. s. 1—147, 1890.
2. Die Probleme der Geschichtsphilosophie; Eine Erkenntnistheoretische Studie, 1892.
3. Soziologie, Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, 1908.
4. Grundfragen der Soziologie, 1917.

形式社會學(Die formale Soziologie 又は Die formale Gesel-

lschaftslehre) は、主として獨逸系の社會學である。ファーディナンド・テンニースとゲオルヒ・ジンメルが其の創立者だと考へられてゐる。殊に形式社會學に最も多く貢献した者はジンメルであり、今日の形式社會學者は、皆何等かの意味に於てジンメルを祖述するものであるから、先づ彼れの主張を中心として此の學派の特徴を略述しやう。

ジンメルはユダヤ人系の獨逸人であり、ベルリン大學で哲學を研究した。彼れは元來發生論的且觀念論的傾向を具へた哲學者であつたが、又早くから社會學に興味をもつて種々の優秀な研究發表を爲し、所謂形式社會學なる一派を樹立して、社會學者として名を成した。併し生來の哲學的傾向は、晩年再び彼れを驅つて文化哲學方面に走らしめ、社會學は餘り顧みなくなつたのである。彼れは一八八五年に二十七歳の時母校ベルリン大學の哲學講師となり、引き續いて三十年間同大學で哲學・倫理學・宗教哲學・美學・社會心理學・社會學等を講義した。併し彼れは物質的には恵まれなかつたので、生活の爲め止むを得ず、一九一四年に母校を辭してストラスブルヒ大學に轉任した。併し不幸にも丁度其の年に世界大戰が突發し、大學はさびれて殆んど休校状態と爲り、爲めに彼れの生活は愈々困難を極め、失望と不滿の中に六十歳を一期として、頗る氣の毒な終りを告げた。

第二款 綜合社會學の批判

ジンメルは社會學に興味をもつて、それを研究すればする程、從來のコントやスペンサー系統の社會學の體系に矛盾を發見した。創立時代の新學問の通弊として、自己の領域を出來るだけ擴大し、又其の學的重要性を誇張的に考へる傾きがある。社會學は其の研究對象が社會生活其のものである爲め、哲學や其の他の既存社會科學との關係に於て、殊に此の方法論的困難に遭遇した。コントとスペンサーは、社會現象を包括的に解釋しやうとし、其の結果他の社會諸科學を統一綜合したやうな廣大な、且實證的效果の最も勝れた、社會現象を全體的に取扱ふ綜合科學としての社會學を樹立しやうと試みた。次いで現はれたウォード、タルド、ギティンクス、スモール其の他の人々は、コントやスペンサー程の綜合主義者ではないけれども、社會學を以て何等かの意味での、社會諸科學に共通する根本法則の研究を爲す一般的社會科學としてこれを取扱つた。即ち純粹社會學又は一般社會學等の名稱の下に立論された。それは例へば、動物・植物一切の生物を包含して考へた、生物其のものゝ一般特性を研究する科學としての生物學があるやうに、政治的・經濟的・歴史的其の他の社會諸現象を通じての根本對象となる社會生活其のものゝ性質法則を研究する一般社會科學と考へる。

さてジンメルは以上のやうな主張に對して深い疑ひを起した。斯の如く一般社會現象に關する綜合的知識を求めたり、

社會生活に對する包括的解釋をしたり、又は社會諸科學共通の基本原則の發見を目的とするのは、いづれも既存の他の科學の領域を侵害するものであり、又それは事實上實行不可能なことでもあり、それでは到底獨立の一科學たる資格はない。これは從來の歴史哲學の特徴であり、又百科辭典の特徴である。一獨立科學たるには、既存の個別的特殊社會諸科學と同様に他の科學に少しも含まれてゐない、社會學だけに獨特な見地と對象とを求め、この領域に限つて研究しなければならない。從來の社會學は「百科辭典的綜合社會學」であつて、獨立存在權をもたないものである——とかう考へたのである。

第三款 形式社會學の主張

さて然らば、ジンメル自身はどんな見地と對象とを以て、社會學の領域を限定したか。彼れの主張は次の如きものである。

(一) 社會學は一特殊社會科學である。

社會學は、綜合的社會科學でもなく、又一般社會科學でもない。それは他の總ての個別的又は特殊的社會諸科學と同様に、特別の見地と特別の對象とをもつ、一特殊社會科學である。

(二) 社會學は心的相互作用の形式を研究する科學である。

社會の本質は、心的相互作用である。そして其の内容の種

々相を研究対象とするものは、他の社會諸科學である。社會現象の内容が經濟である部分を取扱ふものは經濟學であり、政治的内容をもつ社會現象を対象とすれば政治學となり、其の他宗教・道德・藝術・言語・心理等に關する社會現象も、皆それぞれこれ等対象とする現象の内容の種類性質の相違に因つて、別個の社會科學が成立する。そして内容の點から見れば、既に皆他の社會諸科學に占領されてしまつて、社會學が特に取扱ふべき何等の対象も最早残されてゐない。(併し社會がこれあるが爲めに社會として成立する根本作用である所の心的相互作用の純形式だけは、まだどの科學もこれに觸れてゐない。) 心的相互作用も、其の心理的内容は既に心理學の領域であるから、例へば關心とか欲望とか本能や感情などは社會學の問題とはなり得ないが、其の形式だけは心理學にも其の他どの科學にも屬さない。故に社會學が科學として成立し得る唯一の領域又は見地は、心的相互作用の形式、即ち社會化又は結社の形式である。

(三) 社會學と他の社會諸科學との關係は、幾何學と自然科學の關係に等し。

形式と内容とは全然別個の現象、又は現象に對する別個の見地である。幾何學は、物理的對象の内容の如何に拘はらず、其の空間的形式を研究する。同一の幾何學的形式——例へば球は、別異の内容を以て滿され得るし、又別種の幾何學

的形式も亦同一な物理的内容を以て滿たすことが出来る。社會學は他の社會諸科學に對し、これと同様の關係に立つ。同一形式の社會關係も別異の社會的内容をもち得るし、又反對に同一の社會的内容も別種の社會關係形式をもつことが出来るのである。

換言すれば、心的相互作用の範圍に於ては、(其の形式と内容とは全然別物であり、) 明確に分離し得、従つて別異の研究対象となる。

(四) 社會學は社會化形式の分析科學である。

社會化作用の種々の形式の發見と、これが分析的研究とが即ち社會學の目的である。そして此の形式としては、支配と服從・競争・模倣・分業・黨派構成・代表・交換・對内的團結と對外的封鎖の同時性・社會的分化・社會的複合其の他を擧げてこれを説明して居る。併しジンメルの社會學は、一體系としては纏らずに終つた。

第四款 ジンメル以外の形式社會學說

形式社會學の最も代表的なものはジンメルであるが、他にもなほ數多の重要な貢獻をなした學者がある。其の中主なるもの三人だけを次に述べる。

第一項 ファーディナンド・テンニース

Ferdinand Tönnies (1855—)

1. Gemeinschaft und Gesellschaft, 1887.

2. Soziologische Studien und Kritiken, I.

Sammlung, 1925; II. Sammlung, 1926.

フアーディナンド・テンニースはキール大學の教授であり、既に早く一八八七年に「共同社會と利益社會」なる名著を成し、其の中に後にジンメルに依つて發達せしめられた形式社會學の源を爲した純正社會學の概念を構想したばかりでなく、社會關係の根本形式に関する事實的分析の範を示した。即ち共同社會と利益社會との分類説明である。

彼れは先づ一般社會學の存在は認める。そして其の中の一部門としての特殊社會學を構想した。一般社會學中には、社會生活を生物學的見地から説明する社會生物學と、それを心理學的見地から見る社會心理學とがある。併し最も重要な部門は、特に社會的な見地から見るものであり、そしてそれは前二者から發達形成されるのである。これを特殊社會學と云ふ。

特殊社會學は、主として人間の心的相互作用の社會事實に關して研究する。併し心的相互作用には、他人の意志を支持する傾向をもつ肯定的方面と、それを破壊又は阻害する傾向をもつ否定的方面とあり、前者だけが結合作用を爲すのであるから、それだけを研究對象とする。此の特殊社會學は更に純正社會學・應用社會學・經驗社會學の三部門に分れる。純正社會學は社會の構成的方面を論ずるものであつて、(1) 基

礎的概念としての共同社會及び利益社會、(2) 結合即ち社會的實在、(3) 社會的規範(秩序的・法律的・道德的)、(4) 社會的價值(經濟的・社會的・精神的)、(5) 社會的關係構成物(經濟的・政治的・精神的)等の諸問題を取扱ふ。次に應用社會學は、純正社會學の理論を社會の種々の方面に演釋的に適用するものである。最後の經驗社會學は、社會現象を全體に互つて、社會生物學や社會心理學等の問題まで全面的に觀察してそれ等を統一し比較する。故にこれは綜合社會學である。以上三者中純正社會學だけが、後の形式社會學に相當するものであり、テンニース自身は専ら此の方面を論じたのであつた。たゞ彼れは、ジンメル其他、後の形式社會學者のやうに、極端な偏狹的排他的見地を固執しないで、包括的な大規模の社會學體系を構想してゐたのである。

次に彼れの貢獻した最も貴重な社會學概念としての、共同社會と利益社會に就いて説明する。

彼れの社會學は、獨特な意志論を出發點として立論される。先づ人間の意志を「本質的意志」(Wesenwille)と「選擇意志」(Kürwille)とに分ける。本質意志は其の中に思惟が含まれてゐる自然的有機的な意志であり、それは本能や感情に根柢を有し、信仰や信賴の形になつて現はれる。選擇意志は思惟中に意志が含まれてゐる場合、即ち思惟に支配された意

志であつて、目的々に取捨選擇する能動的意志である。感情的共同的な本質的意志が基礎となつて構成される有機的生活の結合を「共同社會」(Gemeinschaft)と云ひ、思惟的目的々な選擇的意志が基礎となつて構成される多數人の結合を「利益社會」(Gesellschaft)と名附ける。共同社會は、血縁關係(Verwandtschaft)、地縁關係(Nachbarschaft)、友愛關係(Freundschaft)等の自然的紐帶に依つて結合される。そこには全體的有機的な共同意志が上位に立つて支配して自然的統一を保ち、個人的選擇的意志は下位に抑壓されて目立たない。そこには財産は共有的であり、法律は家族的である。利益社會にあつては、各成員は銘々自己の選擇意志の發動に基づいて心的相互作用に入り、そして其の目的を達成する。故にそれは自然的有機的組織ではなく、人爲的機械的組織である。發生的には共同社會が利益社會に先立つて形成される。家族・種族其の他の原始的集團は其の適例である。併し人口の増加と交通接觸の頻繁の爲めに、共同社會は漸次分散作用を起し、その代りに利益社會が發生し發達する。そして人間は益々共同社會との關係が減少して利益社會的結合が増加し、斯くして種族的文化が國家的文明へと進展する。

第二項 アルフレッド・フィーアカント

Alfred Vierkandt (1867—)

Gesellschaftslehre; Hauptprobleme der philosophischen

Soziologie, 1923.

フィーアアカントはベルリン大學の社會學教授であり、ジンメル死後は次項に述べるヴィーゼと相竝んで、現代獨逸社會學界に於て最も名聲勢力ある人である。元來文化哲學者であつたが、又種々の社會學的研究を爲し、殊に「社會學——哲學的社會學の主要問題」と題する一九二三年の著述以來、社會學者として最も重きをなすに至つた。

彼れはみづから自己の社會學を、ジンメル社會學の更に發達した形式社會學だと稱してゐる。併し種々の點に於て、ジンメルとは趣を異にしてゐる。大體の構造はジンメル社會學の概念を基礎としたものであり、それにテニエスの共同社會と利益社會説を多分に取り、更に米國ハーヴァード大學社會學教授マクドゥーガルの社會心理學(William McDougall: An Introduction to Social Psychology, 1906)の本能論と、獨逸フライブルヒ大學の哲學教授フッサールの現象學(Edmund Husserl: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 1913)の本質觀照の方法等を混入して、一種の社會學體系を構想したのである。彼れは先づジンメルを其のまゝ受け繼いで、社會學を「歴史哲學的百科辭典的綜合社會學」と「分析的 formsociology」とに二大別し、前者を「舊型」後者を「新型」となし、自分は後者の一

代表者を以て任じた。前者は普遍的人類進化の法則を究めやうとし、先づ人類・種族・民族・國民階級等の進化興亡の原則や、個々の文化財の起源發達や、歴史の展開法則等を研究するが、後者は集團生活のこれ等内容的の意義は全然問題とせず、たゞ其の社會化の形式を觀察し、團體内の成員間に存在する社會的諸關係を發見し説明することを目的とすると主張する。

次に彼れは、形式社會學の特徴たる分析を、最も深く最後の根柢に横はる要素にまで辿り着いて行ひ、吾人の認識を深刻正確ならしめる爲めに、現象學の本質觀照法を用ひることを主張する。そして社會生活の最後の諸形式・諸社會力・諸社會事實・社會の本質から生ずる諸構成物（特殊の生成的文化財）等を現象學的に把握し、此の把握の結果を基礎として經驗的社會事實を歸納的に研究し、斯くして相互作用の成果たる文化を説明する文化學と、社會生活の諸現象を社會化形式に因つて説明する特殊社會學とが成立する。併し社會生活の結果たる文化財に就ては、内容と形式とを混同してはならない。内容は歴史的展開の過程に於て絶えず變動するけれども、形式は不變的である。

以上の如く論じてフーアカントは、彼れの著書の表題が示す如く、一種の觀念哲學的特殊社會學の樹立を企て、そして社會過程論などは顧みないで、內的結合とか、內的相互作

用などと云ふ現象學的構想に耽つた。又彼れは、内容は一切排除して形式だけを扱ふと宣言しつゝ、マクドゥーガルの社會心理學説を利用して、本能論や感情論等の多分の内容をも取り扱つてゐる。

第三項 レオポルド・フォン・ヴィーゼ

Leopold von Wiese (1867—)

1. Allgemeine Soziologie als Lehre von den Beziehungen und Beziehungsgebilden der Menschen, 1924.
2. Soziologie: Geschichte und Hauptprobleme, 1926.

レオポルド・フォン・ヴィーゼは獨逸のコローン大學の社會學教授であり、ジンメルの形式社會學を最も良く體系づけた第一人者として名聲ある學者である。彼れは其の社會學が、ジンメルの外、白耳者の社會學者ワックスウェーラー (Emile Waxweiler; Esquisse d'une Sociologie, 1906) 及び米國の社會學者ロッシに負ふ所が大であることを自認してゐる。殊にジンメルとロッシの影響が彼れの業績に最も著しく現はれてゐる。彼れは先づ綜合社會學を徹底的に否定して、社會形式化を對象とする特殊社會學を主張した。そして人間の相互的行動から生ずる結互又は分離の過程、即ち社會過程と、此の動的社會過程の結果として生ずる社會關係と、此の關係から生ずる社會的構造物——例へば群集・集團・其の他

の抽象的集合體——とを研究するのが彼れの社會學の目的である。併し實際彼れが爲した大部分は、社會過程の分析整序であつて、これに依つて社會關係の本質や結果をも把握しやうとする。社會に關しては、彼れはジンメルと等しく、それは動的な關係の觀念であつて實體ではないと云ふ。『空間的存在の實體であると云ふ意味ならば、左様な社會なるものはどこにも存在しない。ワックスウェーラーが「社會とは、若しそれを徹底的に探求しやうとすれば其の意味が不明になる所の言葉に過ぎない」と云つたのは正當である。社會と云ふ概念は要するに、それは一つの動詞的概念であり、出來事であり、過程であると説明される時に於てのみ承認し得る所のものである。』と云つた。

ヴィーゼの社會學は、特にみづからそれを「關係學」と名附けたけれども、事實に於ては社會過程を中心問題として、取扱つて居る。そして社會過程の分析説明に關しては、米國のロスの「社會學原理」(Edward A. Ross: The Principles of Sociology, 1920) に少なからず範を取つてゐることが認められる。彼れは先づ社會過程を、單に結合過程だけに限らず、結合過程と分離過程との錯綜であると見る。そして此の社會過程の形式、即ち彼れの云ふ人間關係の形式を研究する科學が社會學なのである。彼れは社會學の微細に亘る分類をする。先づ個人間の關係と集團間の關係とを區別する。

個人間の關係は更に (1)結合的關係(接觸・接近・適應・合同・統一)——(2)分離的關係(競争・對立・衝突)——(3)兩者の混合型に三分する。次に集團間の關係は (1)分化的過程(社會的昇進と低下・支配と服從・階級化・選擇・個性化等)——(2)複合過程(統一化・安定・定型化・社會化)——(3)破壞的過程(搾取・偏頗・腐敗・形式化・商業化・過激化・掠奪)——(4)修正的建設過程(制度化・職業化・解放)等に分類される。そしてこれ等の各項目が更に多數の細目に分類され、全體に於ては名目上約六百五十種の形式表が提供された。そしてこれ等の分類に、形式論理的な吟味や心理學的説明が加へられ、無限大に複雑な人間關係を、主として形式論理的な分類の下に壓縮して體系づけやうと努めたのである。

彼れは形式社會學者中最も進歩的組織的の代表者であり、現に益々英・佛・米の社會學の特徴を研究しつつ、獨逸形式社會學の弱點を補足修正して、一層科學的な體系を樹立しやうと努力してゐるのである。

第五款 結 論

形式社會學の特徴は、第一に特殊社會學の確立を目的としたことであり、第二に人間關係と社會過程との分析分類に専念して其の組織化に貢献したことである。即ち社會學の創立建設期に於て、一面には創始者・開拓者に通有な建設的情熱の爲めと、又他面には包括的全面的な理論體系の樹立におせ

つた爲めに學的領域が餘りに擴大し、且頗る散漫になり勝ちであつた社會學の方法論上に深刻な疑惑を投げかけ、適當な注意を喚起して、嚴密な自己批判に對する最も良き刺戟となつたのである。そして更に進んで社會過程の研究上に相當の業績を残したことは、此の學派の貢獻として特に數へべき重要點である。

然らば此の學派の種々の主張や理論は果して如何なる科學的價値をもつてゐるか。此の學派は其の發生地獨逸、及びその祖述者の多い吾が國に於て、特に重きをなしてゐる學說であるから、其の要點を一瞥しやう。

(1) 此の學派は、從來の社會學を「舊型」と呼び、みづから「新型」を以て任じてゐる。社會學と名付けられた學問に於ては確かにこれは新しい試みではあるが、その研究方法たる社會過程の形式方面の研究と云ふ特徴は、彼れ等の主張するやうに彼れ等の創意ではなく、従つて新しいものではない。實は最も古くギリシヤ、ローマ時代からある一つの方法である。法律學、殊に憲法・行政法・國際法等所謂公法なるものは、或る意味に於ては、人間關係の形式方面の學である。そこには權利・義務・支配・服從・階級・契約・搾取・掠奪・固執・繼續・破壊・分離等の社會關係の形式が、分析・分類・説明されたのである。又分業・協働・結社・交換等の社會關係の形式は既に早くから理論經濟學が取扱つた問

題である。

(2) 社會關係の形式の研究は形式社會學の獨特のものであり、絶対に他の科學の取扱はなかつた領域であると云ふ主張は、右の理由に依つて又成立しないことが解る。他のいづれの社會科學も、社會關係の内容を扱ふと同時に、或る程度まではやはり又形式の研究を爲してゐる。殊に彼等の云ふ「舊型社會學」は、大いにこれを論じたのである。

(3) 社會關係を嚴密にその形式と内容とに分離することが出来、そして純形式的のもの、即ち相互作用に依る過程を研究するのは形式社會學だけだと云ふ。ジンメルはこれを幾何學と比較して立論説明した。幾何學はその内容如何に何んの關係もなく、球の形式だけを對象とする事が出来る。それと同様に社會學は、支配・服從・競争・模倣等を社會關係の内容とは全然獨立して其の純形式だけを對象すると云ふ。併しこれは大なる疑問である。空間的形式を扱ふ幾何學や、論理的形式を扱ふ形式論理學に於ては、純形式そのものだけの研究は成立するけれども、社會現象に於て、内容と絕對獨立した純形式は想像以外には存在しない。同一のコップは、酒を入れても水を入れても砂を入れても、其の形式は不變であるが、社會制度は、人口の大小、人種・民族・年齢・性別・教育・宗教・階級其の他の文化基礎に關する社會成員の物的並びに心的内容の如何に因つて、其の形式が變化せざるを得ない。

(4) 此の弱點を補ふ爲め、或る者は形式の意味を變へた。そして現象又は概念中比較的廣汎な意味のものを形式と呼び、其の内に包含され得べき小規模のものを内容とする。例へばシタンムラーの如きである。(R. Stammler: Theorie der Rechtswissenschaft, 1911, s. 7.) 併し此の意味で形式と内容とを區別するならば、それは結局「社會學は、社會現象の最も一般的な通性を研究するものであり、他の社會諸科學は其の部分的特性を研究する」と云ふことになり、彼れ等の否定し攻撃する「舊型社會學」の云ふ「一般社會學」になつてしまつて、最早特殊科學としての存在權は消滅する。

(5) 此の内容と形式との完全な分離の不可能なことは、形式社會學者の業績其のものの中に多分にこれを認めることが出来る。彼れ等は純形式のみを取扱ふと繰り返し繰り返し揚言するに拘はらず、いずれも何等かの内容——生物學的・心理學的、歴史學的・人類學的・政治學的・宗教的・藝術的等——を包含する矛盾に陥つてゐる。これは内容を全然無視して形式だけを觀察したのでは、社會過程の真相の満足な把握が出来ないからである。形式も内容も共に考慮に置き、研究する問題の性質と場合とに應じて適宜にこれを選択・分析・比較・綜合することに因つて、始めて最も効果的な實證的觀察が出来るのである。

以上の諸點から考察して、形式社會學は確かに貴重な一面

の眞理を有し、社會學の健實な發達に大いに貢獻したけれども、それは寧ろ從來の社會學の方法論的批判修正にあつて、形式社會學それ自身としては著しき建設的業績はまだ示してゐない。そしてみづから主張するやうに、獨立な一特殊社會科學としての體系の樹立にも成功しなかつた。如何なる他の科學とも重複しない絶對獨立の科學と云ふことが、元來一種の空想である。これは社會科學だけではなく自然科学に於ても同様である。所謂形式科學と呼ばれる、純粹數學と論理學を除けば、他は皆互に多少の重複性を持ち、必らず何ん等か他の科學の提供する與件の一方的又は相互的利用に依つて成立する。物理學の與件と無關係な化學はなく、物理及び化學の與件は必ず生物學に織り込まれ、生物學・解剖學・生理學の與件は心理學に利用され、政治學や經濟學には心理學的與件は勿論のこと、生物學的・歴史學的・倫理學的・哲學的與件までも多分に織り込まれて成立する。これ等は何れも他の科學の領域に屬する與件を全然切り離せば、残る所は極めて貧弱な、學としての存存價值すら頗る疑はしいものになつてしまふ。相關聯して全一體を爲す社會生活關係を、研究のより大なる正確さを期するための便宜上夫々方法や對象を分割分擔して取扱ふのが科學の分業の性質であるのに、それを却つて逆に社會生活が科學の分類の爲めに存在するかのやうな分立排他的態度を以て觀るのが誤りである。若し其のやうな見地

から眞に價值ある獨立科學が成立する可能性があるならば、徒らに高踏的な方法論に終始せず、一日も早く實際其の様な體系を作り上げてこれを天下に示す必要がある。實物見本を一個も提供しないで作り方だけいくら論じて見ても、それは決して完全な經驗科學にはなり得ない。形而上學的又は認識論的哲學問題としてならば、それは又別の意味で存在價值もあるが、科學としては見込みはないのである。

勿論形式社會學は、單なる方法論以外に確かに相當な實質的研究を發表した。それは主として社會過程に關してである。併し此の社會過程の研究も、決して彼れ等の獨創でもなく、又彼れ等が最も良くこれに成功してもゐない。それは大部分他の社會學が、スペンサー以來いづれも研究し、殆んど悉く開拓した問題に過ぎない。しかもそれは社會學の全部ではなく、單に一部分の問題である。ジンメル其の他の者の社會關係の分類は、既にスペンサーに依つて或る程度まで論じられ、又タルドの反復・對立・適應・模倣は立派な社會過程の根本法則である。比較的最も優れたヴィーゼの分類すらも、舊型社會學の元老ロッスに於て其の大部分を見出すことが出来、スペンサーにさへ既に其の根本的分類方針が示られてゐる。此の他ギディングス、スモール、クーレー、ヘーズ、エルワード、ワックスウェラー、バーク、其の他多數の形式社會學以外の社會學者の論文や著書を見れば、いす

れも種々の優秀な社會過程の分類・分析・綜合説明が加へられてゐるのであつて、そこには最早形式社會學が特權又は優位を主張すべき何等の餘地も残されてゐないのである。これ等社會過程論以外に於て、形式社會學者の業績中、特に價值を認められる部分は、形式に關するものではなくて、寧ろ彼れ等が意識的か又は無意識的か、形式の範圍を超脱して内容の領域へと侵入した場合であることは一種の自家撞著である。要するに形式社會學は、最新でもなく、最上でもなく、勿論唯一の眞の社會學でもない。あらゆる他の社會學と等しく、社會學發達史上の一存在であつて、諸他の社會學派や社會學者と共に、社會學殿堂の建設工作に於て、其の一枚の基石又は一本の支柱を貢獻した一職工に過ぎないのである。

第十節 エミール・デュルケームと 集合表象學派

Emile Durkheim (1858—1917)

1. De la division du travail social, 1893.
2. Les règles de la méthode sociologique, 1897.
3. Le suicide, 1897.
4. Les formes élémentaires de la vie religieuse, 1912.

第一款 デュルケーム

エミール・デュルケームは、高等師範學校出身であつて、初め中等教員として普通教育に従事したが、後に獨逸に遊學して、當時哲學及び心理學に於て名聲の高かつたヴントや、獨逸社會政策學會創立者且新歴史派經濟學建設者シュモルラー (Gustav von Schmoller, (1838—1917) などについて社會科學を研究し、歸國後一八八七年にボルドー大學に招聘されて教育學と社會學の講義を擔當し、此の地で社會學者として名聲を高めたのである。後一九〇二年にパリ大學に轉任した。彼れは廣汎深刻な哲學的思索能力をもつと同時に、微細に亘つて事實を探求徹底しやうとする用意周到な自然科學者の素質を兼ね備へた、社會科學研究の最適任者であつた。彼れは世の多くの所謂「原則學者」達のやうに、一夜作りの思辨的原理原則の類を陳列することは出来ない眞の意味の科學者であつた。苟くも彼れの發表したあらゆる假説は、先づ事實の忠實な研究の基礎に立ち、そしてそれ等を更に關聯した與件の歸納的考査に因つて實證しやうと努力する。彼れは佛蘭西傳統の科學主義の長所を良く代表し、コントの精神を繼承して實證主義に徹底しやうとしたのである。其の學風は廣く母國の學界に影響を及ぼし、法律・道德・宗教・教育等の方面に至るまで著しく感化を與へたのである。そして社會學界に於ては、タルドと相竝んで、コント以後佛蘭西が生んだ最高權威者であり、且現在にあつては、タルドの所謂個人主

義的・主觀的・心理學派なるものゝ勢力を壓倒して、集合主義的・客觀的な彼れの所謂「社會學主義」(Sociologisme)は今や佛蘭西唯一の社會學であるかの如き觀を呈してゐる。

第二款 デュルケーム學派の特徴

デュルケーム學派の主張の要點は次の如くである。

- (一) 集合意識と個人意識との相違——即ち兩者は全然異なる要素から構成される。
- (二) 社會學は、生物學にも心理學にも少しも依存しない。社會學は、社會それ自體の特性を獨特な説明法で解釋する。
- (三) 斯く集團意識と個人意識、及び社會的事實と心理的事實との區別をする爲めに、「外在性」及び「拘束」と云ふ二つの概念を導入する。
- (四) 集團的意識と社會的事實を對象とするものが社會學であり、個人意識と心理的事實を對象とするものは心理學である。そして前者の特徴は其の外在性と拘束性とである。

先づ第一に社會現象は、其の本質上生物現象とは別異のものである。後者は自然の有機的現象であるが、前者は一種の集合表象として成立する。又社會現象は外在的であり、個人の意識とは別に存在するが、心理現象は内在的であつて個人意識それ自體の中にある。斯様に集合表象が個人の意識の外に存在し、そして種々の道德的規範・宗教的信條・法律的規

定・論理的法則等の様式に於て外部から個人の精神上に働きかけること、次にこれ等の集合表象は、個人がそれを欲すると否とに拘はらず、個人の上に命令し個人を制約する所の上位的拘束力を備へてゐることが、社會現象の特徴であり、それのない場合には單なる心理現象である。(「社會學的方法の規程」第一章)

即ちデュルケームは、社會心意なるものゝ實在性を認め、社會は個人心意や個人表象の實體とは全然別個獨立の集合表象に依つて成立すると考へた。そして彼れは其の著「宗教生活の基礎的形態」中に次の如く論じた。

「社會は往々考へられるやうに、論理的又は非論理的な統一なき漠然たる存在體ではない。全然これと反對に、其の集合意識は、精神生活の最高形式である。それは意識の意識である。個人的及び局部的偶發事象の外部及び上位に置かれて、社會は事物を其の永遠的並びに本質的形相に於てのみ眺める。そしてそれ等を理解し得べき觀念に晶化する。社會は個人よりも一層深く一層良く理解するものである。」

第三款 デュルケームの社會分業論

「社會分業論」は、彼れの最初の社會學的名著である。それは社會連帶性に關する研究であつて、實際の社會事實の嚴密な分析實證的文献である。社會連帶性の研究は、古代ギリシヤの哲學者始め、其の後多數の人々に依つて既に研究さ

れ、アダム・スミス、サン・シモン、コント、スペンサー等も皆これを論じたが、デュルケーム程に微細な事實の與件の觀察から出發して立論した者はまだなかつた。それがデュルケームの功績である。

先づ彼れは、社會の分業と社會現象との間の因果關係を求めやうとした。そして社會の種々の心理的變化の系列は、單に客觀的社會過程としての分業の變化の函數に過ぎないと斷定した。彼れは、種々の人間行動や心理状態が、原始的共同社會から徐ろに人口の増加と分業の發達との爲めに變遷した歴史的事實を引證して立論した。

(一) 一般精神的變化

先づ最初の社會形式に於ては、精神的・道德的・社會的調和が完全に社會成員間に保持され、信仰・信念・意見・風習其の他の行動が互に近似し、相違は主として遺傳的部分に限られた。傳統の支配・個性の缺乏が其の特徴である。

然るに人口が増加し、接觸が頻繁になり、分業が行はれるやうになるに従つて變化が生じた。成員間の精神的道德的畫一性が消滅し、個性・特異性の増加を來し、趣味・信仰・意見・道德規準等は益々一致性を減少する。分業は個人の特殊化を誘致する。遺傳の決定性は遞減し、世襲階級的制度は減退する。

(二) 法規道德

法律規定や道德規準も、最初は社會意識や社會的良心の一樣性の爲め、強度な畫一的・統合性をもち、對全社會的であり、嚴密に抑壓懲罰的であつたが、一般的共通的な社會意識と社會的良心の減退と共に漸次部分的・對個人的になり、緩慢自由になり、契約的・自己統制的になる。即ち曾ては統制機能の最大部分を掌つた禁制的懲罰的法規は、自由契約的法規の増加につれて後者と其の位置を轉倒する。そして成員全體の一樣性の基礎に築かれた機械的連帶性は、根本的に性質を變更する。最早成員間の個性の一樣性は消失して、それは連帶性の根本紐帶とはならなくなる。これに代つて分業が社會の新紐帶となる。即ち分業の基礎の上に團結した多様性の成員が、銘々特殊的機能を分擔しつゝ協力するところに連帶性が確立される。曾ては個性の畫一的紐帶の下に成立した機械的連帶は、今は分業の有機的連帶性に變形する。

(三) 政治

最初は社會の重大問題は、全集團成員の一般集會の合議に依つて決定し、又官公職は世襲的であつたのが、政治的機能は特殊化されて専門の政治家の手に移り、世襲的地位は減少又は消滅し、政府と平民との關係は命令強制的から益々契約的自制的に變る。

(四) 經濟

初期の共産的・強制畫一的性質を帯びた經濟制度は、追々

特殊化・個人主義化・契約化し、あらゆる地位と職業の門戸開放となる。分業の結果、特別技能の世襲的獨占が消滅し、従つて世襲的な社會的地位も衰滅する。

(五) 宗教

原始社會に於ける宗教は、成員の個性の缺乏を反映して非人格的・非個性的なトテミズムであり、地方的・種族的の愛郷心・愛族心を支持鼓吹するものであつた。それが分業の發達と成員の個性化の結果、人格的・個性的の多神又は一神教へと遷り、地方的・種族的の神は一般的・宇宙的になる。愛郷・愛族的分子は減退して、四海同胞主義・世界主義の強化を見る。

次に彼れは、進んで分業發達の原因に遡つて探求する。そして、分業の増加發達が、主として幸福を求める人間の心理的傾向に因ると云ふ一般的解釋を否定して、分業の發達が必ずしも幸福の増進とはならず、事實は寧ろ反對であることを立證した。即ち一方に於ては高度の分業化は却つて不幸不満・神經過敏・自殺等の現象の増加を招致し、他方に於ては原始人の生活状態が一般的に文化人のそれよりも満足と幸福とに満たされてゐる事實が、幸福は分業の發達に反比例する傾向をもつことを立證する。故に分業の發達は、人間の幸福探求心以外の客觀的社會状態に其の原因を求めなければならない。

さて斯様な原因の一つは、密度即ち社會の形態學的機構の「動的・道德的密度」の増大を伴ふ人口の増加である。斯様な増加は、生存競争を強調する。人口増加的過程を辿りつゝある社會の成員が、皆同一の職業に従事するならば、彼れ等の生活資料補給の機會は減少する。就業員の最大過剩をもつ職業に於て競争は最激甚である。斯様な場合に、彼れ等が特殊化してそれぞれ別業に分散すれば、互に生存競争を緩和して共存することが出来、生活資料を一層容易に獲得し得られる。それ故に人口の増加は分業の増加を惹き起す。そして分業の増加は既に述べたやうな社會過程を誘導し、個人心理や社會機構の變化を結果することになる。

以上がデュルケームの社會分業論の要旨の瞥見である。彼れの第二の著書「社會學研究方法の規準」は、分業論に現はれたやうな彼れの社會觀に關する一般的方法論を述べたものであつて、社會學的方法論上貴重な一文獻であるが、これは分業論其他總ての彼れの業績を通じて一貫して含まれて居るものであるから、此處に特に説明することを省略し、最後の結論に於て總括的に検討することにして、次に彼れの自殺論を説明する。

第四款 自殺論

社會分業論に於ては、デュルケームは主として歴史的與件を利用して社會連帶性法則の實證的研究を試みたのであつた

が、自殺論に於ては統計的與件の豊富な利用に依つて、道德的社會現象の過程の一例としての自殺現象を分析説明しやうとしたのである。

先づ此の研究の重要な點は、純社會的見地から自殺現象を観察したことである。彼れは自殺現象は、精神病的要因や、人種的・遺傳的・地理的要素や、模倣其の他の純心理的動因や、其の他戀愛・貧困・不幸等の個人的理由動機から説明することは出来ない。それは嚴密な統計的與件の分析の結果、全然社會的原因の一結果である。斯様に考へて、彼れは自殺を(一)利己的自殺、(二)利他的自殺、(三)變則的自殺の三つに分類し、因果律的説明を試みた。其の大要は次の如くである。

(一) 利己的自殺

利己的自殺は個人の社會的隔離、即ち集團の社會的結合性の強度の減退に因る。故に獨身者・離婚者の間にあつては、既婚者間に於けるよりも自殺律が高いのである。家族的紐帶は、結婚生活者の社會的隔離を減少する。強く教義的であり信徒を統合する所の羅馬舊教徒の間には、斯様な羈絆から解放された新教や自由思想家の間に於けるよりも自殺率が低い。同様に、勞働運動の盛んな時や戰時などのやうに、個人が銘々の個別的に築いてゐた外殻を脱して社會的隔離が減少し、それに反比例して、社會結合が増大する時期に於ては、

自殺率は急速の減少を示す。そして斯様な非常時が過ぎ去つて復個人が元の個別的な外殻の中へ立て籠る時には、再び自殺率は急騰する。

(二) 利他的自殺

個人の強度な集團内吸収作用に因つて生ずる——即ち利己的自殺の場合と反對の情勢に支配されるものである。個人は殆んど完全に集團統制の下に立ち、個別的な人格や個性は殆んど顧みられず、たゞ集團の一員としてのみ存在を認められる状態に起因する。此の集團吸収作用は、集團に要求された場合、又自分の行動が集團を辱しめたと考へられる場合に、直ちに自己を犠牲にする所の個人の義務的感情となつて心理的に表現される。原始的組織の集團成員間には、此の集團吸収作用と義務の心理が機械的連帶性となつて表現される。軍隊内に於ける軍人や其の他強烈な士氣を具へた強固な結合性をもつ集團内の成員間に於てこれを見る。即ち自殺の統計的カーブは、社會學的にのみ説明され得る。一定の社會の一定の時に於ける自殺率を決定するものは、其の社會の道德的組織である。

あらゆる社會に於て、個人の自殺を強要する所の或る勢力の集合力がある。これ等個人の行動は、外觀上各自の個人的氣質性格の表現であるかの如く見えるけれども、實はそれ等はそれぞれ對應する社會組織の結果であり、外面的表現であ

る。各社會は、其の形態學的構造や集合的組織に従つて、自殺行為に對するそれ獨特の集合的性向をもつ。そして自殺に對する個人の性向を決定するものは、此の集合的性向である。

(三) 變則的自殺

最後に變則的自殺は、社會的平衡と社會の道德的組織の突然的破壊に因つて發生する。經濟的危機・破産等の後に起る自殺は此の類型に屬する。自殺を貧困の結果に歸しやうとする通俗的説明は誤りである。そこに自殺が殆んど稀である多數の貧民や貧困階級があると同時に、自殺現象は貧困を誘導する所の社會的平衡の攪亂の場合にだけでなく、繁榮に導く平衡の破壊に因つても増加する。即ちいづれも社會的變則状態の結果である。

第五款 宗教論

彼れの名著「宗教生活の基礎的形態」は、宗教の性質・起原・形式・機能・結果・變形等の問題を社會學的眼光の下に忠實に分析したものである。彼れは宗教を以て「神又は超自然的力に對する信仰形式」としての傳統的宗教觀念に峻烈な批判攻撃を加へた。そして「宗教とは、神聖物即ち一般から分離禁絶された事物に關する信仰と慣例との統一された一體系であり、これ等の信仰と慣例とは、それを固執する總ての人々を寺院と稱する道德的一共同社會に連結する。」と宗教の定義を下した。そして彼れの理論の要旨は次の如くであ